

---

# ダイの大冒険でよろず屋を営んでいます

トッシー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ダイの大冒険でよろず屋を営んでいます

### 【Nコード】

N2165Z

### 【作者名】

トッシー

### 【あらすじ】

ひよんな事からダイの大冒険の世界にトリップしたオリ主。能力は採取と錬金釜による合成だけ。はたしてオリ主は最終装備、旅人の服な勇者パーティーの助けになれるだろうか？

本日の目玉商品『万能薬』（前書き）

ダイの大冒険ってラストでも武器以外はシヨボイですね。

なにせ装備を新調した途端、強敵との戦いで壊れたり敗れたり燃えたりして無くなっちゃいますから（笑）

しかしドラクエとしてそれはイカンとオリ主と共に一念発起！

ほのぼのとマツタリとよろず屋をやっ払いこうと思います。

## 本日の目玉商品『万能薬』

俺の名前はタケルです。

ひよんな事から異世界に来てしまったトリッパーです。

テンプレよろしくで特殊な能力、持っています。

最強じゃないけど…。

「いらっしやい、ここはよろず屋だよ」

俺の前には様々な道具が並べられている。

当然これらは商品であり、俺の飯のタネだ。

勿論そんじょそこらの店とは格の違う商品を取り扱っている。

その自信と自負がある。

本日の商品は

特やくそう (HP 90 ほど回復) 100G

月のめぐみ (HP 90 ほど回復、麻痺を回復) 210G

万能薬 (HP 90 ほど回復、毒、麻痺を回復) 360G

賢者の聖水 (MP 90 ほど回復) 1240G

毒針 (偶に一撃で敵を葬る) 980G

命の指輪 (歩く度にHP回復) 2500G

祈りの指輪 (使うとMP回復。但し壊れることもある) 2800G

それぞれ20個用意してある。

値段が高い？

いやいや適正価格ですよ。

けっしてポツタクリではないです。

第一、本来ならこの世界には絶対に存在しない一品ばかり。

このくらいの値段にしてもバチは当たりません。

「これは興味深いですね」

おっと、自分の世界にトリップしてる場合じゃない。

お客さんだ。お客さんは神様です！

俺は満面の笑顔を向けて言った。

「いらっしやませー」

「こんにちは、

この店は素晴らしいですね。とても露店とは思えないですよ」

そこにいたのは男二人組の旅人だった。

成人した男性と、まだ幼さの残る顔立ちをした少年。

男性の方は、優しい顔立ちをしており、掛けたメガネが更にその表情を際立たせていた。紫色の髪を左右にカールさせていて貴族っぽい。

腰には剣を挿している。戦士だろうか？

少年の方は黒い髪にバンダナを巻いており、腰にはロッドを挿している。

魔法使いか僧侶のようだ。

(どこかで見た事ある二人組だな、どこだっけ？)

俺は二人を観察した。

お金を持っているようにはとてもじゃないが見えない。

この二人がどこの誰かは別にしてもコチトラ商売だ。

俺はジト目で二人組を見た。

男は興味深そうに並べている商品を一っ一っ手にとって眺めている。

「先生、いつまで見てんですか。もう行きましようよ。」

「ちょっと待ってください、ポップ。もう少しだけですから。」

ん？

センセイ？ポップ？

まただ。この二人、何か引つかかる。

何だっけ？

「大体、何ですかこの値段！」

薬草が100G！？ぼったくりもいいところっすよ！」

ムカ！

何だと！この野郎！

それは聞き捨てならねえな！

「おい、お客さん！ぼったくりとは聞き捨てならないな！」

ソイツは唯の薬草なんかじゃないんだよ！

この俺が心血注いで調合した特やくそくだ！ケチつけんな！」

「な、なんだと！」

こんな怪しい薬草がなんだってんだ！？

普通の薬草とどう違っつてんだ！」

「聞いて驚け！」

その薬草は普通の薬草の約3倍の効果があるんだ！

ベホイミ以上なんだぞ！」

「だったら普通の薬草を3つ買ったほうがお得だろうが！」

「そりゃ安全が確保できればだろうが！」

非常時にチマチマと薬草で何度も

回復してる暇があると思ってるのか！？」

「何イ！？」

「この特やくそうはな、即効性なんだ！」

回復魔法並なんだよ！だからこそ100Gは高くない！」

むしろ安いくらいだ！だから買え！」

「ふ、巫山戯んな！どさくさに紛れて何いってんだ！誰が」

「特やくそうと月のめぐみ、そして万能薬をそれぞれ2つお願いします」

「せ、先生っ！？」

ほう、この先生は物の価値が分かっているようだな。  
俺は最高の営業スマイルを浮かべて声を上げた。

「毎度ありがとうございます。1340Gになります」

「これでいいですか」

「はい、1340Gちょうど頂きます！またのご利用をお待ちしております！」

俺は受け取ったお金をしまい込むと、お客様に向かって深々と頭を下げた。

「ところで」

お客さんはお買取った道具を袋に入れながら聞いてきた。

「あなたは一人で商売を？」

「ええ。まあ」

「まだ若いのに大したものですね」

何だこの人。

男性は屈託の無い笑顔を向けて感心する。

そこに悪意は全く無い事が感じられる。

その笑顔に俺は思わず目を逸らしてしまう。

「……えっと」



「ああ、すいませんね。先程、ご自分で薬草を調合したと言っていたので」

つい興味が出てしまったのですよ。

男性はそう言った。

俺を褒めているのが気に入らないのだろう。

少年の方は面白くなさそうにしている。

「先生、もう行こうぜ」

「はいはい、分かっていますよ。それじ私達はこれで」

「はい、またどうぞ」

心に引っかかりを残したまま、俺は二人を見送った。

ギルドメイン大陸。

この世界の中心に位置する最大の大陸だ。

1年前、俺はこの大陸最大の国、ベンガーナ王国の郊外にある小さな村で目を覚ました。

混乱して、嘆いて、絶望して、そんな俺を村の人々は優しく受け入れてくれた。

この世界の常識を学んでいく内に俺は自分の置かれた状況を受け入れ納得した。

納得できた一番の理由はやはり魔法と魔物の存在だった。

村の外で見かけたプルプルと震えるゼリー状の魔物を見た時、俺は

思いっきり肩を落として言った。

「ドラクエかよ」

そう、この世界はドラゴンクエストの世界だったのだ。ドラゴンクエストシリーズの中のどれかは分からない。もしかすると完全にオリジナルかもしれない。

しかしドラクエと分かった時、俺の中にあつた絶望は完全に消えた。絶望は希望へと変わったのだ。

だってドラクエだよ？

しかも村の人の話では魔王は既に勇者によつて倒されて平和な世界。村の外でスライムに襲われなかつた理由も頷ける。

命の危険もなく、この世界を堪能できるということだ。もしかすると魔法を覚えることが出来るかもしれない。となると俺のステータスつてどれくらいだろう？

その時だった。

俺の脳裏に自分の『つよさ』が浮かんだのだ。

「うわっ、極端なステータス。しかもオレって弱っ！」

浮かんだステータスは次の通りだった。

タケル

レベル：1

最大HP：20

最大MP：500

ちから：10

すばやさ：10  
たいりよく：10  
かしこさ：256  
うんのよさ：256  
EXP：0

攻撃力：10  
防御力：7

どうぐ

E：普段着

呪文・特技

錬金釜  
採取  
大声  
口笛  
寝る

俺は自分の能力値よりも特技に注目した。

錬金釜？採取？

何それ、どうやって使うんだ？

気がつくとかーソルを合わせて採取を選んでいた。

採取を行いますか？

？はい

いいえ

選択すると、目の前に光るものが。

光っているものに手を伸ばすと。

太陽石を2個手に入れた

気がつく俺の掌の中にはぼんやりと光を放つ石が二つ、しっかりと握られていた。

実際にこの商売を初めて1年になる。

この世界で得た俺の能力。

採取と錬金釜。

採取は割と何処でも利用できる。

その辺で適当に使えばレミラーマよろしく辺りが光るのだ。  
光に触れると、素材が手に入る。

俺は自分の能力は最大限に利用した。

そうでなければ生きていくことなんて出来なかったからだ。  
はつきり言つて俺に戦闘力はない。

だがそれでも俺の能力はチートといつても良い。

何で自分にこんな能力があるのか分からないが、考えたところで答えなど出る筈がない。

ご都合主義ということ、とつくの昔に諦めた。

この世界に来て1年。

魔物が普通に存在する異世界で、俺はほのぼのと、旅のよろず屋を営んでいる。

勿論平和な今の時代でなければ旅など出来ない。

俺の特殊なよろず屋は様々な場所を旅しないと成り立たないのだ。  
なにせ錬金には素材が必要。

そして優れた素材を得るには採取が必要不可欠だからだ。普通の店で売っているものでは優れた物は作れない。だからどうしても旅を続ける必要がある。

「ああ、平和って最高っ！」

俺は岩場で採取を行いながら悦に浸っていた。

岩場で適当に採取しているだけで、質の良い鉄鉱石やミスリルが手に入るのだ。

これだからこの商売は止められない。

「…やっぱりやめようかな〜この商売」

「ぐるぐるるるる」

採取もキリの良いところで切り上げ、街に戻ろうとした矢先だった。リカントが俺の前に立ちふさがった。

ヨダレをだらだらと垂らしながら、血走った視線を俺に向けてくる。あれ？平和なドラクエ世界は？

本日の目玉商品『万能薬』（後書き）

オリ主はよろず屋としてダイの大冒険の世界では絶対に手に入らない回復アイテムや武具を売りさばいていこうと思います。

多分、お金足りなくて買えないことは無いと思います。  
レオナ姫がいるから…。

**本日の目玉商品『光のドレス』（前書き）**

行商を続けるオリ主。

一体何時になったらダイの大冒険の世界と気づくことやら……。

## 本日の目玉商品『光のドレス』

「ガアアアアアアア！！！」

「うわっ、こっち来んな！」

リカントの叫び声と同時に俺は背を向けてダッシュ。  
当然逃げる。

なにせ俺には戦闘力はない。

レベル1でどうやってリカントに勝てと？

装備が充実していても現実に戦うんじゃ話が違う。

戦って勝てる相手じゃない。

俺は全速力でひたすら走る。

しかしここは岩場。

まともに走れる筈もなく、躓き転ぶ。それでも俺は立ち上がって逃げる。

だが

「い、いつの間に！？」

目の前の岩陰からリカントが飛び出した。

どうやら回りこまれてしまったようだ。

俺は急ブレーキを掛けて立ち止まる。

不味い。本当に不味い。

実戦経験無し俺にはマジでキツイ。

それでも生き残るために、俺は手持ちの道具を確認する。

「……………これだ」



錬金したばかりの取って置きの武器。

武器を操る事は出来ないが、武器に宿った力を使つくらいなら。

「俺にも出来る！」

俺は道具袋から一振りの長剣を取り出して叫んだ。

「氷結ッ！！！」

俺の声に反応して吹雪の剣の刀身が輝く。

ビュオオオオオッ！！！！

解き放たれた力はうねりを上げて吹雪へと変わりリカントを包み込んだ。

無数の氷の刃が嵐となってリカントへと殺到する。

「ギャアアアアアア！！！」

マヒヤドと同格、絶対零度の銀世界が一瞬にして目の前に広がった。俺を襲つたりリカントは……。

「ご愁傷様です」

リカントは氷の檻の中で息絶えていた。完全にオーバーキルですね。

「あーあ、これじゃあ暫く採取は無理か」

氷に閉ざされた岩場を見渡して俺は溜息を付いた。

「そういえばどうしてリカントが襲ってきたんだろう？」

確か勇者が魔王を倒して魔物は邪悪な意志から解放されてる筈

それなのに……っ!？」

ギヤア!ギヤア!ギヤア!

ま、魔物の声!？」

遙か遠い山向こうから魔物と思わしき声が聞こえてくる。

俺は思わず身を竦ませた。

じよ、冗談じゃないぞ!

もしかまた魔物に襲われでもしたら!？」

高価な装備があるからって安心など出来るわけがない!

第一、もし不意打ちでも受ければ間違いなく死ぬる。

街までかなりの距離がある。

もし道中襲われたら!？」

「……ん?そうだ、何ですぐに気が付かないだ俺のアホ!」

さっきはリカントの所為で気が動転してたんだな。

命が掛かっていたのに。

俺は道具袋からキメラの翼を取り出すと空に向かって放り投げた。

パラララタッタター

空高く舞い上がりながら、俺は確かにファンファーレの様な音楽を  
聞いていた。

もしかしてレベルアップ?

現在オレはベンガーナに来ていた。  
リカントを倒した俺は旅支度を整えると、直ぐにベンガーナに旅立  
った。

行商人の利用する比較的な安全な街道。

俺は聖水を惜しむこと無く利用、そしてレベルアップすることで新  
たに習得した特技『忍び足』を使いながら旅をする事で魔物を避け  
ながらベンガーナに到着することが出来た。

もちろん道中、採取を行うことを忘れなかった。

どうやら商人魂が染み付いてしまったようだ。

ベンガーナに辿り着いた俺は、さっそく商売を始める為に適当な場  
所を探す。

行商人である俺にとって露店を開く場所の確保は最優先事項だ。

「…………お？」

露店を開く場所を探して歩くこと約1時間。

比較的に人通りの多い広場に辿り着いた。

俺と同じように露店を開いている行商人が何人かいるので偵察とし  
て取り扱っている商品を覗いてみる。

よし勝った。まあ当然だな

俺はほくそ笑むと、広場の一角を陣取り露店を開いた。

今日お俺は武器屋さん！

そして本日の商品はコレだ！

玉鋼の剣：4200G

隼の剣：5000G

玉鋼の盾：1400G

魔法の盾：2000G

精霊の盾：3000G  
鉄仮面：2100G  
玉鋼の兜：4000G  
玉鋼の鎧：4800G  
魔法の鎧：5800G  
精霊の鎧：7000G

さっき錬金したばかりの出来立てホヤホヤだ。

並べてある殆どの商品がどの店にも取り扱っていない物ばかり！

次から次へと並べられていく見た事もない武具。

通行人達は次々と足を止めて興味深そうに見ている。

何せ商品と袋の大きさが一致しないのだ。

見た目どこにでもある布袋から次々と剣や鎧が飛び出していくのだ。

そりゃ驚くわな。

このチートな道具袋は気がつけば持っていた俺の財産だ。

こいつのお陰で俺は幾らでも持ち運びが出来る。

商人にとって、コレほど素晴らしい物は無いだろう。

「へえ、こりゃ凄い！見たこともないものばかりだ！」

おっと、お客さんがお呼びだ。

俺は満面の営業スマイルで声を上げた。

「いらっしやませー！！」

通行人を掻き分けて俺の前に陣取った客は4人。

如何にもな格好の冒険者達だ。

ドラクエ？の典型的なパーティーだった。

見た目が男勇者に始まり戦士に魔法使い、そして僧侶。

しかし何処か頼りない。

ていつか俗物丸出しだ。表情が…。

「おい見ろよ、まぞっほ！この盾すげえ！」

「ふむ、魔法の盾か。この軽さならワシにも使えそうじゃな」

「でも仰々しい装備しか置いてないのね。ローブやドレスは無いの？」

「そう言つなよ、ずるぼん。確かに品揃えは悪いが置いてある装備は一級品だ」

「でろりん…」

何こいつら…。

それに品揃えが悪い！？

言ってくれるじゃないか！

露店のスペースじゃ並べられる商品の数にも限りがある。

ドレスやローブだと？

そこまで言つなら出してやろうじゃないか！

「お客さん、ローブやドレスをご所望ですか？」

「ええ、置いてないの？」

「勿論有りますよ！取って置きの一品がね」

「なんですって！ならそれを出してみなさいよ！」

「しかし、かなりの一品ですのでお値段張りますよ。

お客さん大丈夫ですかー？」

「勿論よ！お金ならいくらでも出すわよ！」

「お、おい！ずるぼん！」

仲間たちが慌てだす。

どうやら浪費癖のある僧侶さんの様だ！

いいカモだ。せいぜい吹っ掛けてやるとするか。

俺は金色に輝くドレスを取り出した。

お客さんの眼の色が変わる。

「こちらは光のドレスです」

どうですか？

俺は今ドヤ顔に違いない。

ドレスのあまりの輝きに目を奪われている客。

メチャクチャ気分良いーーーーっ！！

「素敵……」

僧侶のお姉さんはウツトリとした表情で光のドレスを眺めている。  
もう夢中だ。後一押しで堕ちるな。

「どうですか？お客さんにピッタリですよ？」

残念ですが今お客さんが見につけている服、

それでは貴方の美貌が損なわれるというものです」

「そ、そうかしら？」

僧侶の人は照れたように頬を掻く。

ここで一気に畳み掛ける！

「素晴らしいドレスは素晴らしい貴方にこそ相応しい！

どうですか？本来なら2万5千ゴールドですが、

今なら何と、たったの2万ゴールド！」

「ええっ！？5千ゴールドも安くなるの！？」

「はい、是非お客さんに着ていただきたく…」

「買っ！買っわ！」

「ず、ずるぼん！」

「やめんか！」

「ああん！？」

「何でもないです、はい」

止めようとする仲間を一睨みで黙らせた僧侶さん。

彼女は即金で俺に2万ゴールドを支払った。

おお、リッチだ。冒険者って儲かるんだな。

「まいどありがとございました」

俺は勇者一行を笑顔で見送った。

それにしても、冒険者って凄いな。

ゲームみたいに魔物を倒してもGは手に入らない。

残るのはやはり魔物の死体だけだ。

この世界の冒険者は依頼を受けて商人を護衛したり、捜し物をしたりと何でも屋の様な事をして報酬を得ている。

魔物を倒してGを落とすなら皆やってるだろう。

「あの、コレを下さい」

おっと、自分の世界に浸っている場合じゃない。

「いらつしゃいませ！」

光のドレスを皮切りに、商品は次々と売れていく。

他では手に入らない珍しい品の数々。

俺は他の商人の嫉妬を受けながら、笑顔で商売を続けるのだった。

本日のタケルのステータス

タケル

性別：おとこ

職業：錬金術師

レベル：3

さいだいHP：28

さいだいMP：508



ちから：1 4

すばやさ：1 2

たいりよく：1 5

かしこさ：2 5 6

うんのよさ：2 5 6

攻撃力：5 4

防御力：6 3

どうぐ

E：雷帝の杖

E：ビロードマント

E：力の盾・改

E：幸せの帽子

E：スーパリング

呪文・特技

錬金釜

採取

大声

口笛

寝る

忍び足

本日の目玉商品『光のドレス』（後書き）

リカントを倒してレベルアップしたオリ主です。  
魔法は契約しないと覚えないのでまだ先です。

**本日の目玉商品『吹雪の剣』(前書き)**

装備はドラクエシリーズの良いところ取りです。  
ご了承ください。

## 本日の目玉商品『吹雪の剣』

「是非その剣を売って欲しい！この通りだ！」

現在、俺の目の前で美男子が頭を下げて懇願している。

ここはリンガイア王国。

世界でも1、2位を争う程の軍事国家で城塞王国として有名だ。

突然凶暴になり始めた魔物たち、巷では魔王が復活したのではないかという噂が実しやかに囁かれていた。

俺はこの国ならば、そう易々と魔物達の侵攻に遅れは取らないだろうとリンガイアにやってきた。

道中、何度か魔物に襲われもしたが、チート装備の特殊な力でどうにか撃退。

リンガイアへ辿り着いた俺は、いつも通りに露天を開いた。

本日の商品はコレだ！

特やくそう（HP90回復）100G

超万能薬（HP90→120回復・眠り、麻痺、毒、猛毒、混乱回復）300G

世界樹の雫（パーティーのHPを完全回復）3000G

世界樹の葉（死者蘇生）10000G

エルフの飲み薬（MP完全回復）3000G

爆弾石（イオラの効果）170G

砂塵の槍（マヌーサの効果）6600G

ムーンアクセス（攻撃した相手を混乱させる）8800G

ウイングエッジ：9000G

普通のチーズ：10G

辛口チーズ：15G

おいしいミルク：5G

高価な物ばかり取り揃えると全く売れない日もあるので普通の客にも手が届く値段の商品も並べておく。ドラクエ？のチーズだ。戦いの役には立たないが需要はある。

俺は吹雪の剣を自分の側に置く。最近かなり物騒だからだ。強引に商品を持って行こうとしたりする者。

そして難癖つけて営業妨害をする奴が出てきたのだ。今回も…。

「テメエ！舐めてんのか！」

「そつだ！足下見やがて！こんな値段ありえねえ！」

「いいえ、適正価格です」

俺は文句を付けてきた二人組の男にピシヤリと言いつつ放った。男たちは顔を真っ赤にして睨みつけている。

「買う気がないのなら、ご遠慮ください。」

他のお客様のご迷惑になりますから」

「な、何だと!？」

「俺達は客だぞっ!？」

「お客様、値切りの交渉ならば当然の事、

しかし度が過ぎれば唯の営業妨害です。お引取りを」

「こ、この糞ガキがあつ！」

男達は腰に差していた短刀を抜き放った。  
周りから悲鳴が上がった。

ヤレヤレ、最近はどういった客が多くて困る。

俺は側に置いてある吹雪の剣に手を掛け、そして

「やめないかお前た「氷結つ！！」「…うわあああああ！？」

吹雪の剣に込められた力を放つと同時。

誰かが割り込んできたような気がした。

「…うわああああああああつ！！！！」「…」

「……あ」

割り込んできた誰かは男二人組と共に吹雪と突風に巻き込まれ吹き飛ばされる。

リカントを一瞬で凍りづけにする吹雪の剣。

本来ならマヒヤド級の威力を出せるが、手加減して放つ事が可能だ。  
そうでなければ辺り一帯が銀世界になっている。

そんな事よりも…。

「大丈夫かな？」

「……うくくつ…だ、大丈夫だ」

巻き込まれたのは青年のようだ。

蒼銀の髪の凛々しい顔立ちの美青年。

青年は服についた氷や霜を払いながら立ち上がった。

「す、すいません。大丈夫でしたか!？」

「ああ、平気だ。それよりも君は凄いな。」

商人でありながら、あれほど高度な呪文を使うとは「

「いや、さっきのは呪文じゃなくですね」

俺は吹雪の剣を見せて言った。

「この剣の力なんですよ」

俺が吹雪の剣を見せると青年は目を見開いて驚いた。

「な、それじゃあその剣は伝説の武具なのか!？」

伝説の武具？

何言ってるんだこの人。

別に勇者以外でも装備出来るぞ。俺も出来るし。

「いえ、伝説の武具じゃなくて俺が作った」

「なんだって!?!これほどの剣を君が!?!」

青年は吹雪の剣を手にとって刀身を覗き込む。

まるで剣に魅入られたように夢中になっている。

「……吹雪の剣といいます」

「吹雪の剣……、北の勇者たるボクに相応しい……っ！」

北の勇者？

どっかで聞いたような。どこだっけ？

それにしても勇者を名乗るとは……。

前のお客さんは格好が？の勇者だったし。

流行ってんのかな？

「頼む！」

青年がいきなり大声を上げた。

「どうかこの剣を売ってくれ！」

ナルホド、吹雪の剣が欲しくなったわけですか。

確かに欲しくなるのも頷ける。

何せ俺でさえ愛用している一品だからね。

しかもドラクエ？の吹雪の剣。

なんと攻撃力105！

戦闘中使用するとマヒャドの効果！

最後まで愛用できる最高クラスの攻撃力の剣ですよ。

どうしようかな？

それ、売り物じゃないんだよね。

何せ俺の護身用として錬金した剣だし……。

「お客様、それは売り物ではございません。

コチラの剣は如何でしょう？お客様にピッタリですよ。」

俺は玉鋼の剣を取り出すと、青年に差し出した。



「違う！」

青年は腕を振って叫んだ。

「ボクは、ボクに必要な剣は、その吹雪の剣だけだ！」

どうかこの通りだ！その剣をボクに売って欲しい！」

終いには青年は頭を下げ、頼み始めた。

それを見た他の客や通行人がヒソヒソとし始める。

「ノヴァ様があんなにしてまで頼んでるのに」

「ひどい！ノヴァ様が可哀想！」

「大体、あんな冴えない奴があればどの剣なんて似合わねーだろ？」

「宝の持ち腐れだな」

どうやら青年はこの国では有名人であり人気者のようだ。

それ以上に俺のライフは今にもゼロになりそうだよ！

こんちくしょう！わかったよ！売ればいいんだろ！

ククク……、売ってやるよ！買えるものならな！

「わ、分かりました。お客様の熱意に負けました」

「ほ、本当か！？あ、ありがとう！」

俺の言葉に青年の表情はパアッと明るくなった。

俺の手をとってブンブンと上下に振って礼を言っている。  
どんだけ気に入ったんだよ吹雪の剣。

「吹雪の剣、60000Gになりま〜す！」

ピシリッ！

周りが凍りついた。

吹雪の剣を実際に使ったみたいに。

そしてまた周りがヒソヒソと話し始める。

「聞きました？60000Gですって！」

「さっきの二人組の言う通りだね。完全に足下見てますよ」

「ノヴァ様は勇者だぞ！もっとまける！」

「そうだ！そうだ！」

「やめないか！みんな！」

ノヴァは周囲を一喝してコチラへと向き直り頭を下げた。

「すまない、街の皆が失礼をした。」

代金は城のものに届けさせる。剣は使いの者に渡してほしい」

「は、はい。毎度ありがとうございます…！」

か、買うのか？マジで？

60000Gだぞ！？どんだけ金持ちなんだよ！？

ゴールドは魔物から生まれる世界じゃないんだぞ!？  
超大金なんだぞ!？

「ノ、ノヴァさま、よろしいのですか？将軍が何と言つか…」

兵士が二人、ノヴァに詰め寄っている。

今まで気が付かなかった。護衛の人かな？

「し、心配ないさ。これも正義のため。」

パパも…いや、父上も分かってくれるさ」

将軍だつて？

良い所の坊ちゃんどころじゃない！

本物のセレブかい!？

「この吹雪の剣は『氷結』の号令でその力を発揮します。」

使用の際はくれぐれもご注意下さい」

「わかった。『氷結』だな。覚えておこう」

ノヴァ様が去つて約1時間後、城の使いが来た。

そして確かに60000Gを支払い、吹雪の剣を購入していった。  
将軍家パネエ…。

「店じまいするか…」

護身用に片手間で作った吹雪の剣。

まさか60000Gに変わるとは…。

60000Gは冗談だったんだけどなあ。

ヤバイ！ニヤニヤが止まらない。

こうなったら吹雪の剣、また錬金しても良いかもしれない。  
材料に余裕はあるしな。

いや、そんな事よりも重要な事実は今気づいた。

もっと早くに気づけよ俺のアホ！

「ダイの大冒険か…」

主要人物に有ってんじやん。

アバンとポップ組じゃなくて北の勇者で気づくとは…。

まあ、イイ買い物していったからな。

やっぱりお客様は神様だな。

という事はどれだけレベルが上がっても魔法は覚えないだろうな。

確かこの世界は特殊な呪文を除き、契約しないと魔法は習得出来ない筈。

俺のMPって有り余ってたよな

自衛のためにも是非とも呪文書がほしい！探してみるか！

さて、今後の方針も決まったことだし今夜はパーティーと楽しむかな。  
パ、パフパフとか…。

本日のタケルのステータス

タケル

性別：おとこ

職業：錬金術師

レベル：6

さいだいHP：37

さいだいMP：515

ちから：20

すばやさ：16

たいりよく：20

かしこさ：256

うんのよさ：256

攻撃力：60

防御力：65

どうぐ

E：雷帝の杖

E：ビロードマント

E：力の盾・改

E：幸せの帽子

E：スーパリング

呪文・特技

錬金釜 採取 大声 口笛

寝る 忍び足 穴掘り

本日の目玉商品『吹雪の剣』(後書き)

確か身の守りって無いですよね。

身の守り＝素早さ÷2でしたっけ？

本日の目玉商品『ロトの剣』（前書き）

ロン・ベルクさん登場です。

王者の剣を見たロン・ベルクさん、どんな反応するんだろう？  
妄想しながら執筆しました。

## 本日の目玉商品『ロトの剣』

錆びついた剣に磨き砂、オリハルコンを加えるとアラ不思議！

「王者の剣の出来上がり〜」

この世界はオリハルコンの鉱脈がある。

といっても俺の採取スキルで偶然見つけた物だ。

実際に俺以外の人間にオリハルコンを採取することは出来無い。

一応チートスキルだし。

しかし実際にオリハルコンを手に入れた時、俺は狂喜乱舞したね。

錆びついた剣なんて、その辺の剣を塩水に付けて錆びさせただけだ

し、磨き砂なんて砂場で採取すれば普通に手に入る。

まさか本当に王者の剣が出来るとは思わなかった。

最強装備じゃねーか！？

「むむむ…、マジでどうしよう？

この王者の剣、攻撃力は？で使えば？と同じバギクロス」

ダイの大冒険の世界だとクロコダインの斧でも充分無双。

ちよつとしたアバンストラッシュ気分らしい。

それを振り回すだけで極大呪文連発出来る王者の剣…。

俺、魔王軍に目を付けられたりしないよな？

俺は王者の剣をスキルで見た。

王者の剣、攻撃力158。

戦闘中使用すると、バギクロスの効果を発揮する。

コレを装備できるのは勇者、戦士、賢者だろう。ついでに俺。



「どうするかな？」

俺はいつもの様に露店の準備をしながら溜息を付いた。

ここは森に囲まれたノド力な村、ランカークス。

未来の大魔導師ポップの生まれ故郷だ。

この世界がダイの大冒険だと気づいた俺は、店を畳むとリングイアを出た。

何故ならあの国は近い内に超竜軍団に滅ぼされてしまうからだ。

俺はリングイアを出る前に呪文書を購入した

初級の呪文しかなかったが今はこれで十分だろう。

契約できたのはヒヤド系呪文とバギ系呪文、そしてホイミ系呪文だ。これらの呪文を熟練することで更に上の中級、上級呪文を習得できる。

つまり要練習だ。

この世界は魔法力をコントロールする術があるので実際に呪文を使うとなると結構難しい。俺は中二病よろしくの妄想力のお陰で呪文自体は直ぐに使えた。

だがポップやマトリフのように魔法力を放出する芸当はまだ出来なかった。

ルーラやトベルーラ使いたかったなあ。

ていうか是非使いたい！主に逃げるために！

「……………おい、……………おい！」

ん？誰かが呼んでいるような？

「おい！聞いているのか！」

「は、はい…！」

気がつく俺の目の前には強面の顔色の悪い男がいた。  
いや顔色が悪いなんてもんじゃない！紫色じゃねーか！  
男は自分の容姿を覆い隠すようにローブに身を包んでいた。  
男の視線は王者の剣に釘付け。  
身を乗り出して剣に手を掛けようとする。  
その拍子にスルリと頭部を覆っていた布が落ちた。  
耳長っ！なにコイツ？

「ダークエルフ？」

「誰がエルフだ、俺は魔族だ」

魔族だと？

そういえばここはランカークス。  
ランカークスの魔族といえはもしかして…。

俺はまじまじと魔族を自称する男の顔を見た。

顔の中心に？傷、間違いない。伝説の魔剣鍛冶師だ。

「えっと、お客様？」

「そっだ」

「いらっしやいませ〜〜」

俺は最高の営業スマイルで魔剣鍛冶師を迎え入れた。

俺の対応に魔剣鍛冶師さんは一瞬、目を見開くように驚く。

「どうしました？」

「いや、魔族と名乗って歓迎されるとは思わなかった」

「お客様は神様です」

本日の商品はコレだ！

光の剣（使うとギラの効果） 4800G  
ドラゴンスレイヤー（ドラゴンの鱗を易々と切り裂く） 12000G  
雷の槍（デイン系の追加効果） 19800G  
デーモンスピア（即死効果） 34500G  
力の盾（使うとベホイミの効果） 17000G  
水鏡の盾（使うとマホトーンの効果） 30500G  
おかしな薬（使うと敵を混乱させる） 200G  
万能薬（HP90→120回復） 360G  
鉄鉱石（素材） 100G  
ミスリル鉱石（素材） 1050G  
磨き砂（素材） 20G

「お客様、何になさいますか？」

他では手に入らない珍しい物ばかりですよ」

「そ、そうか……それよりも」

魔剣鍛冶師殿は王者の剣を指さした。

「こ、この剣を見せてもらっても良いか？」

今まで人間の武器など興味は無かった……だがっ！」

魔剣鍛冶師様はにじり寄って鞘に収められた王者の剣を覗き込んだ。

「えっと、ご覧になれますか？」

俺が王者の剣を差し出すと、魔剣鍛冶師様はそれを引ったくった。鞘から剣を抜き放ち……、その表情を驚愕に染めた。

「……………っ！？こ、この剣は……………まさか！？」

魔剣鍛冶師様から滝のように汗が流れ落ちる。凄いな。どんだけ驚いてんだこの人。

「小僧っ！この剣、一体どうやって手に入れた！？」

「えっと、俺が造りました」

「な、何だとっ！？そ、そんな馬鹿な！？」

魔剣鍛冶師さんはフラフラとその場に崩れ落ちた。おーい、大丈夫ですか？

「こ、この剣をお前のような奴が？」

失礼な人だな。

「はい、じぶん錬金術師なもので」

「錬金術師だと？」

「はい」

魔剣鍛冶師さんは俺の顔をまじまじと見た。  
なんか照れるな。

「小僧、名はなんという？」

「えっとタケルです」

「俺はロン・ベルクという。」

タケルよ、その剣だが俺に譲ってくれないか？」

えっと売ってくれじゃなくて譲ってくれ？

そんな事言う人は初めて見た。

なんか図々しいなこの人。だから俺は笑顔で言ってやった。

「王者の剣、120000Gになります」

「頼む！この通りだ！

俺にはどうしてもその剣が必要なんだ！」

知らんがな。客じゃないなら帰ってほしい。

ロン・ベルクは魔界でも伝説になるほどの鍛冶師だ。

そんな男が人間に熱心に接触を図る。

はつきり言って危なすぎる。魔王に目を付けられるじゃないか。

「お客様、他のお客様に迷惑ですねで……」

「…そうだ！俺の造った武器と交換はどうだ？」

120000Gなんて大金は無いが、それに見合うという自負はある

一品で足りないなら全て持って行っても構わん！だから頼む！」

ナンドト？

ロン・ベルクの作品と交換？

しかも全部でも良いかと？マジでか！？

「で、では実際にその商品を見せていただかないことには」

俺は努めて平静を装いながら言った。

「交換してくれるのか！？」

ロン・ベルクさん。物凄い嬉しそうだ。

当然か。王者の剣はオリハルコンの剣だ。

しかも武器としては最高クラスの攻撃力。

ロン・ベルクが眼の色変えるのも不思議じゃない。

俺は露店を畳むと、ロン・ベルクに連れられて森の奥の小屋にやって来た。

「ここだ」

「でも田舎とはいえ魔族のロンさんが

良く平気な顔で人里に来れましたね？」

「ああ、村にはダチがいてな…いやソレよりも入ってくれ」

ロンさんに促されるままに俺は小屋に入った。  
中を見て溜息が漏れる。

「……うわぁ」

「どうだ？ここが俺の鍛冶場だ」

ロンさんは得意そうな顔で言った。

辺りを見渡すと、様々な武具が置いてあった。  
どれもが不思議な輝きを放っている。魔力なのだろう。  
しかし王者の剣と交換しても良いという程の品ではない。  
ロン・ベルクの武具で欲しいものといえば決まっている。  
鎧の〜シリーズだ。  
あれを数品と交換なら考えても良いと思ったのだ。

「ロンさん、交換の品はここにあるもので全部？」

「だったら先刻の話は無かったことにしてほしいです」

「ま、待て！奥に俺の傑作がある！ちょっと待っていてくれ！」

待つこと数分。

ロンさんは布に包まれた武具を持って現れた。  
見たところ四品。両手で抱えるには限界だろう。

ロンさんは一品を残して地面に置くと、布を外し始めた。  
顕になっていく武具。

鈍い銀色が顔を覗かせる。  
出てきたのは長弓だった。

不思議な事に弦が見当たらない。

弓は装甲の様な物が覆っており、それが弦を隠しているようだ。

「まず一品目、こいつは弓の魔装」

「弓の魔装？どういったものなんですか？」

「タケル、手にとって鎧化アムドと唱えてみる」

「はい……アムド！」

弓を覆っていた銀の装甲が剥がれ意思を持つように俺の身体に装着されていく。

上から鉢金、胸当て、そしてプロテクターに脛当て。

まるで聖闘士のクロスだな。意外に軽い。

「気に入ったようだな」

「でもロンさん、俺に弓の心得はないですよ」

「お前は商人なのだろう？」

ロンさんはニヤリと笑った。

確かに俺が使える必要はない。でもなんか悔しい。

「次はこいつだ」

ロンさんは次の装備の布を外した。

出てきたのは銃剣だった。マジでか！？



「こいつは試作品だな。」

全く新しい概念の武具を創りだそうとしてこうなった」

「鉄砲と剣を合体させたんですか？」

「ああ。名はまだ無い」

「まさにガンブレードですね」

「ん？ガンブレードか……いいなその名」

どうやらガンブレードに決定したようだ。

「でも魔族であるロンさんが鉄砲作るなんて……」

「ああ、人間のように火薬で弾を撃ち出すものじゃない。」

そいつは魔法を利用した銃だ」

アバン先生の魔弾銃じゃん。

「何を想像しているか知らんが、

ソイツを使うと人間でも魔法剣を使うことが出来るようになる」

なんですと！？

「撃ち出した攻撃呪文を刀身に付与させて擬似的に魔法剣にする

それがこのガンブレードの特性だ。どうだ気に入ったか？」

間違はなく竜の騎士を意識して造ってるよこの人。  
どんだけ対抗心燃やしてるんだよ！

「素材はミスリル鉱石で出来ている。」

強度は魔装に劣るが、同じ素材だと魔法剣に出来ないからな」

「どうしてですか？」

「魔装に使われているのはメタル鉱石。」

こいつは呪文を受け付けられない物質だ。

だからガンブレードには使えなかった

最後に魔法の弾だ。装弾数は10発。

コイツは魔法の筒の応用で造り出した物で

攻撃魔法を詰めることが出来る」

成る程。

でもダイはヒュンケルの魔剣で魔法剣使ってたよな？

あれは竜の騎士だから出来る芸当って訳か。

考えている間にロンさんは次の武器の布を解く。

「これは……爪？」

鋭利な鉤爪が付いた手甲だった。  
見たところ魔装ではないようだ。

「それは風魔の鉤爪」

「風魔の鉤爪……」

「とりあえず装備してみろ」

俺は言われるままにソレを装着してみる。

左右両方とも装着する。

「そいつは切れ味もさることながら特殊な力もある。

良いか？外に向けてだぞ？何かを斬るように振ってみろ」

「……シッ！」

爪から真空の刃が放たれて森の木を薙ぎ倒した。

「こゝ、これは……」

「物騒だからあまり振り回さないほうが良いぞ」

確かにその通りだ。

他の伝説の武具と違って号令が必要ない。

雷鳴の剣の様な攻撃魔法の追加攻撃。

それでもかなり強力だ。

「それで最後の武具は？」

俺は風魔の爪を外すとロンさんを促した。  
ロンさんは頷くと、最後の武具の布を外した。

「柄だけの剣……？」

「魔闘剣だ」

首を傾げる俺にロンさんは説明を始めた。

「ソイツは持ち主の魔法力、もしくは闘気を刃に変える剣だ

昔、最高の杖を造る際、試作的に造り出した物だが…。

鍛冶師として外に出したくなかったが……」

これも王者の剣を手に入れる為だ。

ロンさんは不機嫌そうに呟いた。

そうか光魔の杖の……、ロンさん嫌ってたっけ。

「魔闘剣か……俺の場合は魔法力だな」

魔闘剣は俺の魔法力に反応し光の刃を創り出した。

俺の身長以上の刀身の長さにロンさんは目を剥いた。

「大した魔力の持ち主のようだな」

「……ロンさん」

「何だ？」

「王者の剣、ロンさんに譲るよ」

「ほ、本当か!？」

「はい、ロンさんの造った武具、大変気に入りました」

「商談成立だな」

俺達は互いに握手をすると視線を合わせて口元を釣り上げた。

王者の剣はまた錬金すれば良いだけのことだ。

しかし魔界最高の鍛冶師の作品は絶対に手に入らない。

ランカークスに来て本当に良かった！

「気が向いたら何時でも来い。お前ならば歓迎しよう」

「はい、今日はありがとうございました」

「……タケル、お前の王者の剣を上回る剣を創りだしてみせる」

ロンさんの目には強い決意の炎が宿っていた。

「それではまた」

俺はロンさんに別れを告げると、ランカークスから旅立った。

本日のタケルのステータス

タケル

性別：おとこ

職業：錬金術師

レベル：6

さいだいHP：37

さいだいMP：515

ちから：20

すばやさ：16

たいりよく：20

かしこさ：256

うんのよさ：256

攻撃力：98

防御力：65

どうぐ

E：ガンブレード

E：ビロードマント

E：力の盾・改

E：幸せの帽子

E：スーパリング

E：魔法の弾×10

呪文・特技

錬金釜 採取 大声 口笛  
寝る 忍び足 穴掘り

ホイミ

ヒヤド ヒヤダルコ

バギ バギマ

本日の目玉商品『ロトの剣』（後書き）

オリジナル装備……。

なんか恥ずかしくなってきた。

これって中二なんでしょうか……？

FFパクリとか言わないで下さい。

人間でも魔法剣が使える使用になっておりますです。

魔法は呪文書を手に入れることで覚えました。



本日の目玉商品『大賢者の杖』（前書き）

そろそろダイ達と出会いたいなあ…。

## 本日の目玉商品『大賢者の杖』

現在オレはパプニカ王国に来ていた。

この国はミスリル銀の道具や特殊な魔法の布で織られた衣服が特に有名で、一人の商人として凄く楽しみだ。

おまけにこの辺りには脅威となりそうな魔物は殆どいない。

魔王軍の侵攻の魔手もまだ伸びていないからだろう。

この国が滅びる前に貴重な物を仕入れておこう。

俺はパプニカ王国で最も活気のある商店街に足を踏み入れた。

人々が賑わい商人は自慢の品を売ろうと躍起になって呼び込みをしている。

俺は露店で売られている鳥の肉を購入してかぶり付きながら街を歩いた。

さあ魔法の布を手に入れよう！

「ふう、漸く手に入れることが出来たぞ」

街を歩くこと数時間。

目当ての布を手に入れた俺は、広場にあるベンチに腰を下ろした。

パプニカ特産の魔法の布。

高い対魔力を持ち普通の布よりも遥かに丈夫に出来ている。

魔法の法衣や賢者が着ているローブなんかも、この素材が使われているらしい。

それなりに値は張ったが、それだけの価値があることは言うまでもない。

「さてと、目的の物も手に入ったし今度は俺の番だな」

俺はヨイシヨと立ち上がった。

俺の目的はパプニカの城だ。

旅の商人としてパプニカ城に持ち込みを行う算段だ。

交易国として名高いパプニカの王族。

さぞかし支払いが良いことだろう。

滅んでしまう前にタップリとゴールドを落としてもらいましょう！

この国に来て今日で三日目、仕込みはバツチリ抜かりはない。

というよりも謁見に三日も待ったのだ。

城の門番に王への謁見を申し込む事から始まり、各種の手続きなど結構な時間を食った。こういった事は国によって色々違う。

商売を行う際、大抵の国は入国の際に手続きと審査を行う。

結果問題がなければ入国と商売が認められるという流れだ。

パプニカは特にその辺りが厳しい。

俺の持つ商品は何処にも売られていない物ばかりだ。

それ故に適正価格をイマイチ判断することが出来ないらしい。

故に専門の人間を呼び審査を行う。

結果、今までで最も時間を食った。

これで売れなきゃ最悪だ。

## 閑話休題

現在オレは謁見の間にいる。漸く目通りが叶う。

王座の前で膝を付いて国王を待つ。

俺の隣には持ち込んだ品が台座に載せられており純白の布で隠されている。

暫くすると扉が開き、ゆっくりとした足音が近づく。

足音は王座の前で止まると、腰を下ろした。

「そなたが行商人のタケルか？」

「はっ！此度は拝謁に賜り恐悦至極にございます」

「うむ、面を上げよ」

王の言葉に従いゆっくりと顔を上げる。

威厳にあふれた表情の国王が王座に腰を下ろしていた。

なんていうか凄い存在感だな。

隣にはレオナ姫もいる。

その後ろに控えている三人組は有名な三賢者だろうか？

「聞けばそなたは我が王家の為に貴重な至宝を仕入れたとか？」

「はい、この世に無二の一品でございます」

其れは伝説の武具にも勝るとも劣らぬ一品ばかり。

必ずや国王陛下の眼鏡に適う物だと自負しております」

「うむ、では早速見せてもらおうか」

「へえ、気になるわね。早く見せてみなさいよ」

レオナ姫が身を乗り出して先を促した。

原作通り、かなりのおてんば姫のようだ。

「これ、レオナ！」

「ごめんなさいお父様」

「ゴホン！娘が失礼をした」

「いえ……では」

俺は台座に被せてある布をゆっくりと下ろした。  
周りからため息が漏れる。

この世界では伝説級の武具が五品。

そのどれもが見る者を惹きつける輝きを放っている。

本日の商品はコレだ！

大賢者の杖（使うとフバーハの効果） 50000G

天使のレオタード（死の呪文を防ぐ） 48000G

女神の盾（攻撃呪文を半減させる） 40000G

黄金のティアラ（嫌な呪文に掛かりにくくなる） 24000G

女神の指輪（歩くとMPが回復していく） 15000G

「如何でしょう？賢者の卵である姫様に」

「凄いわ！それを私のために？」

「はい、きつと姫さまにお似合いですよ」

「お父様！」

「……うむ」

レオナ姫は国王に強請る様に声を上げた。

国王はヒゲを撫でるとレオナに向かって頷きこちらを見た。

レオナ姫は嬉しそうに駆け寄ってきて杖を手に取った。  
どうやら『大賢者の杖』が気に入ったようだ。  
嬉しそうに眺めている。

国王はそんなレオナ姫を微笑ましい顔で見ながら俺に向き直った。

「タケルとやら、そなたの用意した品々、全て貰おう」

「ありがとうございます」

「これ程の武具を取り揃えるとは誠に大儀であった。

どうだ？そなたさえ良ければこの国で店を構えてみるというのは  
？」

「……………え？」

国王の言葉に俺は硬直した。

この話は一商人として、この上無い事だ。

周りの臣下達も国王の言葉に「おお！」とか感心してるし。

「確か城下の西区に一画、使われていない土地が有った筈。

どうじゃタケルよ。

その商人としての手腕をこの国で存分に振るってみては？」

「それ良いわね、タケルくん。

どう？お父様がここまで言うてくれるなんて滅多に無いわよ？」

マジですか？

それにタケルくんとな！？

まさかダイくんと同じノリで呼ばれるとは思わなんだ。

王様は俺という商人を取り込むことで国力の強化を図る気だよな？

しかしどうするかな？

魔物の動きもますます激しくなってきた今、戦力の強化は急務だ。

兵士たちの武具や食料などの物資は必要不可欠。

それを用意する商人は是が非でも欲しいだろう。

しかも俺は唯の商人じゃない。特に品揃えが。

確かに平和なら迷わず飛びつく話だ。

けど間も無くパプニ力は滅びる。不死騎団によって。

うん決めた。

「ありがたいお話ですが…」

うん。やっぱり保身が大事ですよ。

俺って正義の使徒って訳じゃないし。

装備を除けば一般Peopleですから。

「私は自分の商品をより多くの人々の為に役立てたいのです。

現在、魔物たちの動きが活発化しており、

魔王が復活したと噂されております。

確かに陛下の心遣いは大変嬉しいのです。

しかし多くの人々の為にも私は旅を止めるわけにはいかないのです」

「……そうか…あいわかった！」

そなたの心意気、ワシは感服したぞ！

そこまで言うのなら引き止めることは出来ん。

これからの道中、気をつけてな」

「ありがとうございます陛下。レオナ姫もお元気で」

「またねタケル君。君の装備、大切に使用してもらおうわ」

俺は最後にもう一度だけ一礼すると、踵を返して謁見の間を後にした。

あー、緊張したー。

さてと用事も終わったしパプニカから脱出しますかね。

次はロモスでも行こうかなあ…。

パプニカから出る前に俺は度に必要な物を買って揃えることにした。

食料の方も心許なくなってきたし新しい魔導書も有るかもしれない。

そんな訳で買い物開始。

適当な店を練歩くこと半日、保存食と魔導書を数冊ほど購入。

時刻は午後八時過ぎか。

俺は腕時計と薄暗くなった空を見て溜息を付いた。

「こりゃパプニカを立つのは明日にした方がいいな」



夜の街道を旅するのは止めた方が良い。  
俺はパプニカで一泊することにした。

「いらっしやいませ。こんな遅くまでお疲れ様です。」

ウチは風呂もベッドも最高ですよ！お一人様ですか？」

「あ、はい。部屋は空いてますか？」

「勿論です！お一人様だったの15Gになります」

俺は15Gぴったり手渡すと、店員に案内されて部屋に入った。

「お食事はどうなさいますか？」

「自分で用意してあるから構わない」

「風呂はソコの扉の向こうになります」

「ありがとう」

「それではごゆっくり」

俺はベッドに身を投げ出して魔導書を開いた。

呪文を覚えるためには習得した系統の魔方陣が必要になる。

魔方陣の中で祈りを捧げる事で、素質ありと認められれば魔方陣が輝き習得することが出来るのだ。俺はドキドキしながら頁を捲った。

手に入れた魔導書は3冊。

1冊目にはメラ系、ギラ系、イオ系の呪文。

2冊目にはキアリー、キアリク、シャナクなどの呪文。  
3冊目にはラナ系、フバーハ、レミーラ、トラマナ……あ、ホイミ系もある。

ホイミ以外は習得してないな。

明日、片っ端から契約してみるかな。

兎に角、攻撃魔法が習得できるのは嬉しい。

敵と正面きって殴りあうのはガラじゃないからな。  
ていうか怖い。死ぬ。

「さてと、風呂に入って寝るとするか」

俺は魔導書を荷物にしまい込むと風呂に向かった。

この世界って補助呪文も少ないよなあ…。

バイキルトとかスクルト、ピオリムとか無いのかなあ。

本日のタケルのステータス

タケル

性別：おとこ

職業：錬金術師

レベル：8

さいだいHP：44

さいだいMP：525

ちから：25

すばやさ：26

たいりよく：30

かしこさ：256

うんのよさ：256

攻撃力：103

防御力：70

どうぐ

E：ガンブレード

E：ビロードマント

E：力の盾・改

E：幸せの帽子

E：スーパリング

E：魔法の弾×10

呪文・特技

錬金釜 採取 大声 口笛

寝る 忍び足 穴掘り

ホイミ ベホイミ

ヒヤド ヒヤダルコ  
バギ バギマ

本日の目玉商品『大賢者の杖』（後書き）

次回は口モスです。

**本日の目玉商品『毒消し草』（前書き）**

日間ランキング見て驚きました。

まさかの1位！？

練習作行き詰まっていたから適当に書いただけなのに…。

## 本日の目玉商品『毒消し草』

現在オレは一人魔の森を練り歩いていた。

原作キャラの一人、マアムに会ってみたい。

まあチョットした願望みたいなものだ。

目指すはネイルの村だ。

それにしても魔の森のド真ん中に村を作るなんて何を考えてんだろ  
う？

もう魔王軍が復活したのは周知の事実となっている。

魔物の凶暴化もますます拍車が掛かり手が付けられないまでになっ  
ていた。

しかし魔導書によって戦闘力を飛躍的に高めたオレに怖いものなど  
無い！魔物でも大魔王でも掛かってきやがれ！

すいません。ウソです。

現在オレは以前と同じように聖水を巻きながら忍び足で移動中です。  
確かに魔導書に載っていた呪文は全て契約できた。

しかし実際に魔の森の魔物と進んで戦うほど俺はバカじゃない。

この森の魔物は今まで旅をしてきた地域の魔物よりも強いのだ。

何故なら獣王の支配する森だからだ。

そこに住む百獣魔団は半端じゃない。

ライオンヘッドを見た時、俺はチビリそうになっただくらいだ。

あれは怖すぎる。

俺の知識にあるライオンよりも一回りでかかった。

しかも羽とか生えてたし。

ライオンヘッドに気付かれない様に逃げ出した俺は気を取り直して  
ネイルの村を目指す。それでも偶に魔物に見つかって襲われたりも  
するが…。

「ベギラマ！」

「ギヤアアアア！！」

習得したての呪文で焼き払う。

俺の放った閃熱呪文ベギラマはリカントと人面樹を薙ぎ払った。

うん、流星はベギラマ。かなりの威力だ。

この世界はギラ系が強い。

なにセイオナズンよりもベギラゴンの方が強いっばいのだ。

メラゾーマやイオナズンよりもベギラゴンですよ。

ハドラーもベギラゴン習得した時、メチャクチャ喜んでいたしな。

俺にもギラ系の素養があつて良かった。

「おっとレベルアップか」

頭の中でファンファーレが響く。

何度も聞いているのもう慣れた。

多分この音楽、俺しか聞くことはないんだろうなあ。この世界の人々は、魔物と戦闘以前に普通に修行でレベルアップするみたいだし。レベルアップって結構凄いと思う。

元の世界に戻ったら間違ひなく運動神経チートだよな。

普通に長剣を振り回せる腕力は付いた。

重い荷物を担いだまま走りまわる体力もある。

「でもなあ」

それでもこの世界だと本職の戦士には全く敵わない。

まあ俺は魔法で戦う後衛系ですから。

守ってくれる前衛いないけど…。



「さてと、そろそろ到着してもいい筈だけどな」

俺は地図を見ながら辺りを見渡した。

前方に明かりと煙が見えた。

どうやらネイルの村の様だ。

俺は歩く足を早めた。

素朴で平穩。

それがこの村の第一印象だった。

入り口から村全体が見渡せるほど小さな村。

家も数える程しか建っていない。

中心の広場を囲むように建てられた民家。

見たところ宿屋は無いみたいだ。

商売を行うにしても、あまり高価なものを買う余裕はないだろう。

マームになら安く売ってやっても良いが…。

何せアバンの使徒の強化は平和に繋がるからな。

それにマームは可愛いしな。

「それにしても良い村だなあ」

この村を歩いてみると、世話になった村を思い出す。

見ず知らずの俺を受け入れてくれたあの村を。

皆元気になっているかな？

1年ほど前に旅立ってから一度も戻っていない。

暇を見て帰ってみるのも良いかもしれない。

「きゃっ！」

その時だった。

俺は何かにぶつかった。

考え事をしていたのが良くなかった。

女の子だった。十歳前後の可愛らしい女の子。

俺にぶつかった拍子で尻餅を付いている。

「大丈夫か？ごめん、考え事をしていたんだ」

俺はそう言いながら女の子の手を取って起こして上げた。

「こつちこそゴメンナサイ。えっとお兄ちゃんは？」

「ああ、俺は旅の商人で先刻この」

「お兄ちゃん商人さんなの！？」

「あ、ああ」

「だったら毒消し草ありますか！？」

「勿論あるよ。だれか毒に侵されたのかい？」

「お、お母さんが、バブルスライムに噛まれて…」

俺が事情を聞くと女の子は目に涙を浮かべて肩を震わせた。  
成る程、お母さんの為か…。

こんな女の子からお金を取るほど俺は強欲じゃない。

それに毒消し草は魔の森で採取してある為、多く持っている。  
それに毒消し草を使う必要はない。

「あの、毒消し草……これで足りませんか？」

女の子はお金を差し出した。

1G硬貨が5枚。

毒消し草の値段は10G。

女の子は不安そうに俺の顔を見上げている。

俺はそっとお金を持った手を引かせた。

「大丈夫、お母さんの所に案内してくれるか？」

「…う、うん！」

俺の言葉に女の子の表情がパアツと明るくなった。

女の子の家に案内された俺は、彼女の母の前に立つ。

ベッドに横たわっている母の顔色は悪く、息を苦しそうだ。

俺は女の子に「大丈夫だよ」と声をかけると母親に手をかざした。

キアリー（解毒呪文）

覚えておいて良かった解毒呪文。

魔法の光に包まれた母親は見る見るうちに顔色が良くなる。

「お母さん！」

光が収まった時、母親は安らかな寝息を立てていた。

「これでもう大丈夫だ」

「ありがとうお兄ちゃん！」

お兄ちゃんか。

悪くないなその呼び方。

「……私は」

「お、気がついた」

「お母さん、大丈夫？」

「ミーナ……心配掛けてごめんなさい」

女の子は嬉しそうに母親に抱きついた。

それから暫くして。

「本当に何とお礼をっていいか」

「本当にありがとう！」

「いえ、こんなに美味しい料理を御馳走になれたんです。

むしろコチラが感謝したいぐらいですよ」

「まあ！おかわりは沢山ありますからいっぱい食べてくださいね」

俺は母親を助けたお礼にと晩御飯をご馳走になっていた。  
女の子の名前はミーナ。

なんと彼女は、たった一人で魔の森に毒消し草を取りに行くつもりだったのだ。

魔王復活のため凶暴化した魔物の影響で。村に来なくなった行商人  
その所為で村の蓄えも充分とは言えなかった。

以前買っておいた毒消し草も数日前に無くなっていたのである。  
街まで行くこうにも森は大変危険である。

それでも母の為にミーナは一人でも森に向かおうと考えたのであつた。

ミーナの母、おばさんは「危険なこととはしないで」と説教をして、  
改めてオレにお礼を言って頭を下げた。

「邪魔するぞ」

「あ、村長様」

家に入ってきたのは優しそうな老人だった。

老人、村長はおばさんを見ると、不思議そうに首をかしげた。

「ふむ……見舞いに来たのじゃが…、お前さん、もう大丈夫なのか？」

「はい、この方の解毒呪文のおかげで」

「そうか、村長として礼を言っぞ」

「いえ…」

「という事はマームとは入れ違いになったのか」

「どづいつこと?」

「ふむ、マームのやつがミーナが森に向かったと勘違いしての」

「マームおねえちゃんが!？」

「……なあに、あの娘なら心配はないじゃろう」

「えっと……心配ないって？」

女の子なんですよね?オレも魔の森を通って来たんですけど

あの森は凶暴な魔物がいてかなり危険なんだけど……」

原作知識はあるけど一般人なら当然の疑問を突っ込んでおきましょう。

するとミーナが自信満々に言った。

「大丈夫だよ、お兄ちゃん」

「どづいつことだい?」

「マームおねえちゃんは凄く強いんだから!」

「そうじゃな。何せ『アバンの使徒』じゃからのつ」

「凄いな!じゃあアバンの使徒に会えるのかな」

「それだけじゃないぞ。」

「マアムの母レイラは嘗て勇者アバンと共に戦った仲間じゃ」

「へえ、英雄の村って事か」

「オレが感心したふうに言うと、村長はフムと考えこむようにヒゲを撫でた。」

「ふむ、お前さん、魔の森を抜けて来たんじゃないかな」

「はい、結構ヤバかったですけど…」

「物は相談なんじゃがお前さん、マアムを探してきてくれんか？」

「えっと」

「知ってる通り、マアムはミーナを探しに行った。」

「ミーナがここに居る事をマアムは知らん。」

「このままだと何時までもミーナを探して森を歩き続けるかも知れん」

「村長の言うことも一理ある。」

「でも正直言って遠慮したい。」

「それにもう日も沈んでおり外は薄暗い。」

「この状態で魔の森を歩くのはマジで怖い。」

「俺は戦士じゃないしがない商人だ。」

「けど…。」

「お兄ちゃん…」

この顔には勝てん。

ミーナちゃんは縋るような上目づかいで俺を見ている。

「村長さん」

「なんじゃ？」

「この村の人達が毒消し草を採取する場所、教えてもらっても？」

マームさんはミーナちゃんを探してそこに向かうと思うんです」

「そうじゃな。毒消し草の群生地はここからそう遠くはない。

村を出てロモスの方角に行くと、川が流れておる。

その川にそって南に下れば直ぐじゃよ」

「お兄ちゃん、マームお姉ちゃんを呼んできてくれるの？」

「ああ、すぐに戻るよ」

「すまんのう」

俺は心の中で膝をつき溜息を付いた。

また魔の森を一人で歩くのか…。

しかしその不安以上にマームに会えるのは楽しみだ。

こうなったら腹をくくるしか無い。



平和なドラクエ世界を取り戻すにはアバンの使徒に頑張ってもら  
しか無い。

でないと商売上がったのだ。

俺は荷物を背負うと、ネイルの村の入口を目指して歩き出した。

「後で村長に毒消し草、買ってもらおう」

タケル

性別：おとこ

職業：錬金術師

レベル：11

さいだいHP：71

さいだいMP：536

ちから：29

すばやさ：36

たいりよく：37

かしこさ：256

うんのよさ：256

攻撃力：107

防御力：75

どうぐ

E：ガンブレード

E：ビロードマント

E：力の盾・改

E：幸せの帽子

E：スーパーリング

E：魔法の弾×10

呪文・特技

錬金釜 採取 大声 口笛

寝る 忍び足 穴掘り

ホイミ ベホイミ

キアリー キアリク シャナク

メラ メラミ メラゾーマ

ギラ ベギラマ

ヒヤド ヒヤダルコ

バギ バギマ

フバーハ

ラナリオン

トラマナ レミートラ

**本日の目玉商品『毒消し草』（後書き）**

今回は短いです。

次回はダイ達に会いたいなあ…。

そういえば体力ってHPの成長に関係してるんですよね？  
レベルが上がった時、体力×2のHPになるんですけどっけ？

## 主人公設定（前書き）

予約投稿始めてです。

## 主人公設定

名前：大江 おおえ 武 たける

年齢：16歳

身長：164cm

体重：54kg

この二次創作のオリ主。

現代日本の男子高校生。

成績は比較的優秀。しかし天才ではなく秀才。

好奇心が強く順応性が高い。

ドラクエと少年漫画が好き。

ダイの大冒険の世界では性は名乗らず名前だけ名乗っている。

自称どこにでもいる普通の行商人。

平和な時代に結構荒稼ぎした為お金が大好き。

しかし魔王軍復活と原作キャラとの遭遇でダイの大冒険の世界だと

気づき、魔王軍と戦う勇者メンバーになら役に立つ武器や道具を譲

つても良いと思っている。

全ては平和なドラクエ世界の為。

魔法の才能は天才の部類に入り、現在手に入れた全ての魔法と契約を成功させている。色々な特技にも精通している。

現在のステータス

レベル：12

さいだいHP：75  
さいだいMP：536

ちから：32

すばやさ：40

たいりよく：38

かしこさ：265

うんのよさ：256

攻撃力：110

防御力：77

どうぐ

E：ガンブレード

E：ビロードマント

E：力の盾・改

E：幸せの帽子

E：スーパリング

E：魔法の弾×10

呪文・特技

錬金釜 採取 大声 口笛

寝る 忍び足 穴掘り 大防御

ホイミ ベホイミ

キアリー キアリク シヤナク

メラ メラミ メラゾーマ

ギラ ベギラマ

ヒヤド ヒヤダルコ

バギ バギマ

フバーハ

ラナリオン

トラマナ レミール

## 主人公設定（後書き）

描写はないですがママムとの出会い前に魔物との戦闘によりレベルアップです。



本日の目玉商品『星降る腕輪』(前書き)

予約投稿その2

本日の目玉商品『星降る腕輪』

鬱蒼とした森をひたすら歩く。

村長に言われた通り、ロモスの方角を目指して歩く事十数分。

水が流れる音が聞こえ始めた。

川を発見した俺は、川にそって南に向かう。

「ギャアアアア!!!」

いきなりの事だった。

けたたましい叫びが響き渡った。

俺は声の方へと走る。

「うわっ！」

俺は火達磨になって逃げていくリカントとすれ違う。

何が起こったんだ？

俺はリカントが来た方へと走った。

少し進むと男女の声が聞こえてきた。

何やら言い争っているみたいだ。

「こんな森ぐらيسパッと通り抜けてやるわい！」

「その程度の腕で？」

「なんだと!？」

電流が走ったように睨み合う男女とオロオロと見守る少年。

これが原作遭遇ってやつか。

「行こうぜ！ダイ！」

「ちょ、ちよっと！ポップウ〜」

ポップはダイを引つ張って行ってしまった。

あゝあ、ロモスの方角はそっちじゃないって…。

おっと、ここで眺めていても話は進まない。

村長とミーナにも頼まれているし、とりあえず俺は声をかけることにした。

「ちよっといいか？」

「だれ！？」

「怪しいもんじゃないよ。えっと、もしかして君がママムさん？」

「ええ、どうして私の名前を？」

「ネイルの村の村長さんに頼まれてね。君を呼びに来たんだよ」

「え？で、でもミーナが…、女の子が一人で森に入ったの」

「大丈夫、ミーナちゃんは無事さ。今はお母さんと一緒にいるよ」

「ええっ！？」

「言いくいんだけどさ。ミーナちゃんは森に入ってなかったんだ」

俺はママムに事情を説明した。

マアムはミーナが一人で危険な森に入っていない事に安堵し、また母親が無事だったことも心から喜んだ。マジで良い娘さんだ。眩しすぎる。

「ありがとう。ミーナの事もおばさんのことも…」

「べっ、べつに良いよ」

「……あれ？」

「どづした？」

「これは…」

マアムの視線を追ってみると、丈夫そうな布袋が落ちていた。

「さっきの二人が落としたのかしら？」

「みただね。ここに置いておくのも何だし、取り敢えず持って行くかうか？」

「そうね」

「改めて自己紹介するよ。俺はタケル、商人だよ」

「知っているみたいだけど、私はマアムよ。」

「ミーナとおばさんの事、本当にありがとう」

「いいよ。それよりもあの勇者アバンの使徒なんだって？」

「凄いカツコイイよな。オレ、憧れるよ」

マジで。

遠目から魔弾銃を撃つところ見てたけど、マジでカッコよかった！  
本物はやっぱり違うわ。

「そ、そんな事ないわよ」

「いやいや、本当に凄いつて！」

オレなんて最低限の自衛能力しか身につけてないからさ」

「へえ、でも一人でこの森を抜けてくるのは素直に凄と思うわよ」

「はは、おっと！それよりも早くミーナちゃんを安心させてやらな  
いと」

忘れるところだった。

マアムと会えてテンション上がりすぎだろオレ。

それに魔の森で立ち話は危険過ぎる。

マアムには何でもないけどオレに命の危険。

早く帰らないとヤバイ。

「そうね！急いで村に戻りましょう」

「あ、帰ってきた！マアムお姉ちゃん！」

村に入ると、ミーナちゃんと村長さんが迎えてくれた。

どうやら入り口で待っていてくれたみたいだ。  
それに村の人だろうか。

皆が入り口に集まってきた。  
一人を心配して村人が全員やってくるなんて本当に良い村だな。

「ただいま、ミーナ」

「マアム。ご苦労じゃったな」

「結局無駄足でしたけどね」

「なに、無事で何よりじゃわい」

「俺からも礼を言うよ。娘のために有難う」

ミーナの父親だろうか。

中年の男性がマアムに頭を下げた。

「お礼なら私よりも、このタケルに言って上げて」

「ありがとう、妻の治療まで行なってもらって」

「いや、良いよ」

なんだかしんみりした空気になったな。

村長が申し訳なさそうに口を開いた。

「マアム…お前にはすまないと思っておる。」

この村には男手が少ない。いつもお前には危険な目に」

「みんな城を守りに行ってるもの。仕方ないわ」

「ウム、国王が倒れてしまっってはお終いじゃからのう」

皆の表情は更に暗いものになる。

いくらアバンの使徒とはいえ、マアムの様な娘がたった一人で村を魔物から守っているのだ。村の人たちも心中穏やかじゃないだろう。そんな村人たちに、マアムは励ますように明るく言った。

「大丈夫よ！この村は私が守るわ！」

漫画で見るとは訳が違う。

この世界を一人で旅をしてきたから分かる。

魔物の脅威を。

その驚異からたった一人で守ろうと言うのだ。

すごい勇気だ。

それに比べてオレは…。

「そつだよ！マアムお姉ちゃんは魔物モンスターみたいに強いんだ！」

「そつだね！大丈夫さ！」

「こら！だれが魔物ですつて！」

「あははは！」

子供達の言葉にゲンコツで答えるマアム。

雰囲気は一気に明るくなり、村人たちに笑顔が戻った。

凄い、これがアバンの使徒か…。

「ねえ、お姉ちゃん。それ何？」

ミーナはマアムの持つ布袋を指さした。

「ええ、森で出会った妙な二人組が忘れていったのよ」

「開けてみようか？」

いたずら心と好奇心か。

子供が布袋の紐を解いて開ける。

すると、その隙間から黄金の光が放たれた。

ポン！

そんな音と共に飛び出してきたのは一匹のスライムだった。

「スライムだ！」

「離れて！」

魔物の出現。

マアムはこれまでの経験に基づき反射的に魔弾銃を抜いた。

金色のスライムはいきなり人間に囲まれて困惑している。

そしていきなりマアムに銃口を向けられ怯えた表情を見せた。

銃口とマアムの鋭い眼光、スライムは耐えられずに…。

「……………ピ、ピエ~~~~ン!!!」

泣き出してしまった。



「いじめちゃ可哀想だよ」

全くもってその通りである。

ミーナちゃんは正しい！

マームはミーナに言われてバツが悪そうに銃をしまった。

一方その頃

魔の森の奥深くにある洞窟。

太陽の光を全く通さない最奥では一匹のリザードマンが寝息を立てていた。

ただ、普通のリザードマンとは大きさも威圧感も一線を画している。

「クロコダインよ……獣王クロコダインよ」

低く威圧的な声がリザードマンに掛かる。

声に反応してリザードマンが目を開いた。

「誰だ？何のようだ？」

視線の先には何本もの触手を生やした目玉の怪物『悪魔の目玉』が洞窟の天井に張り付いていた。声は悪魔の目玉から発せられている。

「クロコダインよ」

悪魔の目玉の眼球から映しだされたのはクロコダインの上司。

魔軍司令ハドラーだった。

「おおっ！これは魔軍司令殿！失礼をした！」

クロコダインは武人としての礼儀を取り姿勢を正した。

「どうしたのだ？お前にはロモス王国の攻略を命じていたはず」

だというのに洞窟で眠っていた部下にハドラーは鋭い眼光を向けた。クロコダインはその視線を受け流して頭を振った。鼻で笑う。

「だめだ だめだ、あの国は…。」

吹けば飛ぶような腰抜けばかりよ。強い奴など一人もおらんわ」

クロコダインの言い分、それは団長たる自分が出るまでもない。配下の魔物たちに任せておけば後数日ほどでロモスを攻略できるとの事だ。

「相変わらずだな…。だが今日はその件ではない。

我が魔王軍に楯突く輩が今、魔の森に迷い込んでおるのだ。

お前の手で始末してくれ」

「なに？どんな奴だ！？」

悪魔の目玉が映し出しているモノが変わる。

映しだされたのは自分がよく知る場所、魔の森の風景。

そして森を歩く二人の少年。

少年の一人の顔が大きく映しだされた。

まだ十歳を過ぎたばかりに見えるあどけない表情の少年。

「こいつだ……名はダイ…ッ！」

クロコダインは顎が外れんばかりに大口を開けて固まった。まさか軍団長たる自分に勅命が回ってきたと思えば、倒す相手は人間の少年だったのだ。この上司は何を考えているのか。そう思うと呆れるのを通り越して笑えてくる。

「くく……、ワハハハハ！」

「何がおかしい？」

「冗談は止めてくれ。」

仮にも獣王と呼ばれる俺に、こんなガキの相手をしろというのか？」

「ガキだと侮るな！コイツは信じられないような底力を秘めておる」

ハドラーは何かを思い出したように忌々しそうに拳を握りこんだ

「…この俺も手傷を負わされたわ！」

「なんだと！？ハドラー殿に傷を!？」

クロコダインはハドラーの告白に驚愕した。

「そつだ！まだ力を付けていない内に殺さねば  
必ずや我等が難敵となり立ちふさがらう……」

「ぐふふ……、面白いつ！」

クロコダインは口を吊り上げながら立ち上がった。

その表情は歓喜に震えている。  
好戦的な笑を浮かべながら側にあつた大斧を手を取った。

「ハドラー殿を傷つける程の小僧……っ！  
是非とも戦つてみたくなつたわ！」

その眼光は武人としての誇りに溢れていた。  
クロコダインの表情にハドラーは確信した。  
コイツならば間違いなくダイを葬ることが出来るだろうと。

「では任せたぞ……確実に葬れ！」

悪魔の目玉はその瞳を閉じた。

「かわいいっ」

ネイルの村にあるミーナの家。  
先程の金色のスライムが机の上にあった。  
ミーナはぶるぶると揺れるスライムと遊んでいた。  
幻の珍獣ゴールデンメタルスライム。  
知る人ぞ知るまさに生きた宝石。  
それよりも……。

（神の涙か……）

原作知識。

オレはゴメちゃんの本体が『神の涙』だと言う事を知っている。

あらゆる願いが叶う願望機。

ゴメちゃんに願えば元に世界に帰れるかも知れない。

しかしオレは直ぐに頭を振った。

正直に言つて、オレは元の世界にあまり未練はない。

高校生だったオレがこの世界にきてもう一年以上の時間が経つ。

戻ったところでどうなるというのか？

学校は面倒臭いと感じていたし、卒業後の進路も全く見えてなかった。

しかしこの世界は居心地が良かった。

スキルの恩恵で商売は順調だったし、好きなドラクエ世界の武器や

珍しい道具を手元においてある現実には本当に気分が良かった。

魔王軍によって平和が脅かされているが、いずれダイ達が世界を救つてくれる。

今の生活を捨てて元の世界に戻るのには抵抗感が生まれるのだ。

(やっぱり戻りたくないな……叔父さんには悪いけど)

現実世界の便利な文明の利器と様々な社会のしがらみ。

ドラクエ世界の自由な生活と魔物の脅威。

天秤にかけると矢張り自分に帰る選択はなかった。

それに自分には両親はいない。昔交通事故で亡くなっている。

世話になつている叔父も負担がなくなると思えば都合が良い。

(それに『神の涙』にちよっかい掛けて魔王に知られる訳にはいかない)

オレは思考を切り替えた。

マームは壁にもたれ掛かってスライムを見ている。

無害とはいえ、魔物とミーナを一緒にするにはまだ心配なのだ。

「どうしたもんかしら？」

「マアム、その二人組み、もしかしてロモスに行くって言うてなかった？」

「どうしてそれを？」

「いや、ネイルの村を素通りしたんだ。一番近い街はロモスだろ？」

「そうね……」

「で、どうするんだ？あの子、届けるのか？」

「そうね。今頃困っているかもしれないし……」

マアムはため息を付いて言った。  
その時だった。

ドオオオオン！！！！！！

大きな地響きが響き割った。

マアムは顔色を変えて外に飛び出した。

オレも後に続く。

外に出るとマアムは軽い身のこなしで屋根に飛び上がった。

「森が燃えてる……」

轟々と燃え盛る魔の森。

これは只事じゃないだろう。

マアムは直ぐに家の中に戻ると、置いてあった武器を取った。

ハンマーロッド。

強い打撃力を持つが、その重量の為に鍛え上げた戦士にしか操れない武器だ。

「マアム、もしかして行くのか？」

「ええ、これは只事じゃないわ。タケルはミーナとここに居て」

マアムはオレの返答を待たずに駆け出した。  
不意にズボンがギョツと掴まれた。

「お兄ちゃん……」

ミーナは不安そうな表情をオレに向ける。

オレはマアムの後を追うつもりはない。

何故なら行く必要がないからだ。

俺が何もしなくても、ダイ達はマアムの助けで生き残る。

それにクロコダインなんて化物、俺が行っても意味が無いと思うのだ。

しかし……。

「後を追う気、無かったんだけどな」

「え？」

俺はミーナの手を優しく取ると腰を下ろしてミーナと同じ高さで視線を合わせた。

この世界が原作通りに進むかどうかはまだ分からない。

正直怖い。でもそれ以上に興味がある。

今から急いで追えば間に合うかもしれない。

俺は道具袋から『星降る腕輪』を取り出した。

「ミーナちゃんは、家から出ちゃ駄目だよ」

オレは星降る腕輪を装備した。

「お兄ちゃん……」

「ちょっと行ってくるよ」

オレはマアムの向かった先、燃える森に向かって駆け出した。

本日のステータス

レベル：12

さいだいHP：75

さいだいMP：536



ちから：32  
すばやさ：80  
たぐひよく：38  
かしこさ：265  
うんのよさ：256

攻撃力：86  
防御力：97

どうぐ

E：砂塵のヤリ  
E：ビロドマント  
E：力の盾・改  
E：幸せの帽子  
E：スーパリング  
E：星降る腕輪  
E：魔法の弾×10

呪文・特技

錬金釜 採取 大声 口笛  
寝る 忍び足 穴掘り 大防御

ホイミ ベホイミ  
キアリー キアリク シヤナク  
メラ メラミ メラゾーマ  
ギラ ベギラマ  
ヒヤド ヒヤダルコ  
バギ バギマ  
フバーハ

ラナリオン

トラマナ レミィラ

本日の目玉商品『星降る腕輪』（後書き）

オリ主の正義に目覚めたとも見える行動。

ですが結局は保身に繋がります。

自分は魔王軍怖い戦いたくない。

でも戦いを間近で見たい好奇心もある。

ダイ達は世界を救う。

もしも万が一にでもダイが負ければ世界は滅ぶ。

結果、自分の平穏な商人生活は永久にやってこない。

だったら手助けすれば良いじゃないか？

役に立つ武器や道具もあるしヤバくなれば逃げれば良くね？

キメラの翼があれば屋外なら逃げられるだろう。

一応、主人公の思考回路です。

結構ひどい奴に映るかもですが、道具系のチートを得ただけの男子学生なんてこんなものかな？

本日の目玉商品『砂塵のヤリ』（前書き）

ここから少しずつオリ主の成長…。

いえ、周りからの勘違いが始まります。

オリ主の保身と好奇心に繋がる行動が結果……。

## 本日の目玉商品『砂塵のヤリ』

現在オレは魔の森を駆けていた。

流石は『星降る腕輪』と言うべきか。

今まで体験した事の無い感覚だ。人間ってこんなに早く走れるのか。めまぐるしく流れる風景に感心しながらオレは更にスピードを上げる。

暫く走ると森の間に人影が二人見える。

マームがポップに詰め寄っているみたいだ。

「まさか、見捨てて逃げてきたんじゃないでしょうね！」

「ち、ちち 違っ、ちがつ！」

「じゃあどうしてのよ！えええ！？」

マームは激しい剣幕でポップを怒鳴りつけている。

「…っ！？」

ライオンヘッドが倒れている。

おそらくマームがぶっ飛ばしたのだろう。  
だが…。

倒れているライオンヘッドがゆっくりと起き上がった。

「あぶない！伏せる！」

咄嗟の事だった。

オレは反射的に掌をライオンヘッドに向けていた。

多分、ポップとマームを案じてでは無いと思う。  
ライオンヘッドの怒りに狂った表情にオレの防衛本能は警報を鳴らしている。

オレは力の限り叫んだ。

「バギマアアアツ!!!」

放たれた風は渦巻き木の葉や枝、小石を巻き込みながらライオンヘッドに吸い込まれた。

「ギヤアアアアアツ!!!」

うろう、グロい…。

ライオンヘッドは全身を切り刻まれながら吹き飛ばす。  
血を撒き散らしながら前足が、羽が尻尾が真空の渦から飛び出す。  
風が止むと、そこにはグチャグチャのスプラッタ状態の肉塊が残った。

マジで怖かった…。

こりゃ暫く肉は食えないな。

「あ、ありがとうタケル。でもどうしてここに？」

ポップから手を離れたマームが話しかけてくる。

「いや、それは…」

い、言えない。

好奇心に負けたなんて。

マームは少なくとも命がけで村を出た筈。

オレもある意味命がけだけど、全ては保身に直結する。

好奇心は猫を殺す。行動に矛盾があるがオレは好奇心に負けた。  
やっとの思いで搾り出した答えは…。

「し、心配だったから…」

「そう、ありがとう…」

「いや、それよりも、もう一人の子は？」

「はっ！？そうだったわ！」

「ちょ、ちよつとも待てよ！もしかして助けに行く気か？」

「当たり前でしょ！？あんたそれでも仲間なの！？」

「さっき言っただろ！？現れたのは軍団長の一人！」

「とんでもないバケモンだったんだぞ！」

「ちよつと待て！？」

「本気で行かないつもりかポップ！」

「それは不味い！」

「ダイが死んだらどうしてくれるんだ！？」

「だから急ぐんだろっが！あの子が死んでも良いのか！？」

「うぐっ！？」

オレの激しい一括にポップは口ごもった。

「さっさと案内しろ！ケツ蹴っ飛ばすぞ！」

「どわっ！わ、わかったよ！」

後で自分を殴ってやりたいと思った行動だった。

何様だよオレ…。

ダイが死ぬ「魔界浮上」人類滅亡「オレ死亡」。

この公式が頭に浮かんだオレはかなり必死だったと思う。

今のオレならクロコダインとだって表面きって立ち向かえるはず。  
オレとマアムはポツプの後を追った。

……無理。

何が無理だった？

クロコダインと正面切って立ち向かうだよ！

オレの視線の向こうではクロコダインがダイと対峙していた。

掲げた巨大な斧が、激しい突風を生み出している。

あれが真空の斧だろう…。

つか怖すぎる！

殺気で目をギラギラさせた二足歩行の巨大なワニ。

メチャクチャ怖い！

アレと睨めっこだって出来るか！

そしてオレはダイの凄さに驚愕した。

だってたった一人であの化物と戦ってるんだ！

さすが勇者様だよ。

「今だ！海破斬！」

ダイはクロコダインが放った真空の刃を切り裂いた。



海破斬の衝撃波はクロコダインの鎧を裂き、後退させる。

「何イ!?!」

ダイは好機とばかりに飛びかかった。  
しかしそれは悪手だった。

「カアアッー!?!」

「うわっ!」

突如吐き出された激しい息吹<sup>ブレス</sup>攻撃。  
空では身動きの取れないダイはまともに食らってしまふ。  
ダイの全身を焼け付くような痛みが襲う。

焼け付く息<sup>ヒートブレス</sup>

クロコダインの切り札だ。

コレを受けた者は、全身が麻痺し動けなくなってしまふのだ。

「オレに傷を負わせるとは噂通り大した小僧だ」

しかし。

それでもダイは身体を引きずって落とした武器<sup>ナイフ</sup>を取ろうとする。

「もう寄せ、お前はよく戦った。

オレは勇者を名乗る大人の戦士と星の数ほど戦ったが…  
それでもお前の方が余程強かったぞ」

クロコダインは止めとばかりに真空の斧を振りかぶった。

「少々惜しいが楽にしてやる」

ヤバイ!

ダイのピンチ!

「ダイーっ!」

ポップは走りながら杖を構えた。

「そうはさせん!」

クロコダインは真空の斧を使い突風を生み出す。

「これじゃあ近づけない!」

マアムは徐に魔弾銃を取り出した。

銃口をクロコダインに、ではなく倒れているダイに向けた。

「おい!何処狙ってるんだ!敵はクロコダインだぞ!

おい!...や、やめる~~~~っ!」

ポップの制止の叫びと同時に引き金が引かれた。

放たれた光線はダイへと吸い込まれる。

「なにするんだ!?気でも狂ったのかよ!」

「落ち着いて!ほら!」

マアムの指先を追うと、ダイの体が回復魔法の光に包まれていた。焼け付く息によって傷ついた身体は見る見るうちに元に戻り…。

「う、動く……動くぞ！」

「おのれ！」

ダイは起き上がってナイフを拾い上げるとクロコダインと距離を取った。

「いったいどうなってるんだ？」

「もしかしてキアリクか？」

「そうよ」

オレの回答にマームは肯定して魔弾銃から弾を抜き取った。

「キアリクを込めた弾を撃ってあの子を助けたの」

魔弾銃。

火薬の代わりに様々な魔法を込めて撃つ鉄砲。

原作同様にマームは説明してくれる。

商人としては欲しい一品だぜ。

話し込んでいる間に再びオレたちを突風が襲う。

見るとクロコダインが再び真空の斧の力を発揮していた。

オレたちを近づけない気か！

今のダイでは一人でクロコダインを倒すことは出来無い。

「あの武器を何とかしないと……」

マームは閃いたようにポップに聞いた。

「そつだ！あんだ、氷系呪文出来る！？」

「おお！オレの氷系呪文ヒヤドと言えば天下一品と評判で…」

「貸してくれ！」

「あ！」

ポップの自慢に付き合ってるヒマはない。

オレはマアムから弾丸をひったくると呪文を唱えた。

『氷系呪文ヒヤドルコ』

弾丸に確かに吸い込まれる感覚。

それを確認したオレはマアムに弾丸を手渡した。

「マアム！」

「…え、ええ！」

一瞬戸惑いを見せたマアムだったが直ぐに気を取り直して弾丸を魔弾銃にセットする。銃口を真空の斧に向けた。

「死ねいつ！！！！」

「今だ！」

ダイに向かつて斧を振り下ろす瞬間。

マアムは狙いを付けて引き金を引いた。

ヒヤダルコの呪文を込めた弾丸は見事に斧に命中。

「うお…、おおおっ!?!」

真空の斧はビキビキと音を立てて凍りつく。

氷はクロコダインの腕まで覆い込んだ。

ダイがこの機を逃すはずがなかった。高く跳躍する。

「クロコダイン!これでもくらえ!」

「しまった!朝日がつ!?!」

ダイの背後の太陽光によって目を塞がれたクロコダイン。

「でやあああああ~~~~っ!?!」

ダイの会心の一撃がクロコダインの片目を奪った。

「ぐわあああああ~~~~っ!?!」

ズウン…!

轟音を立ててクロコダインは大地に倒れ伏した。

「ダイーッ!?大丈夫かーっ!」

オレたちは倒れかけているダイの体を駆け寄って支えてやった。

「ポップ…、ひでえよ、逃げちゃうんだもん…」

「いや…あ、あはは…」

ダイの言葉にマームはポップを睨みつける。

「ベホイミ回復呪文」

オレはダイにベホイミを掛けながら、クロコダインに注意する。  
このまま終わる訳がない事を知っているからだ。

「あ、ありがとう……」

「あなた、回復呪文まで…もしかして賢者？」

「いや、商人だよ。呪文の才能だけはあつたみたいで…っ！」

クロコダインが起き上がった。

ダイ達もオレの表情を見て視線の先を見る。

そこには片目を潰され怒りの形相を向けるクロコダインがいた。

「グウウ……」

よ、よくもオレのカオに…いや！

オレの誇りに傷を付けてくれたな…っ！…っ！…」

その表情にオレの身体は完全に硬直していた。

蛇に睨まれた蛙である。本当にこんな状態があるのか！

マジで怖すぎる。つくづく思う。

チートな能力を得ても所詮オレはしがない学生でしかない事を。

「お、覚えているよ！」

……ダイ！お前はオレの手で必ず殺す！！！！」

その形相に恐怖を感じる一行。  
クロコダインは鬨気の塊を地面に向けて放った。  
そして出来た穴に飛び込んで姿を消した。  
どうやら助かったみたいだ。  
緊張が切れたオレはその場へたり込んだ。

「どうにか助かったな…」

「そうね。それにしてもタケルには驚かされたわ」

「いや、オレもアバンの使徒の凄さを改めて知ったよ」

「「ええ!?!」」

オレの言葉にダイとポップが目を向いて驚いた。

「お、オレも!俺達も、アバン先生の弟子なんだよ!」

「そ、そうなの?」

ポップとダイは首飾りを取り出して言った。

「アバンの印…」

マムも胸元から『アバンの印』を取り出した。  
マジで乳でけーな…。

「そうだったのか…道理で強いわけだ」

ダイは納得したように微笑んだ。

「どうだ？傷の方は？」

立ち上がってダイに聞いた。

「もうすっかり。爺ちゃんのベホイミよりきくよ」

そりゃ光荣だな。

こうやってダイの傷を治すのも好感度アップの為。

そりゃ子供が傷つくのには思うところはある。

でもそれ以上にダイに死なれるのは不味すぎるのだ。

オレの平穩を取り戻してくれるのはダイ達だけなのだから…。

「攻撃呪文に回復呪文…おめえ、賢者か？」

「マアムにも言ったけど聞こえてなかったのか？」

オレは唯の旅の商人だよ。呪文がちょっと得意なだけな」

「でも本当に凄いと思うわ。

ここに来る時も私たちの足についてきたんですもの。

かなり鍛えたんでしょうね？」

「へえ」

ダイも感心したように俺を見た。  
いいえ。



星降る腕輪の力です。  
そんなに尊敬の眼差しで見ないで下さい。

「あれ？その傷…」

マアムは俺の腕を取った。

何時の間にか腕から血が流れている。

「多分、どこかで枝にでも引っ掛けたんだろう。」

「こんな傷くらい舐めときゃ治るよ」

「ダメよ」

マアムは回復呪文ホイミを唱えて傷を直してくれた。

人に回復呪文を掛けてもらったのは始めてでちょっと感動。

「あ、ありがとう…」

「どういたしまして」

その様子を見ていたポップが遠慮がちに頭をかきながら言った。

「あ、あの…、俺にもひとつ回復呪文ホイミを…」

「ベチ！」

マアムは薬草を投げつけて返答した。

「はい薬草」

「て、てめえ！なんだよこの待遇の差は！？」

「臆病者と勇者の差でしょう？この人は商人なのよ？」

ごめんなさいポップ、マームさん…。

俺は臆病者です。断じて勇気なんて無いです！

これで次回の戦い逃げれば幻滅されるかな？

「本当は臆病者です！」なんて今更言えない…。

澄まし顔で無視するマームと喚くポップ。

ダイはその様子に思わず笑い声を上げていた。

(せっかく逃げる為に用意した砂塵のヤリ、意味なかったな)

いざとなればマヌーサの効果で逃げようと思っていたが…。

無駄になったのは喜ぶべきか残念がるべきか…。

俺は日の登り始めた空を眺めながら溜息を付いた。

「ああ…これで魔王軍に目を付けられたかも…」

まだ大丈夫、だよな？

本日のステータス

レベル：15

さいだいHP：89

さいだいMP：546

ちから：42

すばやさ：100

たいりよく：45

かしこさ：275

うんのよさ：256

攻撃力：96

防御力：107

どうぐ

E：砂塵のヤリ

E：ビロードマント

E：力の盾・改

E：幸せの帽子

E：スーパリング

E：星降る腕輪

E：魔法の弾×10

呪文・特技

錬金釜 採取 大声 口笛

寝る 忍び足 穴掘り 大防御

ホイミ ベホイミ  
キアリー キアリク シャナク  
メラ メラミ メラゾーマ  
ギラ ベギラマ  
イオ イオラ  
ヒヤド ヒヤダルコ ヒヤダイン  
バギ バギマ  
フバーハ  
ラナリオ  
トラマナ レミール

本日の目玉商品『砂塵のヤリ』（後書き）

クロコダインを退けてレベルアップ！

しかし臆病者です。

もしもクロコダインが退かずに襲いかかってくれば間違いなくオリ  
主は死んでいたでしょう！

流石運の良さ256とダイの主人公補正。

本日の目玉商品『鉄の剣』（前書き）

予約投稿は便利ですね。

赤い弓兵さんのファンのかたスイマセン。

先に謝っておきます。

気分を害される方もいるかも知れませんが…。

やっちまった感が拭えない今回。

## 本日の目玉商品『鉄の剣』

辛くもクロコダインを退けたダイ達。

一行は一旦ネイルの村に帰還し旅の疲れを癒す事になった。

「ピィ〜〜！ピィ〜〜！」

「ゴメちゃん！」

ダイ達はゴメちゃんがついてきた事に驚き、また再開を喜んだ。

「それにしてもゴメちゃんは凶暴化しないんだな」

「そうなんだよ。こいつにはなにか不思議な力があるのかもな」

「とにかく会えて良かった。ありがとう！マアム、タケル」

「どういたしまして……あ、お母さん」

人垣から出てきた優しそうな妙齡の女性。

マアムは嬉しそうに女性に駆け寄った。

「紹介するわ。母のレイラよ」

マアムは親娘並んで紹介。

並んでいるところをこうして見ると良く似ている。

「ねえ お母さん、この子達もアバン先生の弟子なんだって」

「まあ！アバン様の！？」

レイラは嘗て夫ロカとアバンと闘った仲間らしい。  
戦士ロカと僧侶レイラ。

間違いなく英雄だ。

僧侶と戦士の力を受け継ぐマームは『僧侶戦士』という事だ。

「ところでアバン様はお元気ですか？」

レイラの言葉にダイは気まずそうにポップと顔を見合わせた。  
ポップは言いづらそうに俯く。

「……え、えっと」

「げ、元気ですよ！」

ダイはポップの言葉を遮りながら無理やり笑顔を作った。

「そりゃもう、ピンピンしてますよ！」

「そうですか。良かった」

レイラは嬉しそうにニッコリと微笑んだ。

「ふむ、素晴らしい品揃えじゃのう」

「はい オレ自ら作り、仕入れた品々ですよ」



オレは現在、村長の家に来ていた。  
村長と商談を行なっている。

魔王軍の復活に伴い商人がなくなつた村に蓄えの余裕は殆ど無い。  
村に戻つてきた後、村長は直ぐにこれからの村の事を相談してきた  
のだ。

商人であるオレに食料や薬草などを売つて欲しいのだとか。

「大した金額は払えぬが、何とかならぬものかのう…」

「こつちとしても商売ですからね。」

まあ、多少は勉強させてきたのですが」

「おお、それは有難い！

……それから、すまんが村を守るためにも…」

「武具が欲しいのですか？」

オレの前に並べられているのは薬草や毒消し草に食料だ。

袋から次々と取り出したオレに村長はそれはもう驚いていた。

やはりゲーム仕様の四次元袋は見た事がないようだ。

付け加えると、この袋はオレしか使えない。

ゲーム同様に盗まれる事は無いのだ。

オレ以外の人間は袋に物を入れることも取り出すことも出来無い。

「うむ、武具が高価な事は承知しておるが…

マアム……、あの娘だけに負担を掛け続けるのは…」

この村は本当に良い村のようだ。

村長を始めとした全ての村人がマアムの身を案じている。

まさに『一人は皆のために皆は一人のために』だ。  
オレはドケチだが人情がない訳ではない。  
それに今は平和な時代とは異なり非常時だ。  
オレは鉄の剣や槍、盾を次々と取り出していく。  
鎧や兜は……まあ要らないだろう。動けなくなるだろうし。  
鍛えていない村人が完全武装は無理がある。  
本日の商品はコレだ！

鉄の剣（1000G）

鉄の槍（1350G）

鉄の盾（900G）

「村人の男性の人数分、用意できますが如何いたしますか？」

「ううむ……、村にそんな金はないわい」

村の人口はそれほど多くはない。

若者の多くは城を守るために徴兵されているからだ。

武器を扱える男性は大体十人くらい。

それでも人数分の装備を揃えれば大金になる。

「そうですか、ならレンタルはどうでしょう？」

オレは予てより温めていた計画を初めて見ることにした。

「レンタルじゃと？」

「はい、これらの装備を格安でお貸しします。

期限は1年間、値段は本来の十分の一でどうでしょう？」

「うむ…、これならば何とかかなりそうじゃな  
しかし良いのか？食料や薬草に加えて武器まで…  
ワシが言うのも何じゃが、お主にも生活はあるじゃろっ？」

「心配は要りませんよ。」

村長はオレよりも村の事を考えてあげて下さい」

「……すまぬ」

村長は申し訳なさそうに俯いてしまった。

いや、マアムの生まれ故郷だし、この先の事を考えるとね…。  
それにマアムは間違いなくダイ達に付いて旅に出してしまうのだ。  
マアムの価値と天秤にかければ全然足りなくらいだ。

こうして武器を与えておけばマアムの心も少しは楽になる筈。  
結果、オレの保身に繋がる！

「長老様、タケル！」

「ダイ？」

やって来たのはダイだった。

何やら真剣な面持ちでオレたちを見ている。  
そして意を決したように口を開いた。

「どうか俺に、魔法を教えてくださいっ！！」

「何じゃと！？」

「はい！俺がこの村にいる間だけでいいんです」

「ダイ…」

「俺だけが呪文が苦手だなんて言ってられない！」

「しかしじゃな…」

確かにこの村ではワシが一番の魔法の使い手じゃ

だがアバンの使徒である君に教える程の力は無いぞ」

「右に同じく」

俺も人に教えるほどじゃない。

俺の魔法の使い方は中二全開の妄想力と魔法力に頼った力ずくだ。

多分、参考にはならないだろう。

某・赤い弓兵よろしく「想像するのは常に最強の…」みたいなノリでやってるのだ。

やばい、考えれば恥ずかしくなってきた。

絶対に人には教えられないな。

「俺、先生には3日しか修行を受けてないんだ」

ダイは目を伏せて消え入りそうな声で言った。

「なんじゃと！？どういことじゃ！？」

ダイは悲しそうな表情を上げて告白した。

「長老、それにタケル…」。

マアムやおばさんには絶対に言わないで下さい…！

先生は…

アバン先生は死んだんですっ！！！！」

ダイは涙を流しながら言った。  
握りこんだ拳と肩が震えている。  
見てもらえないな。  
俺はダイから目を逸らした。

「…あ」

森の向こうに誰かが走り去っていく。  
あの後ろ姿はママムだった。  
オレたちの話を聞いていたのだろう。  
これで原作通りママムはダイ達と旅立つ。  
喜ぶべきなんだろう。  
だけ…。

「やりきれないよな…」

アバンは実は死んでいない。  
教えるのは簡単だ。  
けど、何故オレがそんな事を知っているのか矛盾が生まれる。  
それだけではない。  
アバンが心を鬼にして身を隠した意味が無くなってしまふ。  
オレ自身も力を貸すなら、ダイ達の成長を阻害しない程度にしなければ。  
これはさじ加減が難しい。

「タケル？」

「…あ、ああ。ごめん、ダイ  
魔法の修行か……。」

オレも感覚的に使っているだけだし…」

「その感覚を教えてくださいんだ」

「俺からも頼むよ」

「ポップ！」

何時のまにか現れたポップもオレに頭を下げた。

「俺に出来るのは手本として実際にやってみせる事だけだ  
それでも良いなら構わないけど…」

「充分だよ！ありがとう！」

「ならばワシも微力ながら手助けさせてもらうかの」

こうしてダイの魔法の修行が始まった。

ダイは殆どの呪文の契約を既に済ませた後らしく契約の必要な無い。  
どうやら故郷で育ててくれた『じいちゃん』が自分を魔法使いにする  
為に片っ端から契約をさせたらしい。

魔法を扱う素養と準備自体は問題ないのである。

「じゃあ取り敢えず火炎系呪文からだな」

取り敢えず最も魔法力を消費せずに簡単なものから挑戦。  
マジックパワー

俺の知る限り呪文とは先天的な資質があれば誰にでも使うことの出  
来るものだ。

契約によって魔法の力を宿し習得する。

そして魔法力、力量ともに足りていれば魔法は発動する。

そんな具合だ。

オレに促されて火炎呪文を唱えるダイ。  
しかし呪文は巧く発動しない。

掌にマツチで付けたような小さな火が出るだけだ。

何度も唱えるが結果は同じ。

ダイは子犬のような目をオレに向けた。

「じゃあオレがやってみせる。ダイ、良く見てくれ」

「うん！」

オレの先には藁や木の枝で出来た人形が立てられている。

オレは指先に魔法力を集めプラス方向にイメージする。

こういう時に原作知識が役に立つ。

想像するのは常に最強の自分……なんちゃって。

「すげー」

オレの指先に瞬く間に火球が生み出された。

その大きさは大体バスケットボールくらいだ。

赤い炎はオレの想像力によって黄色に変わる。

あ、ちよつと間違えた。

「火炎呪文！」

撃ち出された火球は轟々と音を立てながら人形に命中。

一瞬で人形を灰に変えた。

「な、なな……」

振り変えると全員あんぐりと口を開いて固まっている。  
やり過ぎたか？

確かに先刻のメラはメラミ並の威力があったからな。  
現代で生きたオレは炎の色によって温度が変わってくる事を知っている。

魔法とは集中力とは良く言ったものだ。  
錬金術師たるオレに相応しい使い方だ。

「あ……あれのどこが火炎呪文だ！どうみてもメラミだろ！」

「凄いや！どうやってたらそんな風に魔法が使えるの」

ダイは尊敬の眼差しをコチラに向けてくる。  
やめて！そんなに純粋な目を向けないで！  
オレのライフはとっくにゼロよ！

「ま、まあ……」

それはオレの中二の妄そ……

……いや、想像力といつかなんと……」

「チューーニ？想像？どついう事？」

「そんな言葉、聞いた事ねーぞ」

ヤバっ！

声に出てた！？

えっと、どう言おうか……。

まさか中二病の説明をする訳にもいかなしな。  
そして苦し紛れに出た言葉は。



「……そ」

「そ？」

「想像するのは常に最強の自分」

ゴメンナサイ赤い弓兵さん。

オレはあなたの言葉を汚してしまいました。

「なんか良いね。それ…」

そうか、常に最強の自分かあ…

そういえば先生も言ってたっけ？

魔法はインスピレーションだつて」

ポップも思うところがあるように頷いている。

ダイは気を取り直して標的である人形に手をかざした。

「 火球呪文！<sup>メラ</sup>」

見事に火球が出現する。

しかし飛んでいく気配がない。

「くっ、こうなったら…でりゃあああああ！…！」

ダイは火球を殴り飛ばした。

火球はオレの手本と同じように人形を灰に変えた。

ダイが無理やり打ち出したからだろう。

その威力はもはやメラではない。

マジで怖い。

ダイは嬉しそうにコチヲを見ると、飛び上がって喜んだ。

「や、やったー！」

初めて自分の意志で魔法を成功させたぞー！」

「うむ、見事じゃ」

「けど、なんつう力技だよ…」

あんなの成功した内に入らねーよ」

「まあ良いじゃないか。

あんなに喜んでるんだ。水を差すのもな…」

「確かにな…」

ダイは未だに飛び跳ねて喜んでいる。

オレも初めて呪文を使った時はあんな風に喜んだな。

それはもう厨二全開だった…。

この際だ、次いでに真空系呪文バキも教えてみるか。

オレは飛び跳ねているダイの所へ歩き出した。

さいだいHP：89  
さいだいMP：546

ちから：42

すばやさ：100

たいりよく：45

かしこさ：275

うんのよさ：256

攻撃力：115

防御力：107

どうぐ

E：ガンブレード

E：ビロドマント

E：力の盾・改

E：幸せの帽子

E：スーパリング

E：星降る腕輪

E：魔法の弾×10

呪文・特技

錬金釜 採取 大声 口笛

寝る 忍び足 穴掘り 大防御

ホイミ ベホイミ

キアリー キアリク シャナク

メラ メラミ メラゾーマ  
ギラ ベギラマ  
イオ イオラ  
ヒヤド ヒヤダルコ ヒヤダイン  
バギ バギマ  
フバーハ  
ラナリオ  
トラマナ レミール

本日の目玉商品『鉄の剣』（後書き）

中二病が発症したタケルでした。

ダイの大冒険で中二病が誤解されてる…。

チューニニ魔法を使う為の優れた集中法？

ダイ君、ポップ騙されるな。

**本日の目玉商品『鉄の胸当て』（前書き）**

ランキング見て驚きました。

日間、週間、月間トップ！

読んでくれた沢山の読者様に感謝です！

ありがとうございます。

本日の目玉商品『鉄の胸当て』

「明日、村を出る？」

「そりやまた急な事だな」

日も暮れ魔法の修行が終わり、俺達は明日に備えて休む事にした。ミーナの家を宿として使わせてもらう。食事も終わり床に付いたところでダイが村を出ると言い出した。

「うん、あまり長いできないから」

「ロモスに行くんだよな？」

何をしにいくのか聞いても良いか？」

「王様を助けに行くんだ！怪物モンスターに苦しめられてるらしいから」

「……そう」

急な事にマームは目を丸くしている。

そして寂しそうな顔を見ると目を伏せて部屋を出ていった。

「さてと」

「あれ？どこ行くの？」

「ちよつと夜風に当たりにな」

オレは外に出ると先程までダイが特訓をしていた場所に来た。

寝る前にオレ自身の魔法の特訓をしようと思ったからだ。

これからの戦い、介入する気はないが巻き込まれる可能性が有る。

その時、自分の身を守る力は絶対に必要だ。

しかし強力な攻撃魔法を習得してしまえば、ポップの役目を奪いかねない。

なら小手先の技術を高めれば…。

オレは両掌にそれぞれ異なる呪文の構成を試みてみた。

しかし…。

「……ちっ！失敗か…」

やっぱりそう簡単な技術じゃないんだな」

思うように集中できずに魔力は霧散してしまっ。

二つ同時の呪文行使、どうやらかなりの高等技術の様だ。

「だからといって諦める気はないけど…」

オレは気を取り直して両掌に魔法力を集中させた。

もしも成功すれば戦術の幅が広がる。

そしてあの魔法も出来るかもしれない。

マジで夢が広がる！

「…おっと、雑念は捨てないとな」

オレは気を取り直して両手に魔法力を集中した。

「……無理」



約1時間後。

オレは両手の魔力を霧散させて呟いた。  
はつきり言って難しすぎる。

なんだよこれ！

ポップとマトリフの師弟コンビ、マジでチートだよ。

左右で異なる絵を描くよりも難しいわ！

こんなの一朝一夕では無理だ。

最終決戦でぶっつけ本番で成功させたポップに尊敬。

「今日は無理だな。

要練習だなこりゃ…

気を取り直して錬金でもするか」

オレはステ画面を開くと錬金釜を選択した。

目の前に錬金釜が出現する。

このゲーム仕様のお陰でオレは道具を盗まれた事が無い。

全くチートなスキルだよ。

オレは持っている全ての薬草と毒消し草を素材として使い、一段階上の回復アイテムを作り出していく。

やっぱり何でもコツコツやるのが一番だ。

そして作業が終わり、心地よい眠気を感じる。

オレは明日に備えて床に就いた。

「もう朝か…」

窓の外を見た。

東の山からは日が顔を覗かせていた。

視線を下げると村の入口が見え、そこには人集りが出来ていた。ダイとポップの見送りか。

俺も一緒に行こうかな。

魔の森を一人で抜けるよりもダイ達と一緒にのほうが安全だ。

「…いや」

俺は直ぐに考えなおした。

明日の朝にはクロコダインが百獣魔団を率いてロモスを襲う筈だ。

そうなれば魔の森の怪物もかなり少なくなるだろう。

村を出るならその時の方が良いかもしれない。

でも…。

「流石にナイフと布の服は…」

明後日にはダイはクロコダインと戦わなければならない。

しかも防具は無しナイフ一本…。

どんな罰ゲームだよ！

難易度HurdどころかVery Hardだよ！

「少しくらいなら、手助けしても良いよな…」

オレは直ぐに起きると、ダイ達の所に急いだ。

「ダイ兄ちゃん…」

怪物をやっけたら、絶対にまた来てね！」

「頑張るんじゃないぞ」

「気をつけてな」

「マアムもありがとう!」

「ごめんね、本当はついて行ってあげたいけど」

「大丈夫さ!ちゃんと地図をもらったしね!」

「ダイ、ポップ!」

「タケルも見送りに来てくれたの?」

ダイ達に駆け寄ると、ダイは嬉しそうにオレの顔を見上げた。だからそんな顔で見ないで欲しい。

伝説級の武具を上げてくなる。

オレは尤もらしく咳を一つ、道具袋からあるものを取り出した。

「それもあるが、ダイに受け取ってほしい物がある」

「え、何を…」

オレは道具袋から鉄の剣と鉄の胸当てを取り出した。

「え、えええっ!?!」

剣と胸当てを見て、ダイは目を白黒させて驚いた。

「ダイ、装備してやるからコツチに來い」

よろず屋がサービスでお客さんに装備させてあげるのはデフォだ。  
オレのコーディネートに驚くが良い！

「も、貰えないよ！オレ、お金なんて無いし！

そう言いながらもダイはチラチラと鉄の剣を見ている。  
本当は欲しいくせに無理しやがって。

オレはダイの肩に手をおいた。

「ダイ、良く聞いてくれ」

「う、うん…」

「きのう現れたあの怪物…

恐らく近い内にダイのところに現れるはずだ」

オレの言葉にダイは真剣な表情で頷く。

「敵は独りじゃない。

百獣魔団とかいうのも居る…

いくらお前が強くてナイフ一本で勝てる程、連中は甘くない」

「そ、それは…」

オレは更に畳み掛ける。

「昨日の戦い…」

「え？」

「正直言って凄かった…」

オレ、メチャ怖くて死ぬかと思ったんだ…

でもさ…

ダイが戦つてるところを見て、こつ何ていうのかな…」

ダイ達は黙ってオレの話の話を聞いている。

「子供だけど、とてもそうは見えないっていうか

うん、本当にダイが勇者に見えたんだよ…」

「オレが勇者？」

ダイは目を丸くして驚く。

オレはダイの言葉に「ああ」と答えて剣を差し出した。

「オレは商人だ…

魔法はそれなりに使える。

けど実際に戦いの術を学んだわけじゃない…

オレにはダイの様に魔王軍と戦う事は出来無い。

だから…。

オレはお前に賭けてみようと思う」

「タケル…」

「俺の代わりにその装備を連れていってくれないか？

さっきも言っただけど、クロコダインの相手にナイフ一本は無理だ」

唯でさえクロコダインの方が力量が上なんだ。<sup>レベル</sup>

しかも真空の斧とゴツイ鎧まで装備している。

その上ザボエラまで絡んで来るのだ。

Very Hardとか思ってたけど、難易度はそれ以上かもしれない。

オレは真剣な表情でダイの顔を見つめた。

ダイは理解し力強く頷いた。

「ありがとう、タケル！」

オレ、絶対に口モスの王様を助けるよ！」

「頼んだぞ」

オレは早速ダイに鉄の胸当てと鉄の剣を装備させてやった。

布の服の上で光る銀色の防具。

腰に差された鉄の剣。

こうして見ると一端の戦士に見える。

かなり見違えた。

「ど、どうかな？」

ダイは照れくさそうに言った。

「よく似合ってるぞ」

どうせクロコダインを倒せば鋼の剣を貰えるんだ。

鉄の剣くらいなら問題ないだろう。

切れ味ならパプニカのナイフの方が上かもしれないし。

「な、なあ！オレには？」

「臆病が治ればくれてやるよ」

「なんだよ！それ！」

「あはは！」

すまんポップ！

本気でゴメン！

クロコダイン戦が終われば良い装備を上げるから許してくれい！

「代わりにコレをやるよ」

「なんだよ、コレは？」

「俺特性、特やくそうだ！」

「特やくそう…」

ああーっ！思い出した！

以前、ベンガーナにいた強欲商人！」

「失礼な。」

適正価格って言っただろ？

あれ？言っただけ？」

「聞いてねーよ！」

まあ、先生も褒めてたから効果は良いみたいだけど  
ていうか金は取らないのかよ！？」

「今は非常時だ。」

皆の為に戦ってくれてる勇者から金は取れないよ。

俺が金を取る相手は持っている相手だけだ！」

決まった！

本当はそうでも無いんだけどな…。

周りを見ると皆が感心したように俺を見ている。  
照れるじゃないか…。

「……んんっ！」

じゃあな！ダイ、ポップ！

二人とも絶対に死ぬんじゃないぞ！」

「うん！じゃあもう行くよ！」

「元気でな！」

ダイとポップは別れを惜しみながら手を振り、森の中に消えていった。

「本当に大した奴らだな…。」

「全くじゃ…。」

あんなに小さいのに魔王軍と戦おうとは…。」

「マアム？」

ふとマアムを見ると、彼女は泣いていた。

既に見えなくなった二人の後ろ姿。

彼らが消えた森を見ながら涙を流していた。  
母レイラがマアムの肩にそっと手を置いた。



「行ってあげなさい」

「お母さん……」

「私達のことは構わずに」

レイラはマアムに武器を渡しながら微笑む。

「私もね…むかし

傷つきながらも戦い続けたアバン様とお父さん…  
二人を見かねて村を飛び出したのよ」

「お母さん!」

「私の娘だもの、しょうがないわよ」

「そうだよ!」

「いつてきなよ!」

村の人たちも口々に声を上げた。

「村のことなら心配ないぞ

タケル殿が格安で武具を貸してくれたのでな」

「タケルが?」

「まあな…」

それよりもマアム…

ダイ達にはお前が必要だ…」

俺はダイと同じ鉄の胸当てをマアムに手渡した。

「ダイ達を頼む…」

マアムは力強く頷くと魔の森に向かって走りだした。

「マアムにまで…ありがとうタケルさん」

マアムが入った後、レイラさんに感謝された。  
こうしてみるとマジで美人だな。

「いえ、良いんですよ。」

俺にはコレくらいしか出来ませんから…」

ふう、これでダイ達と別行動が出来るな。

心配だけど自分の命と天秤に掛ければ自分の命に傾く。

肩の荷が降りた。

昨日、ダイ達がいたとはいえ、クロコダイン戦で懲りた。

アレは怖すぎる。

もしクロコダインが退いてくれなかったらと思うとゾッとする。  
暫くほのぼのが続けば良いな

本日のタケルのステータス

レベル15

さいだいHP：89

さいだいMP：546

ちから：42

すばやさ：100

たいりよく：45

かしこさ：275

うんのよさ：256

攻撃力：115

防御力：107

どうぐ

E：ガンブレード

E：ビロードマント

E：力の盾・改

E：幸せの帽子

E：スーパーリング

E：星降る腕輪

E：魔法の弾×10

呪文・特技

錬金釜 採取 大声 口笛

寝る 忍び足 穴掘り 大防御

ホイミ ベホイミ  
キアリー キアリク シャナク  
メラ メラミ メラゾーマ  
ギラ ベギラマ  
イオ イオラ  
ヒヤド ヒヤダルコ ヒヤダイ  
バギ バギマ  
フバーハ  
ラナリオン  
トラマナ レミーラ

本日の目玉商品『鉄の胸当て』（後書き）

タケルは布の服「防具ではないと思っています。  
唯の普段着です。  
今回は少し短めです。

**本日の目玉商品『身かわしの服』(前書き)**

原作に絡ませると少し長くなりますね。

しかし好きなシーンなので入れてみました。

## 本日の目玉商品『身かわしの服』

ダイ達がロモスに向けて出発した後。

オレは一人、頭を悩ませていた。

次の目的地はベンガーナ。

恐らく現時点では最も安全な国だ。

ベンガーナの誇る戦車は実際に、何度も魔王軍の侵攻を防いでいる。初めて戦車を見た時は感動したものだ。

「はあ……」

オレは大きく溜息を付いた。

やっぱりダイ達が気になる。

心配してるわけじゃない。

何せダイは主人公。

それに竜の紋章まであるのだ。

どんなにピンチに陥っても勝てる要素はあるのだ。

「心配？」

ふと横から声がかかった。

レイラさんだ。

何時の間にかオレの隣にいた。

「ダイ君達の身を案じているのでしょっ？」

そりゃ勘違いだ……。

最近良く勘違いされてるなオレ……。

ここは一つ誤解を解いておかないとな。

「いえ、ダイ達なら大丈夫だと思います。それに心配してるわけじゃないですよ。それよりもこれから先の事です」

「これから先の事？」

「はい、次はベンガーナにでも行くつもりです…あの国には戦車もあります。

魔王軍もそう簡単には攻められないでしょう？」

オレの言葉にレイラさんは目を見開く。そしてクスクスと笑った。

「えっと…オレ、可笑しいこと言いましたか？」

「ええ、何だかんだ言っても

あなたはダイ君達の身を案じている

だってそうでしょ？

そうやって理由をつけて

あなたはロモスに行こうとしてるんですもの」

何を言ってるんですか奥さん…。

自分勝手に自己解釈しないで下さい。

「だってベンガーナに行くにしても

ロモスから船に乗る必要があるでしょ？

お見通しよ…」

レイラさんの言葉にオレは固まった。



そうだった…。

ルーラの出来無いオレには徒歩か船しか移動手段はない。キメラの翼は最後に立ち寄った町や村に限定されている。レイラさんはニコニコとした顔で俺を見ている。

やばい、物凄くやばい展開。

もしかして期待してますか？

しがない商人の俺に期待してますか奥さん？

それに皆さんもそんなに期待に満ちた目で見ないでくれ。

「商人の兄ちゃん、マアム姉ちゃんを助けてくれるの？」

「頑張つて！」

「まだ若いのに大したもんじゃ」

何この展開。

もしかしてオレ、ロモス行き確定！？

レイラさんを見る。相変わらずニコニコ。

村の皆を見る。期待に満ちた眼差し。

断れる雰囲気じゃない。

「……い、いや」

レイラさん流石！バレてました？

…適わないな」

冷や汗ダラダラなオレ。

何でこんな事になったんだろう。

確かにベンガーナに行くにはロモスから船に乗らなきゃいけない。

行くしかないのか？

でもって戦いに巻き込まれるのか？

いや諦めるの早い。

今からゆっくり行けばもしかしたらクロコダイク戦が終わった後に着くかもしれない。そうなればオレはこのままベンガーナに行けば良い。

そうと決めれば…。

「じゃあそろそろ行きます。

皆さん、お元気で」

「気をつけるのじゃぞ」

「マアムの事、よろしくお願いします」

こうしてオレはロモスへと旅立った。

「ゆっくり行こう…」

なるべくゆっくりと…

一晩くらい野宿しても良いかも…」

ロモスの城下町。

魔の森を抜けたオレは門を抜けて街に入った。

「きゃああああ」

「た、助けてくれーっ!」

周りからは悲鳴と獣の吠え声が響いてくる。

それだけじゃない。

ゴオオオオオオッ！！！！

街からは火の手が上がり、ガラガラと建物が崩れる音も聞こえてきた。

火炎系呪文か閃熱呪文か、魔物が使ったのだろう。

「なんでこうなる」

オレは城門の影に身を隠して街の様子を伺っている。

実はもつと遅くに…。

少なくとも事が終わった後ロモスに到着する予定だった。

けど無理だった。

魔の森で野宿が。

そんな度胸、ヘタレたオレには無理だったのですよ！

凶暴な怪物が徘徊してるような森で一人眠るなんて出来るか！

誰だよ！魔物の数が減ってるなんて言ったのは！

お陰で無理やりの強行軍。

超スピードでロモスを目指して疾走した。

星降る腕輪の力もあって日が登る頃にはロモスに到着した。

「嗚呼、逃げようが立ち向かおうが危険じゃん」

兎に角、ロモス城にだけは行かない方が良いな。

天秤に掛ければ逃げた方がまだ安全だしな。

にしてもモンスター怖い…。

このまま立ち止まっているのは流石に不味い。

オレは聖水を自分にふりかけると、教会へと走りだした。

タケルがロモスに到着する少し前  
ダイ達は怪物達の大きな咆哮で目を覚ました。  
窓を開けると既に怪物は城下町に侵入しており、町は阿鼻叫喚だっ  
た。

既に人々に犠牲も出ている。

「そ、総攻撃をかけてきやがった…」

ポップは身を竦ませている。

「お、おい！ありや一体なんなんだ！」

隣の部屋にいた偽勇者が泡くって飛び込んできた。

「百獣魔団が来たんだ！」

「そ、そんな！」

今までこんな大軍で魔物が襲ってきた事なんて！」

『グオオオオオツ！！！！』

今度は空から猛獣の雄叫びが響く。  
クロコダインだ。

ヘルコンドルの力を借りて空を飛んでいる。  
そしてそれに付き従うように鳥系の魔物が後に続いている。

「行け！行けいっ！！」

「ロモス城を殲滅するのだあつ!!!」

怒りに燃えるその形相に面々は冷や汗をかいた。偽勇者の一行は、全身を震えさせて怯えている。

「城へ向かつてる?」

マアムの呟きにダイはキツと唇を噛んだ。

ダイは装備を身につけると部屋を飛び出していった。

「早く後を追わないと!」

マアムは急いで身支度を整える。

そして壁に立て掛けておいたハンマースピアを取った。

「さあ行くわよ!」

「え、ええ!? 何でだよ!？」

ポップはマアムの言葉に難色を示した。

「先刻のクロコダインの目を見なかったの!？」

「あいつはダイを殺す事しか頭に無いわ!

「今すぐ助けに行かなきゃ!」

「俺たちやゴメンだからな!」

「そうよ! なんとたつて命が一番大事だしね」

「ハハ、俺も賛成!」

偽勇者達の意見にポップは賛成を表明。  
その言葉にマームは怒った。  
ポップの胸ぐらを掴んで引き寄せて叫ぶ。

「何ふざけてんのよ！？早く…っ！」

「だけだよ、ヤツは半端じゃなく強いんだぜ？  
行っても殺されるだけだっ…っ！」

「だから私達が助けに行くんでしょ！？  
早くしないとダイが殺されちゃう…っ！  
3人で力を合わせなきゃ…っ！」

「心配ねえって…  
いざとなりやダイはめっっぽう強いし…  
死にやしねえよ」

「…ポップ？」

マームは信じられないといった顔でポップを見る。  
ポップはバツが悪そうに目を逸らすだけ。  
二人の間に重い空気が流れる。  
号を煮やしたマームはポップを揺すって叫ぶ。

「あなた、ダイの友達じゃないの！？  
仲間じゃなかったのっ！？  
どうしたのよ…っ！」

「うっせえな！」

オレは初めから魔王軍と戦う気は無かったんだ！  
好きで戦っていた訳じゃないんだよ！」

ポップは肩を震わせて叫んだ。

「そりゃアイツとは一緒に修行した仲だ  
けどよ…」

あ、あいつがいるから次々と敵が襲ってくるんだぜ？  
巻き添えくって死にたかねえっ！」

「…っ！」

次の瞬間、ポップは吹き飛んでいた。

マームが力の限りポップをぶん殴ったのだ。

ポップは壁を突き破って倒れた。

すぐに身を起こしてマームを睨みつける。

「…て、てめえっ！」

しかし言葉が続かなかった。

マームが泣いていたのだ。

その表情は失望と落胆、そして深い悲しみ。

「あなた、アバン先生から何を学んだの？

ダイもあなたも先生の敵を討つために…

命がけで戦っている…

そう思ったからこそ私、ついてきたのに…

仲間になつたのに…」

「マーム…」

「最低よ！」

あんたの顔なんて二度と見たくない！」

マアムは背を向けて走りだした。

なんとか怪物をやり過ごしながらオレは教会へと目指していた。

逃げ切れない怪物を攻撃呪文で倒しオレは走る。

十字架の付いた三角の屋根が見える。

教会に間違いない。

非常時なら教会に住人が避難しているはず。

薬草を持っていけばウハウハだ！

命が掛かっているんだ。かなり売れるに違いない！

「…ん？」

あれは、マアムか？」

目に涙をためたマアムが走っていくのが見える。

向かう先には城がある。

どうやらポップと別れてダイを助けに行くみたいだ。

「…気になる」

ポップが勇気を振り絞って立ち上がるシーン。

メチャクチャ気になる…。

でも前も好奇心に負けて死にそうな目に合ったんだよな。

しかし今回は迷わず様子を見に行く！



何せダイの大冒険で一番好きなキャラを聞かれれば迷いなくポップと答えてしまうオレ！  
それにクロコダインの所に行く訳じゃないし…。  
ちよつとだけなら…。  
気がつけばオレはマアムが来た方角に向かっていた。  
少し行くと『I I N』の看板が見える。  
あそこにポップが居る筈だ。

マアムがダイの後を追って少し。  
ポップは葛藤の渦にいた。

怪物が怖い。自分なんかが適うわけがない。  
痛いのも怖いのも嫌だ。  
死にたくない。  
でも…。

本当はダイ達を助けに行きたい…。

「…いや、関係ない！関係ねえさ！

あいつらが死のうとオレの知ったこつちゃねえっ！」

そうだよ。

それにオレなんかが行っても意味はない。  
クロコダインに殺されるだけだ。

最終的にはそう完結してしまう。  
ポップはそんな自分が堪らなく嫌だった。

「おじやまするよ」

「だれだ？」

現れたのは魔法使いの老人だった。

「たしか、偽勇者の…」

「ホッホッホ」

魔法使いの男は怪しそうな笑みを浮かべると、部屋に備え付けられている椅子に腰を下ろした。

「あなたは逃げねえのか？」

「あいにくと皆が逃げてからがワシの仕事での」

魔法使いはローブに隠してある金品をテーブルに置いた。

「廃品回収と言うわけじゃな…」

「何を言っただやがんだ！」

そついうのを火事場ドロボーって言うんだ！」

「どつじゃ？」

お前さん、ワシの仲間にならんか？

見たところ見所がありそつじゃ…」

「冗談じゃねえ！

いいか？

オレはかつて魔王を倒した勇者アバンの弟子だ！

てめえら小悪党と一緒にするな！」

ポップはアバンの印を取り出して叫んだ。

「ほほう…」

ワシには全く変わらんように見えるぞ？」

「何だと!？」

「仲間を見捨てるような者に務まるかの？」

あの有名なアバンの使徒というのは…？」

ポップは痛いところを突かれ口籠った。

全くもってその通りだからだ。

ポップ自身、既に自覚している。

だが踏み出す勇気がないのだ。

「どれ…」

お前の仲間がどうなっているのか

ワシが水晶玉で見るとするか…」

魔法使いは取り出した水晶玉に魔力を込めた。

水晶玉が光を放ち、望みの風景を映し出す。

「ああっ…!？」

映しだされたのは倒れたダイを見下ろすクロコダインだった。

鬼面道士プラスも居る。

ダイに取っては手を出せない育ての親だ。

デルムリン島の結界の外に出た為ダイの敵に回ってしまったのだろ  
う。

マアムは悪魔の目玉に捉えられて身動きが取れない状態だ。  
まさに絶体絶命だ。

ポップは水晶玉に縋り付いて涙を流した。  
何とかしてやりたい！助けたい！

「ちくしょう…っ！」

「勇者とは勇氣ある者っ！！！」

いきなりの言葉にポップは顔を上げた。

いつもは悪人顔の魔法使いの真剣な表情。  
思わずポップは聞き入ってしまう。

男は立ち上がって叫んだ。

「真の勇氣とは打算なきもの！

相手の強さによって出したり引つ込めたりするのは  
本当の勇氣ではないっ！！」

男の言葉にポップは肩を震わせた。

それは自分自身だったからに他ならない。  
打算に満ちた自身の行動…。

男はフツと笑うと再び腰を下ろした。

「なんてな…」

ワシの台詞じゃないぞ

ワシの師匠がいつも言っていた言葉じゃ」

「…師匠？」

「ワシもな…」

若い頃は正義の魔法使いになりたくて  
修行しとったんじゃよ…

けど駄目だった

自分よりも強い奴が相手だと

どうしても踏ん張れなくてのう…

仲間を見捨てて逃げるなんてザラじゃった

おかげで今はこのザマじゃ

「じいさん」

「お前さんを見ると昔の自分と重なっての  
放っておけん気になってしまってたな…

ちと、おせっかいをしたんじゃよ」

男はポップの胸に手をおいて言った。

「さあ早く行け

胸に勇気の欠片が一粒でも残っているうちに…

小悪党にやなりたくないだろう？」

それはポップの望んでいた最後の一押しだった。

魔法使いの男はポップの背中を押したのだ。

ポップは目に強い決意を宿していた。

もう迷いはなかった。

ポップは部屋を飛び出した。

「ポップ！」

「お、おめえは、タケルじゃねえか!？」

宿屋から飛び出したポップに声を掛けたのはタケルだった。

オレが宿屋の前に来ると血相変えたポップが飛び出してきた。

そうか、これからクロコダインと戦いに行くのか。

凄い勇気だな。

さすが魂の力『勇気』の人だけの事はある。

オレにはとても真似出来無い。

けど少しの手助けくらいは許されるだろう。

オレはポップに声を掛けた。

「ポップ！」

「お、おめえは、タケルじゃねえか!？」

「行くのか?クロコダインの所に」

「…ああ」

強い目だ。

今のポップになら武具を渡しても良い。

オレはポップに用意しておいた防具を手渡した。

「こ、こりゃ…『身かわしの服』じゃねえか!？」

「急いで着ろ！」

「時間がないんだらう?」

ポップが驚くのも無理は無い。  
身かわしの服は高級品だ。  
動きやすい様に作られており敵の攻撃を避けやすい。  
しかも鉄の鎧よりも丈夫なのだ。  
非力な魔法使いにとっては心強い防具なのだ。

「けどよ…」

「オレに出来るのはここまでだ  
出来ればオレも一緒に行ってやりたいが…」

オレは教会の方を見る。  
向こうからは人の悲痛な泣き声が聞こえてくる。  
ポップの表情が歪む。

「オレはオレに出来る事をしようと思う」

これは本音だ。  
オレは大量の回復アイテムを持っている。  
今は役立てる時だ。

「ダイとマアムを助けるんだろ？」

オレの言葉にポップは力強く頷いた。  
ポップは着ている服を脱ぎ捨てると走りだした。  
どうやら走りながら身かわしの服を着る気の様だ。

「やれやれ、たった一日で変わるもんだな  
アレが本物ってやつなんだろうな」

上半身裸で身かわしの服を脇に抱えて走るポップ。  
その後ろ姿を見ながらオレは溜息を付いた。

「頑張れよ…ポップ

オレ、お前の大ファンなんだからな…」

勿論ダイよりも…。

こんな事、とても本人には言えないよな。

オレはポップに言った言葉を実行する為に走りだした。

本日のタケルのステータス

レベル16

さいだいHP：95

さいだいMP：550

ちから：45



すばやさ：110  
たいりよく：47  
かしこさ：275  
うんのよさ：256

攻撃力：118  
防御力：112

どうぐ

E：ガンブレード  
E：ビロードマント  
E：力の盾・改  
E：幸せの帽子  
E：スーパリング  
E：星降る腕輪  
E：魔法の弾×10

呪文・特技

錬金釜 採取 大声 口笛  
寝る 忍び足 穴掘り 大防御

ホイミ ベホイミ  
キアリー キアリク シヤナク  
メラ メラミ メラゾーマ  
ギラ ベギラマ  
イオ イオラ  
ヒヤド ヒヤダルコ ヒヤダイ  
ン  
バギ バギマ

フバーハ  
ラナリオン  
トラマナ レミール  
インパス

本日の目玉商品『身かわしの服』（後書き）

タケルにBL趣向はありません。

純粹にポップのファンなだけです。

身かわしの服はやり過ぎでしょうか？

クロコダイン戦の後、確か旅人の服を貰えた筈…。

鉄の鎧よりも丈夫で回避率UPな装備：やり過ぎかな？

実は迷いました。

『身かわしの服』か『くじけぬ心』か…。

でも『くじけぬ心』はポップよりもタケルにこそ必要なものかなと…。

**本日の目玉商品『真・星皇剣』(前書き)**

やっちまった感が拭えない今回…。

しかも短いです。

後々の伏線作りです。

本日の目玉商品『真・星皇剣』

ウオオオーーン!!!

それは怪物の断末魔だった。

ロモスの空に広がる悲しき悲鳴。

獣王クロコダインが倒されたのだ。

その事実は城下町で暴れていた魔物達を萎縮させた。

頭を失った百獣魔団は戦意を喪失、魔の森へと逃げ帰っていった。

「や、やったぞー!」

「俺達の勝ちだー!っ!」

「魔王軍を追い払ったぞー!!!」

兵士たちの勝利の声に街の人々は安堵の息を漏らした。

オレは教会で怪我人の手当を行っていた。

ベホイミとホイミの連発で既に魔法力は枯渇。

薬草での治療に切り替えていた。

それで漸く怪我人も数えられる人数に減っていた。

「これでもう大丈夫だ」

「ありがとうございます!」

何とお礼を言っていていいか…」

「ありがとう、お兄ちゃん」

オレは怪我をした親子を治療。

母親は何度も頭を下げて礼を言った。

「これ、少ないですが…」

「いや、今回は無料タダで良いですよ

お大事に…」

家を破壊され魔物から追われてと、悲惨な目にあつた人々。

そんな人達から金なんて取れない。

まあ金を持っている相手からは取るけど…。

オレは最後の怪我人の治療を行うと溜息を付いて腰を下ろした。

「はあ、マジで疲れた…」

それに…腹減った〜」

治療を終えた時、既に太陽は真上に登っていた。

腹も減るわけだよ…。

教会を出ると、人々の顔に笑顔が戻っていた。

人々が口モスを救った勇者を噂している。

「勇者様が魔王軍の親玉を追い払ったって話だ」

「まだ少年らしいぜ」

「とにかく一目」

勇者様を拝みたいものじゃ…」

「これからお城で

ロモスを救った勇者様のお披露目があるらしいぞ」

「急げ！」

人々はロモス城を目指して走っていく。

「さてと、オレも行ってみるかな」

オレはチーズを口に放り込みながらロモス城に向かった。

そこには既に多くの人が集まっており、勇者達の登場を心待ちにしていた。

テラスにロモス王、兵士たちが現れる。

兵士たちはトランペットに口をつけると一斉に勇者を迎える音楽を奏でた。

うん、ドラクエのオープニングですね。

暫くして立派な装備に身を包んだ3人の英雄が登場した。

ポップだけは身かわしの服を来たままだが…。

照れくさそうに現れた姿は少し微笑ましく、またどこか誇らしい。

「あの子達がこの国を救ったのか!？」

「凄い!まだほんの子供だぞ?」

「我等が英雄、ばんざーいっ!」

皆は惜しみなくダイ達に賞賛の声を上げている。  
本当に凄い…。

これが勇者ってやつか。

オレはダイ達を尊敬せずにはいられない。

特にポップの見せた命がけの勇氣

オレには出来ない事やってのける。

「やっぱりポップは凄いな…」

読者が最も共感を覚えたのは間違いなくポップだろう。

だから尊敬するのだ。

だからファンになったんだ。

「これから頑張れよ…」

……最後にポップと目が合った。

そんな気がした。

オレは一度だけ頭を下げると人垣から離れた。

港に向かう。

オレが助けた人々の中に船乗りがいたのだ。

彼にはベンガーナまで送ってもらおうよう話をつけてある。

「小さな勇者ダイ、か…」

街の人々が言っていた。

街を救った少年の勇者。

彼らは口をそろえて呼んだのだ。

オレはその言葉を反芻し口モスを旅立った。

目指すはベンガーナ。



一方その頃。

ランカークスの森の奥。

「ふ、ふふふ……」

ハハ、はははは……

ハッハッハッハッハッ！」

森には男の不気味な笑い声が響いていた。

その声は森に建つ一軒の小屋から聞こえてくる。

そこは魔界一の名工、ロン・ベルクの鍛冶場である。

小屋の主、ロン・ベルクは全身から流れる大量の汗も気にせず嬉々とした表情で笑い続けている。その手には二振りの剣が握られていた。

ロン・ベルクは高々と剣を掲げて叫んだ。

「遂に！」

遂に完成したぞ！

これが……っ！これこそがっ！

オレの求めていた究極にして至高の剣！」

二振りの剣は星の如き輝きを放った。

ロンを中心に広がる光りの奔流。

それは小屋を吹き飛ばし辺りの木々を薙ぎ倒していく。巨大なクレーターの中心でロン・ベルクは叫んだ。

「真・星皇剣だ！」

先程の光の奔流。

見るものが見れば即座に答えるだろう。

ドラクエを知るものならば見覚えのあるエフェクト。

ロン・ベルクの究極の剣が放った力。

それは全てを飲み込む魔力の爆発『ビツクバン』だった。

「おっと、勢い余って小屋を吹き飛ばしちまった…」

ロン・ベルクは二振りの魔剣を鞘に収めるとニヤリと笑った。

「勝てるぞ…」

神の創りだした究極の剣…

『真魔剛竜剣』に…っ！

オレは今、神を超えたっ！」

もはや長年に渡って過ごした小屋になど様は無い。

ロン・ベルクは真・星皇剣を腰に挿すと森の中へと消えた。

「待っているタケル…」

お前にも見せてやるっ…

究極の剣を…」

## 今回の装備データ

真・星皇剣 攻撃力160 使用するとビックバン

魔界一の名工であるロン・ベルクが王者の剣と未完成の星皇剣を元に創り出した究極の魔剣。

しかも星皇十字剣を使用した際の腕へと負担を大幅に軽減させる事に成功。

交差させて真名を叫ぶことによって『ビックバン』の効果を発揮。

超チート兵器。魔造兵器？

その威力は竜鬪気砲に匹敵する…かもしれない？

双剣ゆえに盾を装備できない。

王者の剣はお亡くなりになりました…。

本日の目玉商品『真・星皇剣』（後書き）

マジでやっちゃいました。

ロン・ベルクさん、タケルに對抗心。

会ったこともない神様よりも実際に会ってるタケルです。

BLではないです。

唯剣を鍛えただけでは自己満足。

魅せる相手がいてこそでしょう！

**本日の目玉商品『満月のリング』(前書き)**

今回は早くもダイと再開です。

タケル、呪われてるのかもしれない…。

## 本日の目玉商品『満月のリング』

潮の匂いと海鳥の泣き声が辺りを満たす。

オレはベンガーナに向かう船にいた。

船は波を掻き分けながらベンガーナを目指している。

船首に取り付けられている水瓶からは絶え間なく聖水が流れ魔物の接近を拒んでいる。これはオレが自腹で用意したものだ。

オレが自腹で用意しました。大事な事なので二回言いました。

魔物に襲われずに安全な船旅を満喫する為にはこのくらいしないと…。  
聖水を垂れ流しの船など王家か豪商くらいしか扱っていない。  
だからオレ豪商。

しかしオレは思い知ることになる。

船旅の脅威は魔物だけではないことに…。

「う、うわ~~~~っ！」

「あ、嵐だー！」

急いで帆を畳め！」

「ボサツとすんな！」

現在オレの乗る船は大嵐に見舞われております。

轟々と突風が船体の横を殴りつけ豪雨は船の床を叩く。

雨漏りと異常な揺れでオレは甲板に出て仰天した。

「津波だ~~~~っ!!!」

津波が来るぞ~~~~っ!!!」

「のわあああああっ!?!」

外に出たオレが目にしたのはコチラに向かってくる水の大壁だった。

津波は容赦なく船を飲み込みオレは海へと放り出される。

ヤバイ、これ死んだ?

オレの意識は身体と共に海の底に沈んだ。

ザザーン…

波の音が聞こえる。

「…んん、うう…」

身体の下の硬く冷たい感触。

そして動く小さな何か。

オレは薄く明けた目でそれを追う。

「…ヤドカリ

いや、マリンスライムか…?」

モンスター!?!?

オレは条件反射で飛び起きた。

スライム系は別に怖くない。

見た目的に全然問題ない。

けど怪物の前でぐうたら寝てられる程凶太くない。

「砂浜…」

オレ、生きているのか…

流れ着いたのか…？」

オレのいきなりの行動に驚いたマリンスライムは海へと逃げていく。

ははっ、流石のオレも今回は死ぬかと思った…。

運の良さ255は伊達じゃない…。

おっと、荷物は…良かった全部ある。

そうだよな。

オレの道具はスキルによってステ画面に隠してある。

無くなるわけがない！

でも…。

「1111、どこだ？」

「ここはパプニカじゃよ」

「誰だ!？」

いきなり声をかけられる。

オレは腰のガンブレードに手を掛けた。

剣の心得はないが脅しくらいにはなるか？

念の為、雷帝の杖も出すか…。

振り返るとピンク色の鎧を身につけた老人がいた。

心配そうにコチラを見ている。

「そう警戒せんでも」

ワシは敵ではないぞ…。」



「…みたいだな」

オレは剣から手を離すと立ち上がった。

「ワシはパプニカに仕える兵士  
名をバダックという…」

お前さんの名は？」

「オレは商人のタケル  
ベンガーナ行きの船に乗っていたんだけど  
大嵐にあつて船は沈没…  
気がついたらここに…  
お爺さん、ここがパプニカと言ったけど…」

「そうじゃ…」

「くそ！

流れ着いた先がよりにもよつて！  
直ぐに身を隠さないと…」

「お主…」

「情報は商人の命だ  
パプニカの現状なら知っているよ  
既に魔王軍に滅ぼされたんだろう？」

「滅ぼされとりやせんわ！  
まだ姫さまは存命じゃ！  
レオナ様が居る限りパプニカはまだ終わっておらん！」

オレの言葉にバダックはすごい剣幕で否定した。

「すまん…」

失言だったな…

お爺さん、けど大声出さないほうがいい…」

オレはバダックを近くにある大きな岩の影に引き込んだ。

「な、何じゃ!？」

「見るよ」

オレの指先には骸骨の兵士がキョロキョロと当たりを見回していた。  
魔王軍の偵察だろう。

生き残りがいないか確認しているのだろうか…。  
敵の姿にバダックはゴクリと唾を飲み込んだ。

「どうやらグズグズしてる暇はなさそうだ」

「そのようじゃな…」

「見つかる前に身を隠した方がいい

お爺さん…

いやバダックさん

身を隠せるような場所はないかな？」

「おお、あるぞ

この先の山岳地帯に洞窟がある

実はお前さんの他にも2人、匿っておる」

「へえ…」

間違いないダイとポップだ。

という事はヒュンケルに敗退した後なのだろう。

早いところパプニカから出たいが今は無理そうだ。

既に滅びた国に船なんてあるわけないし…。

不死騎団の支配下にある陸路は危険過ぎる。

俺一人で抜けられる程甘くないだろう。

となるとダイがレオナ姫を助けだすまで待つしかないか。

魔王軍にバレないように少しずつ手助け…。

さじ加減が難しいな…。

オレは隠れ家への道中、これから先の事を思考していた。

視界の悪い森を抜け岩場を通りぬける。

そして足場の悪い山道の先にその場所があった。

「じじじや」

洞窟の中からダイが出てきた。

「あ、バダックさん、おはよう」

「おはよう、ダイ君」

「やあ、ダイ

また会ったな…」

「あ、あ〜っ！

タ、タケル！？タケルなの！？」

「なんじゃお前さん、知り合いだったのか？」

「まあね」

「あの、ポップを知りませんか？」

朝起きたら居なくて」

「さあ…」

さつきは見たんじゃが…」

その時だった。

木々の向こうで眩い光りが放たれた。

「これは契約の儀式？」

俺達は顔を見合わせると、その場に急いだ。

そこには魔方阵の中で呪文契約を終えたポップがいた。

契約は成功した様でポップは安堵の息を吐く。

「ポップ、どうしたんだよ！」

「見りゃ分かるだろ？」

新しい呪文の契約を済ませたんだよ」

「新しい呪文…」

どうやらヒュンケル対策の様だ。

昨日戦った魔王軍の軍団長の一人。

不死騎団のヒュンケル。

奴の着ている鎧はあらゆる攻撃呪文を防ぐらしい。

軽減ではなく防ぐ。  
なんともチートな装備である。

「ポップ、頑張るな…」

「…ん？」

「お、おめえ、タケルじゃねえか!？」

「いや気づくの遅いつて

久しぶり…でもないか

「ロモスの英雄さん」

「何でオメエがここに？」

「いや参ったよ…」

「乗ってた船が嵐で沈んでさ…」

「気がついたらこの通りさ

「それにしても…」

「な、何だよ…」

「ママムの姿が見えないようだけど…」

「また喧嘩でもしたのか？」

オレの言葉に二人は落ち込んだように顔を伏せた。

「ママムは…」

「あいつは不死騎団の手に落ちた…」

ポップは悔しそうに声を絞り出した。

「そうか…」

その為の修行って訳か…」

「ああ、マアムは必ず救いだす！」

「うん！」

このポップの成長ぶり。

オレは思わず溜息を漏らしていた。

「本当に凄いな

頑張れよ二人共…」

ポップが契約によって身につけた呪文。

それは天候系<sup>ラナ</sup>呪文だった。

ポップが身に付けたのは天候系呪文の初歩。

雨雲を呼び寄せる『ラナリオン』だった。

今回の敵が呪文が聞かないのは承知の上。

だが唯一、ヒュンケルの鎧に対抗できる呪文がある。

それは電撃<sup>ライデン</sup>呪文だ。

呪文を防ぐといっても鎧である以上、金属には違いない。

電撃なら鎧を伝って中の人間にダメージを与えられる。

しかし勇者ではないポップは電撃呪文は使えないし今のダイの力量

では電撃呪文を使えるだけの魔法力がない。

だから…

「俺達二人でやるんだよ！」

ポップの目には力強い光が宿っていた。

「電撃呪文ライディーンは雷雲を呼び敵に落雷を落とす呪文だ

だからオレが雷雲を呼べば

普段のお前の魔法力でも雷が落とせるじゃねえか」

「あ、そうか！」

「俺達二人の力を合わせてヤツを倒し

マームを救い出すんだっ！！！」

「わかった！

早速やってみよう！」

この調子なら問題なさそうだな…。

特訓は間違いなく二人を成長させる。

オレは正直限界だった。

さっきまで海を漂流してたんだからな…。

「バダックさん

悪いけどオレ、休ませてもらうよ…

流石に限界だ」

「あ、ああ…。」

オレは洞窟の中に自前の毛布を敷いて横になった。  
つい笑みが溢れる。

「ふふふ…」

地底魔城か…

レアアイテム、有りそうだな…」

隠し通路に隠し部屋。

そこにあつた魂の貝殻。

それには手を出さないが他の物なら問題ないよな？

明日はダイ達が暴れてくれるからお宝取り放題かも…

珍しい素材もあるかもしれないし。

忍び足と聖水があればゾンビ系の怪物なんて怖くない。

いや、やっぱり怖いかも…

リアルバイオハザードは怖いだろ…。

行くの止めようかな…。

一度口モスに戻ったほうが良いのかも…。

オレはキメラの翼を取り出した。

「いや、でもな…」

しかしこんなチャンスはもう無いし…。

事が終われば確かフレイザードの暴虐で地底魔城は溶岩の海に飲み

込まれるはずだ。そうなるともう地底魔城の搜索は出来無い…。

オレはキメラの翼をしまった。

「明日、ポップに呪文書を見せてもらおう…」

もしかしたらオレの習得していない呪文があるかも」

オレは考えることを放棄して眠気に身を任せた。

疲れが溜まっていたのかオレの意識はまどろみに溶けていった。



次の日。

目が覚めた俺達は地底魔城の入り口。

岩の螺旋階段にいた。

階段の下を覗くが暗く底が全く見えない。

俺達は身を隠すように底をのぞき込んでいる。

「ここが地底魔城……」

「マアムを助けないと……」

「しかし変じゃな……」

いつもならガイコツどもが見張ってるんじやが

「へっ！好都合じゃねえか！」

「うん！」

ダイとポップは立ち上がった。

「よおしっ！」

ワシも一緒に行くぞー！」

「はあっ！？

…いやいや、いいんだよっ！

じいさんはここにいてくれよっ！」

「何を言う！」

老いたとは言えこのワシは

パプニカにこの人ありと謳われた  
剛剣の使い手じゃぞっ!!」

年寄り扱いされたのが気に触ったのだろうか。  
バダツクは剣を抜いて自己主張。  
なんか危なっかしい…。

「まあまあ…」

今回は仲間を救い出すのが目的なんだから

「そつだな…」

ここで見張りでもしていようぜ…」

「そつか…」

なら止むをえまい…」

バダツクは剣を鞘に収めた。

「ダイ、ポップ…」

「何だ？」

「コレを受け取れ」

オレは二人に『満月のリング』を手渡した。  
ヒュンケルの闘魔傀儡掌…。

あれが麻痺状態にする技ならこの装備は有効かもしれない。

「なんだよコレ…」

「多分、役に立つと思う…  
要らないなら返してもらっが…」

「いや、貰っとくよ  
前にもらった身かわしの服…  
アレには随分助けられたしな」

「オレも驚いたよ  
あのクロコダインの攻撃をヒラリヒラリと  
避け続けるんだから…！」

ダイは思い出したように言った。  
そうか…。  
あの装備、そんなに役に立ったのか…。  
しかしポップがヒラリヒラリねえ…。

「お前が渡すんだ  
何か特別な力でもあるんだろうな…」

「じゃあ行ってくるよ」

二人は『満月のリング』を装備すると螺旋階段を降りていった。

「さてと…」

もう暫くしてから行くとするかな…。  
お宝探しに…。

本日のタケルのステータス

レベル16

さいだいHP：95

さいだいMP：550

ちから：45

すばやさ：110

たいりよく：47

かしこさ：275

うんのよさ：256

攻撃力：118

防御力：112

どうぐ

E：ガンブレード

E：ビロートマント

E：力の盾・改

E：幸せの帽子

E：スーパリング

E：星降る腕輪

E：魔法の弾×10

呪文・特技

錬金釜 採取 大声 口笛

寝る 忍び足 穴掘り 大防御

ホイミ ベホイミ

キアリー キアリク シヤナク

メラ メラミ メラゾーマ

ギラ ベギラマ

イオ イオラ

ヒヤド ヒヤダルコ ヒヤダイン

バギ バギマ

ニフラム

フバーハ

ラナリオソ

トラマナ レミートラ

インパス

本日の目玉商品『満月のリング』（後書き）

今回も短めです。

早くロン・ベルクさんと再開させたい…。

ところで『満月のリング』で闘魔傀儡掌は防げると思いますが？

私的には有りかと思うのですが…。

流石に暗黒闘気での強制麻痺は無理でしょうか？

光の闘気無しでは破れないでしょうか？

最後にこの場を借りてアンケートを…。

何度か原作キャラとの恋愛を所望する声がありました。

最初は書く気なかつたんですけど面白いSSにするために挑戦するのもいいかと思いました。

とりあえず候補を何人か上げてみます。

1：当然マーム！ 乳、尻、太股が最高！性格も良い！

2：おてんばレオナ姫！ あのきつい性格が堪らん！

3：占い師メルル！ なんか常に3歩後についてきてくれそう…。

4：3賢者の姉妹 ヒュンケルから振り向かせるのは難しそう…。

5：フローラ様 年増だけどぶつくしい…。たぶん未だ処女。

6：ハドラー様 LOVE！女王アルビナス！ さすがに無機物は…。

もしよろしければアンケートにお付き合い下さい。

## 本日の目玉商品『チーズ』（前書き）

沢山のアンケート有難うございます！

今回の投稿を持ちましてアンケートは終了します。

ゴメちゃんにトポーと同じ能力を持たせてみました。  
チーズ食べて火を吐いたりします。

## 本日の目玉商品『チーズ』

「……」

現在オレは地底魔城を一人歩いていた。

ダイ達が地底魔城に入って約10数分後。

オレはバダツクさんに二人が心配になったと言って迷宮に入った。  
通路は狭く黴臭い。

もしも戦闘になれば直ぐに死ぬそうだし…。

前後から挟み撃ちになっても合えばヤバすぎる。

袋叩きにされてしまうだろう。

しかもこう狭くては強力な攻撃呪文も使えない。

下手をすれば迷宮が崩れて生き埋めになりかねない。

オレは敵を避けながら迷宮内を探索する。

「……牢屋？」

見張りがいる…あ、マーム発見」

暫く歩くと鉄格子が見え、向こう側にマームがいた。

拘束されていて動けないようだ。

「…ゴメちゃん、見つかったのか？」

原作通りじゃない？

オレはあまりの光景に呆けてしまう。

マームに付いてきたゴメちゃんが活躍して脱出に成功…。

「けど…」



どういうわけかゴメちゃんは鳥籠の中で見を回していた。  
見張りのガイコツは1匹か…。

オレは息を潜めてガンブレードを抜いた。  
腐った死体よりはマシな相手である。  
理科室の模型だと思えば怖くない…。

「…疾っ！」

オレは勢い良く飛び出すと同時に引き金を引いた。  
カシャン！

撃ち出された弾が刀身を炎の刃に変える。

ガイコツはいきなりの襲撃に対応できずに固まっている。

オレはその隙を突いて炎の剣でガイコツを両断した。

ガンブレードを利用した『火炎斬り』だ。

相手が不死系の怪物という事もあり、一撃でガイコツは沈黙した。

「タケルツ！？」

「マアム、無事か？」

「ええ…」

でもどうして貴方がここに？」

「ダイ達に偶然会ってな…」

心配になって助けに来たんだよ」

「そうだったの…」

ありがとう、タケル…」

オレは先ずゴメちゃんを鳥籠から出してやった。

ゴメちゃんは嬉しそうにオレの周りを飛び回る。  
なんか可愛い…。

「ピピイ」

次にマアムの荷物と鍵を取る。

そして鍵を開けてマアムを牢から出す。

「助かったわ」

「よし、早くダイ達と合流しよう」

二人もこの迷宮の何処かにいる筈だ」

「…タケル」

「どうしたマアム？」

「アレを」

マアムは牢の壁を指さした。

天井から少し下の位置に四角い穴があった。  
通風口だろう。

「このまま行っても見つかるだけ」

あそこから逃げましょう…」

「そうだな」

「私が魔弾銃で壁を破壊するわ」

そうすれば敵はそこから逃げたと思うはず」

「その案、採用！」

「じゃあマアム、頼んだ！」

「ええ！任せておいて！」

マアムは壁に銃口を向けた。引き金を引く。

ズガアンツ！！！！

弾に込められた魔法は爆裂系呪文<sup>イオ</sup>だった。

轟音と共に壁は砕ける。

「今だ！」

マアムは軽い身のこなしで通風口により登り中に入る。  
オレもその後続いた。

一方その頃。

ダイとポップは地底魔城の迷宮をひたすら彷徨っていた。

「その角はまだ行っていないな……」

二人は一つ一つ、まだ行っていない通路を風漬しに歩く。  
角を曲がった瞬間だった。

「ほが~~~~っ！！！」

ミイラ男が現れた。

「うわっ！逃げろ！」

「コツチからも来る！」

ミイラ男に続き不死系アンデットの怪物が次から次へと湧いて出てきた。

「こつちだ！」

ダイ達は怪物の来ない通路を選びながらひたすら走る。

「光りだ…」

もしかして外に出るのか？」

階段を上がった先に見える光り。

後ろからは怪物が追ってくる為、引き返す事は出来ない。

二人はそのまま走り抜けて外に出た。

「こ、ここは!?!」

二人が出た先は観客席に囲まれた円の中だった。

若い男の声が響く。

「ここは地底魔城の闘技場だ！」

「や、やべえ！嵌められた！」

敵の意図に気づいたポップは舌打ちした。

自分たちはまんまとおびき寄せられたのだ。

「かつて魔王だったハドラーが  
捉えた人間と魔物を戦わせて…

その死闘に酔いしれたという血塗られた場所よ」

つかつかと階段を下りながらその男は現れた。  
魔剣戦士ヒュンケルが。

「オレが貴様らに相応しい

死に場所として選んでやったのだ…!!」

「いきなり武装してきやがった…」

以前の戦いとは違い初めから鎧を身につけている。  
魔法使い（ポップ）がいる以上、魔法を警戒するのは当然の事だろ  
う。

鎧さえ着てしまえば二人からダメージを受けることはない。  
ヒュンケルは万全の体制で戦いに望んだ。

ダイは空を見上げた。

ここなら電撃呪文ライティンが使える…。

絶対に負ける訳にはいかない。

ダイ達は目の前の敵を闘志の籠った目で睨みつけた。

「タケル、絶対に前を見ないでよ！」

「わ、わかっている」

「もう、こんな事なら

タケルから先に入ってもらえば良かった」

俺達は通風口から出口を目指して進んでいた。

狭い通路にゴメちゃんは不満そうに鳴く。

普段から飛んでるゴメちゃんにはキツイだろうな…。

「仕方が無いって

通路には敵がいるんだから…」

オレは何か会った時の為に袋を探っている物を取り出す。

「マアム、これを…」

オレは相変わらず下を向いたまま手を伸ばした。

オレの手には小さな袋が握られている。

「これは…チーズ？」

でも不思議な感じがするわ…」

マアムは中を覗いて目を丸くした。

「ピンチになればゴメちゃんに上げてみてくれ」

マアムに手渡したのはドラクエ8でお馴染みのチーズだ。

実は先刻、ゴメちゃんを助けた時に願っておいた。

チーズ食べれば色々出来る様になりますようにと…。

マアムは不思議そうな顔をしながらチーズの入った袋をしまった。そして再び進み始める。

「…ん、あれは…きゃっ！」

「うわっ！」

「マアム、急に止まらなideくれ！」

「ちょっと！」

「イヤっ！お、お尻に…っ」

「わ、悪いっ！」

「でも止まるならそう言ってくれ」

「マアムに言われた通り前見てないんだから」

「そ、そうね…ゴメンナサイ」

「お、オレの顔にマアムのお尻の感触が…。  
感無量です…。」

「ここに来て本気で良かった！！」

「そ、それでどうしたんだ？」

「出口、見つかったのか？」

「わからない…行ってみましょう」

「マアムは穴を塞いでいる岩をどかして外を覗いた。」

「これは…隠し部屋？」

「マアムは部屋の中に降りた。」

「オレもその後が続く。」

中は岩壁に囲まれていて入り口は見当たらない。  
通風口が唯一の出入り口のようなだ。  
部屋の隅に宝箱が置いてある。

「開けてみようか…」

マームは宝箱の前に立って躊躇いがちに言った。

「ちょっと待ってくれ」

「タケル？」

オレは宝箱に手を伸ばして呪文を唱えた。

『インバス探知呪文』

宝箱はぼんやりと青い光を放つ。

「安全なようだな、開けてもいいよ」

「便利な呪文よね…」

「タケルって本当に何者なの？」

「だから旅の商人だよ…」

「ふふっ」

「出会った時からそればかりね」

「ははは…」



「じゃあ開けるわよ」

「うん」

マアムは宝箱を開いた。

「こゝ、これは…」

中から出てきたのは長方形の箱だった。  
開けてみると古い貝殻が入っていた。

#### 今回の道具データ

普通のチーズ（ゴメちゃんに食べさせると火の息を吐く）

冷たいチーズ（ゴメちゃんに食べさせると冷たい息を吐く）

ベホマラーチーズ（ゴメちゃんに食べさせるとベホマラーを使って  
くれる）

## 本日の目玉商品『チーズ』（後書き）

ゴメちゃんを活躍させたかったのでつい…。

ゴメちゃんに餌付けするのはマアムが良いと思いました…。

アンケートの結果ですがまだ集計中です。

参考にさせて頂きますのでお楽しみに…。

本日の目玉商品『魂の貝殻』？（前書き）

今回はかなり短いです。

ダイ達の戦闘シーン、書いてみたかったので…

アニメ見ながらチヨビチヨビ挑戦。

難しいですね。

本日の目玉商品『魂の貝殻』？

タケルがマアムと合流していた頃。

ダイとポップはヒュンケルと激しい戦いを繰り広げていた。

二人の手札は唯一つ。

ライティン  
電撃呪文だ。

だがそれを実行するにはヒュンケルに剣を使わせなければならない。  
ヒュンケルはダイ達を完全に格下に見ている。

その為、剣を使わず拳で襲いかかってきた。

しかしヒュンケルは知らなかったのだ。

ダイは天才だったのだ。

以前の戦いからヒュンケルの動きを予測しながら先手をうつダイ。  
心なしか速さも（スピード）も上がっている。

「おのれ！」

ヒュンケルは頭部の鞭を操ってダイを攻撃する。

鞭の鋭利な刃はダイの腹部を切り裂いた。

しかし -

「な、なにっ!?!」

ダイは直ぐに起き上がりヒュンケルに飛びかかった。  
敗れた服の隙間から灰色の網目が見えた。

「く、鎖帷子かつ!?!」

「だあっ!?!?!」

ダイの強烈な膝蹴りがヒュンケルの顔面を打つ。  
ヒュンケルは堪らず膝をついた。  
不覚を取った。いや敵を甘く見た自分が悪いのだ…。  
ヒュンケルはダイ達を睨みつけるとゆらりと立ち上がった。

「いいだろう…」

それほど惨たらしい死が望みならば

我が地獄の剣で息の根を止めてやる…っ！」

ダイの顔に緊張が走る。

しかしこの時を待っていた。

ダイは後ろで控えているポップを見た。

ポップもダイの意図を理解して頷く。呪文を紡ぐ。

「天空に散らばる数多の精霊たちよ…」

我が声に耳を傾け給え…」

ポップの祈りが通じ空に雨雲が集まっていく。  
ヒュンケルは兜から剣を取り出すと空に掲げて叫んだ。

「くたばるがいい!!」

「ポップ！今だーっ！」

「ラナリオー…ンツ!!!」

ポップから放たれた魔力の光が柱となって天を突いた。  
雨雲は雷雲へと変わりゴロゴロと音を立てる。

「何いっ!?!」

「くらえっ！」

ダイは剣を投げて叫んだ。

「ライディン電撃呪文！！！」

「ぐあああああつ！！！」

ヒュンケルの掲げた剣を避雷針にして落雷が落ちる。

まともに電撃呪文を受けたヒュンケルは金色の閃光に飲み込まれた。鎧を通して雷撃がバチバチと肉体へと通電する。

雷撃の衝撃で地面はえぐれ爆発した。

「や、やった……」

予想以上のライディン電撃呪文の威力にポップは溜息を漏らした。

パラパラと舞い上がった小石や砂が地面に落ちていく。砂煙は徐々に晴れてヒュンケルの姿が頭になった。

「ハ、ハハハ……」

「ハハハハハッ！」

両手と膝を付いて動かなくなったヒュンケル。  
ライディン電撃呪文は完全に決まっていたのだ。  
ポップの口から歓喜の声が上がった。

「やった！やったぞ……っ！！」

あっはっは！

予想通り鎧は壊せなかったけど  
中身は黒焦げだなこりゃあ」

ポップは動かない状態のヒュンケルを覗き込んでニヤリと笑った。

「オレたちを舐めてるからこうなるんだ！」

高笑いを続けるポップ。

だが僅かにピクリとヒュンケルの指が動いた。  
それに気づいたダイはポップを注意する。

「ポ、ポップ…！」

「あん？」

だが遅かった。

次の瞬間、ヒュンケルの拳はポップの頬を穿っていた。  
ガントレットによって覆われた鋼の拳がポップを吹き飛ばした。

「そ、そんな！」

ライディン  
電撃呪文も効かないなんてっ！？」

何事も無く立ち上がってきたヒュンケルにダイは愕然とした。

だが電撃呪文は効いてないわけではなかった。  
タダ単純にヒュンケルが強かったのだ。

ライディン  
電撃呪文を耐える程の肉体を持っていたのだ。

「貴様らを侮った…」

これ程の真似が出来るのならば



もう手加減はしない…っ！」

「ダイ…」

もう一度だ！

上空に雨雲があるうちに…っ！」

「遅いつ！」

「ウ…あう…」

電撃呪文ライティンを放とうとしたダイにヒュンケルの暗黒闘気が襲う。指から糸状の闘気を放ち操り人形の如く拘束する技だ。しかし今回は全開とは違った。

「うっう」

ラ、電撃呪文ライティン…！！！」

「な、何っ！？」

ダイの指のリングが輝く。

取り付けられた満月を模した宝玉にヒビが入る。

それと同時に放たれる電撃呪文。

しかし…。

「くっ、おのれいつ！」

ブラッディスクライド…！！！」

落雷がヒュンケルに、必殺剣がダイにそれぞれ向かう。ブラッディスクライドはダイの鉄の胸当てを貫く。しかし電撃呪文はヒュンケルの肩を掠めただけだった。

「あ、ああ…」

ダ、ダイ~~~~ッ!!!!!!」

ポップは顔を歪ませて叫んだ。

ヒュンケルの剣を受けたダイの身体は高く吹き飛ばす。

そして鈍い音を立てて地面に落ちた。

「お、終わった…」

肩を抑えながらヒュンケルは勝利を確信した。

その頃。

オレとマアムは通風口をひたすら進み続けていた。

「中々出口が見えないな…」

「ええ、でも急がないと…」

マアムは先ほど手に入れた魂の貝殻を大事そうに抱えて言った。

「さっき言っていたヒュンケルか…」

マアム達と同じ、アバンの使徒の

でもそんな奴が魔王軍の軍団長なんて…」

「彼は誤解しているだけよ…」

「真実を知ればきっと…」

「そう簡単にいくのかな？」

「え？」

「だってそうだろ？」

「もしもさっきのが真実なら

今までの人生を全て否定するようなものだろう？」

「本当の敵は別で

敵だと命を狙った相手はずっと自分を見守ってくれていた

きつい現実だ……」

「…そうね

それでも彼に伝えなきゃ……！」

「凄いな、マアムは……」。

「ヒュンケルの事を信じているのだろう……」。

「なんか胸が熱くなるな……」。

「だったらオレも出来る限りの事をしよう……」。

「マアムの言う通りだ……」

「ごめん、余計な事を言った……」

「いいのよ」

「オレを出来るだけの事をするから」

「ありがとう……」

「……」



今回の道具データ

超グリンガムの鞭 攻撃力140

改造されつくし最強になったグリンガムの鞭

近々出ます。

但し武器としてではなく…。

本日の目玉商品『魂の貝殻』？（後書き）

アンケートは終了です。

結果、ヒロインは要らないという意見とママムの両方。

その間をとってママムと仲良くなる。

但し恋人にはしない事にしました。

少しだけ良い雰囲気になってポップをヤキモキさせたりすれば面白いかなと思った次第です。

それから感想の返信が出来ずにスイマセン。

いきなり物凄く来た感想とアンケートを捌き切れない状態です…。

次回の更新から返信を再開するのでお許し下さい。

それから誠に申し訳ないですが明日は用事があって更新不可です。

明後日は投稿できるのでお待ちください。

本日の目玉商品『魂の貝殻』？（前書き）

遅れてスイマセン…。

アニメ見ながら描くとどうにも調子が出ません…。

海外版、笑えました…。

本日の目玉商品『魂の貝殻』？

ヒュンケルの必殺剣ブラッディースクライトによって倒れるダイ。

俺達はそれを見ていることしか出来なかった。

勝利を確信したヒュンケルは止めとばかりに剣を振り上げた。

マームは弾かれたように飛び出す。

「待って！ヒュンケルッ！」

「お、おまえっ！何時の間に牢から…っ」

ゴメちゃんが心配そうにダイを叩く。

「マーム…」

ダイが…、ダイが…っ！」

ピクリとも反応しないダイの様子にマームは顔を青くした。

「ヒュンケル…」

あなた…何てことを…っ！

あなたは自分の後輩を…っ！

仲間を斬ったのよっ！」

「何が後輩だ！」

コイツはオレの敵の弟子だ！」

「違っっ！」

ヒュンケルの言葉にオレは思わず叫んでいた。



「貴様は…」

「オレが何者かなんてどうでもいいっ！  
それよりも マアム！」

「ええ…！」

アバン先生はあなたの敵なんかじゃないわ！」

「デタラメを言うな！」

マアムは魂の堅殻の入った箱を差し出した。

「隠し部屋で見つけたのよ」

ヒュンケルは受け取った箱を開いてみる。

「これは…、魂の貝殻っ！？  
死にゆく者の魂の声を封じ込めるといっメッセージ」

「あなたのお父さん…」

地獄の騎士バルドスの遺言状よっ！」

「父さんのっ！？」

ヒュンケルは兜を取ると、魂の貝殻を耳に当てた。

ヒュンケルよ、我が息子よ

「と、父さんっ!?!」

懐かしい父の声にヒュンケルの表情が歪んだ。

「聞いて、ヒュンケル!

あなたのお父さんが残した真実を…

地底魔城が滅びた日、何があったのかを…!」

ヒュンケルは再び魂の貝殻を耳に当てると目を瞑った。

父の魂の声に耳を傾ける。

オレはヒュンケルが魂の声を清聴している間にダイに駆け寄った。

「タケル…、オメエも来てたのか…」

「ああ、心配になってな…」

ダイは…やばい、こりゃ酷いな…」

オレはダイの傷口を手で覆った。

鉄の胸当ては抉り取られている。

だが出血が酷い。

幸い心臓は外れていたが、それでも楽観できる状態じゃない!

「ベホイミ…」

オレはダイにベホイミを唱える。

傷口を優しい光が包み込み、徐々に傷口を塞いでいく。

「う、うとう…」

「気がついたか…」

「大丈夫か？ダイ…」

「…てない」

「え？」

「勝てな……い」

「剣でも。魔法でも……」

「こいつは……」。

魔法剣フラグか……」

オレはダイに耳打ちするように囁いた。

「だったら魔法と剣を同時に使えばいいよ」

「魔法と…剣…っ？」

「魔法と剣…魔法と剣…」

「剣と魔法……」

ダイはムクリと起き上がった。

「ダ、ダイ！」

ポップは嬉しそうに叫ぶが、ダイの様子に眉を潜めた。目に光がないのだ。

ブツブツと口の中で何かを呟いて目も虚ろだ。しかし眼光だけはヒュンケルを見据えていた。闘争心を漲らせた瞳で。

「駄目だ…」

ポップ、こいつ、意識がない！」

「何だつてっ！」

ヒュンケルは静かに父の言葉を聞いていた。

バルドスはハドラーの玉座の間へと続く門を守る門番だった。

あの日、勇者アバンが地底魔城へ攻めこんできた日。

バルドスはアバント戦った。

だがアバンは強かった。

バルドスはアバンの前に敗北した。

だがアバンは自分に止めをささなかつた。

「止めましょう…」

「何の真似だ！

情けを掛けるつもりか！？」

アバンはバルドスが首から下げている物を指さした。

それは息子ヒュンケルから貰った手作りのペンダントだった。

「それは明らかに子供が作ったもの…」

まさかとは思ったのですが

あなたにも家族が…？

一瞬そう思ったら斬れなくなりました」

アバンはにこりと笑ってそういった。  
負けた…。

バルドスは心の底から敗北を認めた。

實力だけではない。心も…。

バルドスは思った。

勇者アバンになら全てを託せると…。

アバン殿は快く引き受けてくださった

父の言葉にヒュンケルに衝撃が走った。

何から何まで自分の真実とは異なるが故に。

ややあつて…。

魔王ハドラーの断末魔が響き渡った。

にも関わらず、バルドスは死ななかった。

何故なら…。

「ハ、ハドラー様！？」

ハドラーは生きていたからだ。

ポロポロの身体を引きずりながら姿を現した。

死の瞬間、魔界の神バーンの超魔力に寄って救われたハドラー。

ハドラーはこれから力を蓄える為に眠りにつくのだという…。

「だがその前に…！」

お前を処刑しておかねばと思ってな…！」

「な、何故ワシを…」

「お前がとんでもない失敗作だからだ！  
くだらん正義感や騎士道精神！

おまけに人間の情愛に現を抜かすつ！  
拳句の果てに敵に地獄門を通らせる始末つ！」

「そ、そんな…」

「新たなる魔王軍には…

貴様のような不良品は絶対に作らんつ！！」

ハドラーの一撃がバルドスの身体を砕く。

「アバンめ…

束の間の平和を精々楽しんでおけ  
新魔王軍が誕生したら真っ先に殺してやる！」

ハドラーはそう吐き捨てると姿を消した。  
ほどなくして…。

「とうさん！！」

ワシにはもはや、全てを語る力はなかった

だからこそ…。

魂の声を密かに隠していた魂の貝殻に込めた。  
いつか我が子が聞いてくれるのを信じて…。

最後にもう一度言わせてくれ、思い出をありがとう

「と、父さーんっ!!」

メッセージが終わりヒュンケルは顔を上げた。  
そしてわなわなと肩を震わせて下を向く。

「そ、それでは父の命を奪ったのは  
ハドラーだったというのか…!?  
そしてアバンはオレが父の仇と恨んでいると知りつつ?  
俺を見守ってくれていたというのか…」

認められない…。  
認めたくない…。  
今までの自分は一体何だったのだ?

「嘘だ…  
う、うそだあああっ!!」

ヒュンケルは魂の貝殻を投げ捨てた。  
その時だった。  
一筋の雷光が地面に落ちた。  
そちらを反射的に向いてしまう。

「ダ、ダイ…」

「ば、バカな…  
ブラッディースクライドの直撃を受けて…」

「待てよ!  
ダイ、ダイ~~~~ッ!!」

ポップは必死にダイの足にしがみついて止めようとしている。

「おのれ！」

「今度こそ成仏させてやる！」

「やめて！」

「聞いたはずよ！お父さんの言葉を！」

「あなたが真に憎むべきなのは魔王軍だわ！」

「もう、悪の剣を振るうのは止めて！」

「うるさい！」

「う、あつ！」

ヒュンケルはすがり付いてきたマームを突き飛ばして叫んだ。

「いまさら……」

「今更そんな事が信じられるかつ！」

「俺は、俺はもう魔王軍の魔剣戦士……」

「ヒュンケルなのだあつ！！！」

壁に身体をぶつけて苦痛に顔を歪めるマーム。

頭に血が登っていくのが分かる。

オレはダイから離れると道具袋を探った。

取り出したのは雷鳴の剣。

「雷鳴よっ！」

キーワードを叫び秘められた力を開放した。



「何っ!？」

ぐわあああああっ!!！」

雷鳴の剣から電撃呪文ライデインが放たれる。

それもダイが放った電撃呪文とは違う異質なものだった。金色の閃光が視界を埋め尽くしヒュンケルを飲み込んだ。ゲーム仕様の全体攻撃のライデインだった。

「き、貴様…っ!」

鬼のような形相を向けてくるヒュンケル。

今度は兜を脱ぎ捨てていた為、更に大きなダメージを負った様だ。耳から血を流している。

「オレに構っていても良いのか？」

オレはヒュンケルの後ろを指さす。

「ちいつ!？」

ヒュンケルの直ぐ目の前までダイが迫っていた。ダイが剣を振るう。

「な、何だとっ!？」

ヒュンケルの顔が驚愕に染まる。

傷つかない筈の最強の鎧。

それがダイの剣によって引き裂かれたのであった。

「あ、あああ……」

「アレは……」

「ダ、ダイの剣が燃えている……」

ダイの持つ剣は炎に包まれていた。遂に魔法剣を習得したか……。後はダイに任せても大丈夫だろう……。オレはマアムの治療を行う為にヒュンケルに背を向けて歩き出した。

## 本日の道具データ

雷鳴の剣 攻撃力95 使うとライデイン

雷鳴の言葉で力を発揮。

ドラゴンクエスト?の仕様です。

テリーの雷鳴の剣、カッコイイです。



本日の目玉商品『魂の貝殻』？（後書き）

原作そのままっぼくてダメですね…。

少しだけタケルを活躍させてみたんですが…。

結構、反省した今話でした。

ヒュンケル戦後の構想練りなおしかな

本日の目玉商品『ファイト一発』(前書き)

ヒュンケル編終了です。  
短くてスイマセン。

## 本日の目玉商品『ファイト一発』

「ダイ、稲妻だ！」

稲妻を呼べ〜〜っ！！！」

「無駄だ！」

この一撃で終わりだ！」

ブラッディースクライドーッ！！」

「うおおおおおっ！！！！」

ライディーンツ！！」

ダイは稲妻を剣に付与。

未完成とはいえアバンストラッシュと共に放った。

「ストラーーツシュッ！！！！」

「うおおおおおあっ！？」

ヒュンケルは棒立ちのまま金色の斬撃に飲み込まれた。

煙が晴れそれでも両の足で立っているヒュンケル。

その姿にポップが驚愕するも一瞬。

次に瞬間、鎧は砕け、ヒュンケルは地に伏した。

これでようやく決着か…。

オレはマアムの膝の上で涙を流すヒュンケルを見て溜息を付いた。それにしても羨ましい…。

ポップはムスツとしている。

その気持ちよく分かるよ…。  
そしてダイの意識が元に戻り。

「…オレ、勝ったのか？」

「そうだ。俺の負けだ…」

天候呪文も切れ、青い空の下でヒュンケルは自らの敗北を認めた。

「ククク…クツクツク…」

不気味な笑い声が辺りに響く。

コロシアムの観客席、その上の方からだ。

俺達が視線を向けると、そこには大柄の人影が見えた。

「ざまあねえな…ヒュンケル…」

やられた拳句、女の膝枕で涙とは…」

「き、貴様は…」

その男は岩陰から姿を現した。

両半身が氷と炎に別れた怪物。

胸には大魔王の紋章が描かれたメダリオン。

そいつは凶暴そうな眼でコチラを睨みつけていた。

「氷炎將軍フレイザードツ！！！！」

ヒュンケルがその男の名を明らかにした。

「な、なんだ…っ!？」

あいつ、炎と氷がくつついてやがる！」

「なぜ貴様がここに居る!？」

「決まってるじゃねえか！」

貴様の息の根を止めに来たのよっ!!」

「なんだと!？」

フレイザードのあまりの言い分にヒュンケルは身を起こして叫んだ。

「だいたいテメエは昔から気に入らなかったんだ！」

人間の分際で俺様の手柄を横取りなんざ百年早いんだよ！」

俺は道具袋を探る。

こいつ自体はそれ程脅威じゃない。

実際の戦闘力は大したことないし、見た目もあんまり怖くない。戦えば勝てる自信はある。

でもそれよりも逃げる準備だけはしておかないと…。

ヒュンケルが助けしてくれるのは知っている。

が、現実に何が起こるか分からないからな…。

「テメエが勝てば

ぶっ殺して上前はねてやろうと思ってたが…

負けていたとは好都合だぜ！」

フレイザードは炎の腕から火炎の弾を作り出すと、コチラに向かって放り投げた。

「生き恥を晒さないよう相打ちって事にしといてやるよ！」



泣いて感謝しろいっ!!」

フレイザードの放った炎の弾丸は地面を砕き奥底へと潜り込んだ。  
そして…。

「な、なんだ!?!」

ゴゴゴ…。

音を立てて地面が揺れ始める。

フレイザードの攻撃の影響か、地震が起こったのだ。  
その揺れと音は次第に大きくなっていく。

「クカカカ…」

ちよいとそこの死火山に活を入れてやったのさ

もうすぐその辺りはマグマの大洪水になるぜ…!」

それはまさに死の宣告だった。

辺りは岩山に覆われており逃げ場は無い。

引き返そうにも迷宮に戻れば間違いなくマグマに飲み込まれるだろう…。

考えている間にマグマの噴火が始まってしまった。

フレイザードの開けた穴からマグマが吹き出す。

それに連鎖するように地面を突き破ってマグマが次々と吹き出してく。

「お、おのれ…」

フレイザードッ!!!」

ヒュンケルは剣をフレイザードに向かって投げる。

だが戦う力の残っていないヒュンケルに命中させる力は無かった。

剣はフレイザードの足元に突き刺さる。

「おっと！歓迎されてないようだな！

じゃあここらでオサラバさせてもらうぜ！

せいぜい溶岩の海水浴を楽しむんだな！」

フレイザードは高笑いをしながら去っていった。

俺達はどうにかマグマを避けながら移動するが徐々に追い詰められていく。

俺だけなら星降る腕輪の力で高い場所まで逃げられる。

後は時間との勝負か…。

俺は足にグツと力をこめると全力で走り出した。

「お、おい！タケル！？」

ポップが戸惑ったように声を上げるが今は無視だ。

時間にして約2秒。

速攻で観客席の上の位置まで来た俺は道具袋からある物を取り出した。

取り出したのは三つ。

超・グリーンガムの鞭と吹雪の剣、そしてファイト一発だ。

「みんなーっ！

これからマグマを凍らせる！

一箇所に固まって伏せててくれ！」

「お、おい？

タケル、一体なにを…？」

「考えている暇はなさそうだ…」

アイツの言う通りにするほか無いだろう…」

「そうね…」

「タケル、頼む！」

皆が身を伏せるのを確認すると俺は吹雪の剣の力を開放した。刀身から放たれた猛吹雪がダイ達に迫るマグマを凍らせていく。しかしその後から吹き出るマグマによって凍りついたマグマは溶け始める。

周囲だけ凍らせても皆を逃がすのは無理だ。

「皆、凍らせたマグマはすぐに溶ける！」

「コイツに掴まれ！」

俺は用意しておいたグリーンガムの鞭を振るった。

全体攻撃が出来るだけあってコイツはかなり長い。

しかも自在に動く三本の鞭。

先端に付いた刃が地面に深く突き刺さる。

俺は軽く退いて抜けないのを確認するとファイト一発を一气飲みした。

力が込み上がってくる…。

そして腕の筋肉が一回り膨れ上がった。

コイツは凄いい…。

「皆、早く掴まれ！」

ダイ、ポップが掴まりマアムが鞭に捕まる。

マアムはヒュンケルの方を向くと手を伸ばした。

「さあ！あなたも早く…！」

「オレは…」

ヒュンケルは俯いて目を逸した。

「何をしてるの！早くっ！」

マグマに押されて徐々に溶け始める氷。

それを見たマームは焦ったように声を上げた。

「な、なにやってんだよお！」

ポップも慌てたように声を上げる。

「早くしろ！」

ヒュンケルとかいったな！

マーム達を殺す気か！

そいつらは絶対にお前を見捨てない！

死なせたくなければ早く手を掴め！」

「くっ！」

ヒュンケルがマームの手を掴んだのを確認するとオレは腕に力を込めて叫んだ。

「いいか、絶対に手を離すなよ！」

「ファイトー、いつぱーっ！…！」

魚の一本釣の要領で一気に引き抜く。

「うわあああああっ!?!」

まさにギリギリだった。

鞭の先端に付いた刃が抜けると同時に氷の壁は突き破られた。

ダイ達が空を舞った瞬間、その場はマグマに飲み込まれた。

我ながら上手にいったものだ。

「…あ」

ここでオレは一つのミスに気づいた。

「アイツらの着地、考えてなかった…」

「うわあああああ〜〜っ!?!」

ズズンッ!

鈍い音と共に四人は地面に激突した。

ファイト一発の力もあって相当な勢いがついていた筈だ。

大丈夫かな…。

オレは三人に回復魔法を掛けてやろうと歩き出した。

本日のタケルのステータス

レベル18

さいだいHP：102

さいだいMP：558

ちから：50

すばやさ：120

たいりよく：51

かしこさ：279

うんのよさ：256

攻撃力：190

防御力：117

どうぐ

E：超・グリーンガムの鞭

E：ビロードマント

E：力の盾・改

E：幸せの帽子

E：スーパリング

E：星降る腕輪

呪文・特技

錬金釜 採取 大声 口笛  
寝る 忍び足 穴掘り 大防御

ホイミ ベホイミ  
キアリー キアリク シヤナク  
メラ メラミ メラゾーマ  
ギラ ベギラマ  
イオ イオラ  
ヒヤド ヒヤダルコ ヒヤダイソ  
バギ バギマ  
ニフラム  
フバーハ  
ラナリオソ  
トラマナ レミーラ  
ソソ  
ソソ

本日の道具データ

超・グリンガムの鞭 攻撃力140

改造され尽くして最強となったグリンガムの鞭。  
三本の長い鞭の先端に鋭利な刃が付いている。  
蛇のように自在に動き攻撃範囲も半端無く広い。

吹雪の剣 攻撃力105

刀身に氷系呪文の力が込められた魔剣。  
マヒヤドの効果。

ファイト一発

飲むと一時的に力が倍増する。

飲んだ後はお決まりの掛け声を…。



本日の目玉商品『ファイト一発』（後書き）

次回からは少し新展開にしたいなあと思っています…。

本日の目玉商品『破邪の剣』(前書き)

皆さん あけおめ

中々文章がまとまらずに遅れてしまいました。

## 本日の目玉商品『破邪の剣』

フレイザードの謀略の手から逃れた後、俺達は地底魔城から離れた森の中で身を休めていた。オレは一人ずつ回復魔法を掛けていく。ダイ、ポップ、マームに続いてヒュンケルにも…。

「暫くじつとしてるよ、ベホイミ…」

「あ、ああ…」

「だが良いのか？オレは…」

「んー？いいんじゃないね？」

原作知識からの確信も有ったのだろう。ヒュンケルはもう大丈夫だ。オレは何でもないように言った。

「な、なんだよ？」

ヒュンケルは目を見開いて俺をじつと見た。そ、そんな目で見るなよ…。

「いや、俺は魔王軍の元・軍団長だぞ？お前たちの敵として多くの人間を殺してきた…この国も俺が…」

「あー、そうか…」

でもさ、そんな事俺に言われてもなあ。まあ、罪の意識があって償う気なら…

俺じゃなくてレオナ姫に裁いてもらえば？」

「つまり、俺にお前たちと共に戦えと？」

「俺じゃなくてダイ達とだけどな……」

「そうよ、ヒュンケル……」

私達と一緒に行きましょう！」

「マアム……」

「そつだよ！」

「まあ、なんだ……」

オメエみたいな奴でも戦力になるからな……」

「ダイ、ポップ……」

アバンの使徒、四人の間に確かな絆のようなものを感じた。  
なんか良いなこういうの……。

友情芽生えちゃってるよ。

感慨深い……。

だがヒュンケルは頭を振って俯いた。

「駄目だ……」

お前達が良くても他の者達は納得せんだろう……

無論、この俺もな……」

勇者であるダイが自分と行動を共にする。

魔王軍であった自分と。

それは周囲からの疑惑へと繋がる事になりかねない。  
ヒュンケルは身体を起こした。  
まだ完治していないからだろう。  
その動きはギコチナイものだった。

「お、おい！まだ全快してない…」

「いいんだ」

「良くねーよ！」

マジで良くないです。

漫画じゃ分からなかったけど実際に見ると…。

ダイに斬られて焼かれた傷が痛々しいです。

しかも何故か治りにくいし。

竜闘気、使ってないよね？

しかも傷口が焦げ臭いし下手すりゃ腐るんじゃ…。

あ、焦げ臭いのは雷鳴の剣（オレの所為）か…。

「とにかくー！」

「ぐっ！」

オレはヒュンケルの襟首を掴むと強引に座らせた。

まだファイト一発の効果は切れていなかったなので楽だ。

お前は暫く絶対安静だ！

オレは再びベホイミを掛ける。

そろそろベホマの呪文、覚えたいな…。

チマチマ回復するのは面倒だし…。

「おーいっ!」

「…ん?」

「ありや、バダックさんじゃねえか?」

俺達が休息をとっている所にバダックさんが合流してきた。そういえば一緒に来ていたんだっただな。

「よ、良かった!お前さん達、無事じゃったのか!」

バダックさんは、はあはあと息を切らせながら嬉しそうに言った。

「マグマに地底魔城が飲み込まれた時は、もうダメかと思ったぞい…」

「へえ、よく俺達の無事が分かったな」

「それは、コヤツらのお陰じゃ!」

「久しぶりだな、ダイ ポップ マアム…  
それにヒュンケルよ」

「き、貴様は…」

ガサガサと草むらから姿を現したのは嘗ての軍団長。獣王クロコダインだった。

クロコダインは部下のヘルコンドルを伴ってその姿を現した。

「クロコダイン…ッ!??」

「いやあ、コイツと出会った時は腰を抜かすところじゃったわい」

バダックさんは頭を掻きながら高笑いした。  
順応早いな爺さん…。

それにしても…。

オレはクロコダインはじっと見てみる。

改めて見ると凄いい迫力だ。あ、目が合った。

「貴様は…」

「どうも、タケルです」

オレはビビりまくる内心を隠しながら素っ気なく挨拶した。  
コッチ見ないで。普通に怖いから。

「そうか、見た顔だと思ったら魔の森で会ったな」

「知り合いか？」

「少しな」

ヒュンケルはオレとクロコダインを見比べる。

「…おかしな商人だな」

オレの人間と怪物関係の事だろうか？

ダイ達、アバンの使徒と魔王軍の軍団長。

唯の商人が関わるには過ぎた者達だろう…。

オレの口から乾いた笑いが漏れた。

「クロコダインから聞いたわい  
お前さんがヒュンケル、魔王軍の軍団長じゃな……」

「ああ、そういう貴様は鎧からしてパプニカの兵士か」

滅ぼした側と滅ぼされた側。  
互いに剣呑な空気が流れる。

バダックは無言でヒュンケルをじっと見つめる。  
そして背を向けると静かに言った。

「お前さんに償う気があるなら、ダイ君達に力を貸してやれ  
……レオナ姫の事、頼んだぞい」

「……承知した」

バダックの言葉にアバンの使徒達の顔が綻ぶ。  
安堵の溜息を吐いた。

### 閑話休題

そういえばフレイザードとの戦いが近かったな。  
ダイ達の装備、換え時かもしれない。  
ダイの胸当ては完全にオシヤカになっているしな……。  
オレは道具袋を漁りながらダイ達に声を掛けた。

「ダイ」



「タケル、どうしたの？」

「お前達の装備、もうボロボロだろ？」

そろそろ新しい装備でも思ってたな……」

「え？」

オレは今のダイの力量に見合った装備を一つ一つ出す。  
ポップ、マームも興味深そうに寄ってきた。  
本日の商品はコレだ！

「おお！」

「すげー！」

ダイとポップが身を乗り出して見を見開いた。  
オレが出した武器は次の通りだ。

破邪の剣

銀の胸当て

魔法の盾

いかずちの杖

魔法の盾

身かわしの服

魔法の盾

銀の髪飾り

上からダイ、ポップ、マームの装備だ。

「早速オレが装備させてやるよ  
まずはダイからだ」

「え、でも本当に良いのかい？」

「確かに、見る限りどれも高価な物ばかりだわ」

ダイとマアムは目の前の装備に戸惑いの表情を見せた。

「ダイ、これからレオナ姫を助けに行くんだろ？」

あのフレイザードって奴の強さがどれほどか分からないけど  
軍団長の一人って事はかなり厳しい戦いになると思う」

「…確かにな」

奴の残忍さは六団長随一だ

戦って負けるとは言えんが、どんな卑劣な手を使ってくるか」

オレの言葉にヒュンケルが続ける。

クロコダイも同意するように頷いている。

「オレはお前らに賭けてんだよ」

ダイ、お前らアバンの使徒なら絶対に魔王軍に勝つてな」

「タケル…」

「こんな武具くらい幾らでも用立ててやるよ」

「ありがとう…」

「ははっ！そんなに感動するなっつて！  
照れるじゃないか」

本当はもつと強力な装備がある。

その事を知れば怒るかな…。

まあ、装備に力量レベルが追いついてないしな。

あとで説明すれば分かってくれるだろ。

「じゃあお前ら、コッチに来い！

装備してやるからさ」

オレはダイから順々に装備してやる。

ダイに銀の胸当てを装備させてやる。

新しいベルトと鞆当てを取り付けて破邪の剣を腰に差す。

そして魔法の盾をバックラーの様に腕に装着させて完了。

「どうだ？動きづらくないか？」

「うわぁ…

凄く軽いし動きやすいよ！

ありがとう、タケル！」

次にポップにも同じ様に魔法の盾を装備させる。

そしていかずちの杖を手渡した。

「サンキュー！」

次にマアムに身かわしの服を手渡す。

「マアムは取り敢えず向こうで着替えてきてくれ」

「ええ、本当にありがとう」

「サイズが合わなかったら言ってくれ  
たぶん大丈夫だと思うけど」

それからオレはマアムに銀の髪飾りを差し出す。

「タケル、これは…」

「銀は魔除けの力があるらしいぞ  
それに鉄の兜に匹敵する防御力があるし…  
その、マアムに似合うと思って…」

「あ、ありがとう…」

マアムは身かわしの服を岩の上に置くと髪飾りを髪に止めた。  
マアムの頭上で銀の髪飾りが輝いた。

「どうかな？」

「うん、よく似合っている」

「けっ！」

ポップが面白くなさそうに唾を吐いている。  
そんなに睨まないで欲しい。

最後に装備の特殊な力の引き出し方を説明してやる。  
破邪の剣は『閃光』の号令でギラの力を。  
いかずちの杖は『雷光』の号令でいかずちを落とす。

クロコダインの真空の斧の様なものと教えてやる。  
ダイは目を丸くしてポップは魔法力を温存できると喜んでいた。  
こうしてアバンの使徒の装備が完了した。

「さあ、これで準備万端だ！

さっそくレオナ姫を助けに行こう！」

「じゃが問題は姫さまが何処に居るのか…」

ホルキア大陸は広大だ。

何処から手をつけて良いのか。

セオリー通り一番近いところから虱潰ししか無いだろう。

だが時間をかけ過ぎると魔王軍に先手を取られかねない。

ヒュンケルとクロコダインにもレオナ姫の場所は分からないらしい。

もしも分かっていたら不死騎団によって止めを刺されているだろう。

完全に手詰まりだ。

俺達は頭を捻って考え込んだ。

「そ、そうじゃあああつ！！」

バダックさんが何かを思い出したように叫んだ。

「なんだよ、じいさん」

「神殿じゃ！神殿に急ぐのじゃ！」

「神殿？」

俺達はバダックさんの案内で神殿に辿り着いた。

神殿には地下への入り口があるらしく、俺達で手分けして探している。

神殿は既に不死騎団によって廃墟となっており、探すのも手間だ。入り口を探しながらマアムが問う。

「倉庫に何かあるんですか？」

「火薬玉じゃよ」

「火薬玉？」

パプニカでは戦場の合図は信号弾を用いるのだ。

火薬玉を見つけて信号弾を上げればホルキア大陸の何処かにいるレオナ姫の目に届くかもしれない。

バダックさんは汗を拭いながら溜息を付いた。

勝利の合図を示す赤い信号弾を上げれば姫も安心して姿を見せてくれるとの事だ。

「あつたぞ！」

向こうでポップの声が上がる。

俺達はその場に集合した。

だが崩れた柱に塞がれてとてもじゃないが中に入れない。

原作ではダイが魔法剣でふっ飛ばすのだが今回は心強い仲間がいる。

オレは「おれにまかせてよ」と意気込むダイを止める。

「なんだよ」

ダイは不満そうにする。

「もしかして魔法剣で吹っ飛ばすつもりか？」

「え、よく分かったね！」

「アホか！中には火薬が大量にあるんだぞ！？」

「…あ」

「自分の力が試したいのは分かるけど自重してくれ」

「じゃあどうすれば…」

「今のオレらには心強い味方がいるだろ？」

オレはクロコダインの方を見る。

皆もそれに釣られてクロコダインを見た。

そしてナルホドと納得したように頷いた。

「ふっ、この程度の柱など造作も無い」

クロコダインは得意そうに柱に近づくと真空の斧を地面に突き立てた。

そして柱に両掌を添えた。

「おおおおりゃああああっ！！！！」

気合と共に柱は浮き上がり弧を描いて俺達の後方へ落ちる。本当に凄い。ていうか迫力が…。

クロコダインさん、目が血走ってましたよ。

しかも腕の筋肉の盛り上がりも半端じゃない。

ヒュンケルもニヒルに笑って「流石だな」とか言ってるし。

皆の反応にクロコダイクさんドヤ顔だし…。

確かに物凄く心強いけど顔が怖い。

直視できない…。

バダツクさんはノリノリでクロコダイクの腕をバンバン叩いてるし。

「大したもんじゃー！」

なんかオレだけが蚊帳の外かい。

早く慣れないと、てか何としても慣れないと…。

クロコダイクが地下への入り口を開いてくれたお陰でオレ達は安全に火薬玉を入手する事が出来た。バダツクさんが信号弾をセットする。

ここらが潮時だな。

オレはダイ達とここで別れる事にした。

バダツクさんが信号弾を上げるのを確認するとオレは話を切り出した。

「なあ、みんな」

「どうしたの、タケル」

「実はオレ、ここで皆と別れようと思うんだ」

「ええっ!?!」

「どづいう事だよ」



「ああ、なんか成り行きで一緒に戦ったけどさ  
正直言ってお前らの戦闘には着いていけそうにない  
そう思ったのさ……」

「そんな事……」

「そつだよタケル！」

タケルが居なければオレたち助からなかったし！」

「いや、確かにそいつの言う事も一理ある」

「ヒュンケル？」

「てめえ、助けて貰っておいてその言い草は何だ！」

「やなさいよ ポップ！」

「いやヒュンケルの言うとおりだよ

凄いのはおれの持つ道具であつてオレじゃない

オレの実際の戦闘力はお前等の足下にも及ばないのさ」

「ふむ、だがタケル

お前はその道具を使いこなしダイ達を救つたのだから？」

クロコダインは腕を組んで言った。

「ああ、でもこれからも上手くいくとは限らない  
この先、付いて行っても足手まといになるだけだ  
弱点も容易にバレる」

「弱点」

「もしも道具を失えば、封じられれば…」

「確かに、非力な商人になるか…」

ヒュンケルが冷静に言う。

結構傷つくのですが…。

「それに何度も強力な道具を使っただけじゃ

間違はなく魔王軍の目にも止まると思う…」

オレには道具とチョットした魔法しか自衛手段がない

その時になるとダイ達に迷惑がかかる」

実際に魔王軍に人質に取られてもすればマジで原作どころじゃなくなる。

ダイ達は絶対にオレを見捨てないだろうし…。

オレとヒュンケルの言葉にダイ達の表情が沈む。

「そんな顔をするなよ

オレにはオレの戦い方がある」

「タケルの戦い方？」

「ああ、オレは商人だ

だから強力な武具や道具を仕入れてお前等の支援をする！」

「今までと変わらねえじゃねえか」

「違うぞ ポップ

ここからは別行動だ…

そうすれば色んな道具を仕入れることも出来るだろ?」

「確かにな…」

オレたち軍団長との戦いの時もそうだったが  
戦う度に装備が壊れていては…」

「ああ、より強力な武具は必要になるだろう」

流石ヒュンケルとクロコダイン、分かっている!

原作だと布の服とナイフでクロコダインに挑んでるからな。  
よく勝てたもんだよ。

「…タケル、また会える?」

「当然だろ」

オレの答えにダイは嬉しそうに手を差し出した。  
差し出された手を取って握手する。

「頑張れよ勇者」

「タケル、本当にありがとう!」

「マアム、元気でな!」

「今度はもっと良い装備を用意してくれよな」

「期待してくれ、ポップ」

オレは道具袋から月のめぐみと魔法の聖水を幾つか取り出す。

「これを持っていけ」

回復アイテムが有ればかなり楽になる筈だ

ヒュンケル、クロコダイン、ダイ達を頼みます」

「分かった、貴様も気をつけて行け」

オレは皆に頭を下げると背を向けて歩き出した。

振り返るとダイ達が手を振っているのが見える。

なんか嬉しい…。

オレはダイ達に手を上げると再び歩き出した。

続く？

### 本日の道具データ

破邪の剣 攻撃力42 使うとギラの効果。

『閃光』の言葉でちからを發揮。

いかずちの杖 攻撃力24 使うとライデイン(単体ver)

『雷光』の言葉でちからを發揮。

魔法の盾 防御力20 攻撃魔法の威力を軽減する。

ちゃんと防げば下級の魔法なら無効化出来る。

本日の目玉商品『破邪の剣』(後書き)

次回からタケル一人旅です。

本日の目玉商品『霜降り肉』（前書き）

今回から暫くタケルの一人旅です。

## 本日の目玉商品『霜降り肉』

ダイ達と別れたオレは一人森の中を歩いていた。

神殿は森に覆われていたので先ずは森を抜ける必要があるのだ。

ダイが不死騎団を倒した事によって怪物も沈静化しており、オレは比較的に安全に旅を続ける事が出来ていた。

とりあえず森を出たらキメラの翼でロモスに戻ろう。

さつきは別れを惜しむあまりキメラの翼を使いそびれてしまったのだ。

以前の経験から森の中だと木の枝とかにぶつかって普通に痛い。

オレは森を抜けるために歩を早めた。

「閃光よ！」

破邪の剣を構えたダイが叫ぶ。

すると刀身から一筋の閃光が放たれ崩れた柱に穴を開ける。

「おお！」

破邪の剣の力にダイは感動を覚える。

ポップとマアムも感心した様に破邪の剣を見ている。

ダイは新しい玩具を貰った子供のようにはしゃいでいた。

タケルと別れた後、レオナ姫達の反応があるまで時間が出来た。

ダイ達はタケルに貰った武具の具合を確かめる事にしたのだ。

「雷光よ！」



ポップもいかずちの杖を天に掲げて叫ぶ。  
すると落雷が落ちて地面を抉った。

「すげえ…」

「これはオレの持つ真空の斧と同じ伝説の武具か」

クロコダインはダイ達の装備を眺めながら興味深そうに呟いた。

「これ程の貴重な武具を奴はどうやって手に入れたのだ？」

ヒュンケルが感じた疑問を口にした。

まさかその辺で購入した武器とその辺で採取した素材を錬金しただけ  
で手に入れているとは夢にも思わないだろう。

もしも魔王軍にその事が露見すれば間違いなく狙われるだろう。

「それは聞いてみないことには分からん

だが、これからの戦いにタケルの力は必要だ…」

「ああ、それに中々機転も利くようだしな」

「確かマグマからお前達を救い出したのだったな」

「ああ、道具の特性を正しく理解していないと、ああはイカンだろ  
う」

ヒュンケルはフレイザードの手によってマグマの海に飲み込まれた  
地底魔城を思い出していた。絶体絶命の危機。

それを救ったのは、まるでノーマークだった同行者の少年。

多彩な道具を操り自分たちの危機を救った。

もしもタケルが居なければヒュンケルがダイ達を救う為に犠牲になつただろう。

今となつては自分の命など惜しくはないだが…。

「楽には死ねんと言つ事が…」

ヒュンケルは自嘲気味な笑みを浮かべると溜息を漏らした。

「あ、あれは!?!」

「ヒュンケル…」

「ああ、どうやら来たようだな」

ダイ達が空に浮かぶ影を指さしているのを見て元・軍団長の二人は歩きだした。

空に浮かぶ気球を見つめながら。

現在オレはラインリバー大陸を旅している。

森を抜けて空に障害が無くなったのを確認したオレはキメラの翼を放り投げた。

キメラの翼が輝く。

瞬間、身体から重さが消えるような感覚。

景色が高速で流れ、俺はあっという間にロモスの町に立っていた。

俺は地図を確認した。

北はギルドメイン大陸。

ここからだとかール王国が近い。

勇者アバンの故郷か…。

物凄く気になる。

思い立ったら吉日、オレはロモスから出て北に向かうことにした。地図を見るかぎりイカダを使えば十分にギルドメインに渡れそうだが道中、何度か怪物に遭遇するが襲ってくる気配はなかった。おそらく獣王クロコダインが敗北したためだろう。統率する親玉がいない事が影響しているのだろうか。

「まあ 魔物に襲われないのは良いことだよな」

こつちから仕掛けない限り襲われる事は滅多に無い。偶に襲われるけど、今のオレのレベルだと楽勝できる。今までの戦いは無駄ではなかった事を実感できた。中級の攻撃呪文の一発でケリがつくのだから。それを見た魔物達が怯えて襲ってこなくなる。魔法って本当に便利だ。オレは道すがら両手にそれぞれ異なる魔法を構成しようと努力している。

そして遂に成功の兆しが見え始めていた。

「バギ…でもってギラ！」

「ぎゃああああー！！」

オレは右手からバギを放ち続けざまに左手でギラを放つ。熱線が真空の刃に乗せられて目の前の怪物を切り裂く。すごい切れ味だ。

オレはもう一度、バギとギラを生み出す。

「合体！」

両手を合わせて合体呪文…。

「ありゃ、失敗か…」

目の前で悶え苦しんでいる怪物を見ながらオレは溜息を付いた。成功すると炎の竜巻が出来る予定なんだが…。流石にいきなり合体魔法は無理か。

連続魔法の方も下級呪文しか成功しないし…。

「まあいいか、魔法の同時行使は出来るようになったし  
やっぱりレベルが上がったからかな」

まさかレベル関係してるとは思わなかった。

だったら、しっかりレベルさえ上げれば他の技術も？

夢が広がるな…。

でも命がけの戦闘は出来ればやりたくないかも…。

なんか楽にレベル上げの方法って無いかな…。

「…ん？」

いた。居たよ。あつたよ。

楽してレベル上げる方法が…。

まさかのご都合主義？

こんな時に遭遇するとは…！

これは神様がオレにレベルを上げると言ってるようなものだろ？  
草むらでゴソゴソと蠢く銀色の物体。

液体のようにドロドロとしている身体と泡立つブクブク。

「は、はぐれメタル…キタ（。）（。）…！！」

お、落ち着けオレ！

これはチャンスだ！

逃げられでもすれば折角のチャンスがニアだ。

いや、この付近にはぐれメタルが生息してる情報が得られたのは超

幸運、いや落ち着けオレ！とりあえずやることは一つ。

幸いはぐれメタルには気づかれていない。

オレは道具袋から毒針と魔物のエサ等々を取り出した。

チャンスは一度きりだ…。

オレは意を決して一番高価な『霜降り肉』をはぐれメタルの目の前

を狙って放り投げた。

さあ喰らうが良い！

続く？

本日のタケルのステータス

レベル19

さいだいHP：106

さいだいMP：561

ちから：52

すばやさ：130

たいりよく：53

かしこさ：281

うんのよさ：256

攻撃力：53

防御力：123

どうぐ

E：どくばり

E：ビロードマント

E：力の盾・改

E：幸せの帽子

E：スーパリング

E：星降る腕輪

呪文・特技

錬金釜 採取 大声 口笛

寝る 忍び足 穴掘り 大防御

連続魔法

ホイミ ベホイミ

キアリー キアリク シヤナク

メラ メラミ メラゾーマ

ギラ ベギラマ

イオ イオラ

ヒヤド ヒヤダルコ ヒヤダイン

バギ バギマ

ニフラム

フバーハ

ラナリオン

トラマナ レミートラ

インパス

本日の目玉商品『霜降り肉』（後書き）

DQやるならはぐれメタルでレベル上げ。  
誰も能通过る道ですね。

メタルスライムはスルーしました。  
はぐりん好きなので…。

今回ははぐれメタル狩りが始まります。

ところでフレイザードの禁呪法の結界って魔弾銃などの力も封じましたよね？

自分的にはタケルの道具には無効という設定にしようと思うのですがどうでしょうか？



本日の目玉商品『どくばじ』（前書き）

なんとか投稿出来ました。

## 本日の目玉商品『どくばり』

勝利の方程式というものが有るとすれば。

オレは間違いなくその方程式を使う。

そして勝利を掴み取る。

はぐれメタル攻略の方程式というものがある。

その方法は色々ある。

方法その1、パーティー全員で聖水を掛けて2ターン目に賭ける。

方法その2、DQ3仕様のドラゴラムの激しい炎で一掃。

方法その3、魔神斬りで一か八かに賭ける。

方法その4、毒針で急所狙い。

方法その5、500を超える攻撃力で実力で倒す。

オレの取るべき方法は四だ。

というかソレしか無い。

しかし1〜5の方法に共通する所が1つだけある。

それは全て運任せという事である。

そしてオレの運は256のカンスト！

イケる！絶対にイケる！

オレは霜降り肉を投げて毒針を握りしめた。

霜降り肉は弧を描いてはぐれメタルの目の前に落ちた。

ポトリ、という音にはぐれメタルが反応する。

ビクツとして逃げると思った。

だが、辺りの危険を確認もせず目の前のご馳走にかぶり付いた。

はぐれメタルは夢中になって霜降り肉を食べている。

今がチャ〜ンス！

オレは星降る腕輪の恩恵によって流星の如く超加速した。

「命取つたらああああ！！！」

はぐれメタルがコチラに気づいたがもう遅い。  
オレの毒針は既にはぐれメタルの身体に突き刺さっていた。  
そして

「ギラ！」

次の瞬間、はぐれメタルの閃熱呪文ギラが俺を襲った。

「うわっちいつ！こなくそっ！」

俺は熱さに耐えながら再びはぐれメタルの身体に毒針を突き立てる。  
ついでに怒りを込めてグリグリしてやる。

「ピッ、ピギイツ！？」

「あ、急所直撃だ ラッキー！」

毒針が急所に直撃したことによってはぐれメタルは息絶える。  
オレは動かなくなったのはぐれメタルを見下ろしながら頭の中で響く  
レベルアップのファンファーレを聞いていた。

「さてと、暫くこの辺でレベル上げでも……」

オレは次なる獲物はぐれメタルを求めて歩きだす。

しかし後ろからの小さな音に足を止めた。  
何かを引きずる音だ。

振り返るとはぐれメタルがヨロヨロと起き上がり……。

「仲間になりたそうにコチラを見ている」

はぐれメタルはつぶらな瞳でコチラを見上げている。  
か、可愛いじゃいか…。

「一緒に来るか？」

ブンブンブン！

ものすごい勢いで何度も頷いてるよ。

「肉、食うか？」

ブンブンブン！

オレが霜降り肉を出すと更に激しく頷く。

「よし、今日からお前は はぐりん だ」

オレはそう言つて霜降り肉を差し出した。

愛どころか悪意を持つて戦つたのに仲間になるとは…。

もしかして肉に釣られたのか？

ものすごい勢いで肉を食べるはぐりん。

まあ、何はともあれ心強い味方が出来て良かったのか？

しかしオレはこれからコイツの同族を狩りまくる予定だ。

大丈夫かな？

考えている内にはぐりんは食事を終えてオレを見ている。

「もしかしてもっと欲しいのか？」

ブンブンブン！

すごい勢いで頷くはぐりん。  
よし、肉で釣るか。

「はぐりん、はぐれメタルの巢の場所を教えてもらってもいいか？」  
肉を沢山やるぞ？

オレは最高級の霜降り肉を沢山出して見せてやった。  
はぐりんはヨダレをダラダラと垂れ流す。  
そしてビシツと姿勢を正すと背を向けて移動を始める。  
そして振り返る。

「ついて来いってことか」

それにしてもコイツ、自分の欲望に素直だな。  
肉につられて仲間を売るとは…。  
オレははぐりんの後を付いて行った。

一方その頃。

ダイ達は気球に乗ってホルキア大陸の北に位置するバルジ島の塔へと目指していた。迎えに来たのは三賢者の一人エイミ。  
魔王軍の軍団長の存在に一悶着はあったもの、一行はレオナ姫の待つ塔へと向かう事に。

但し気球の大きさから全員を乗せるのは不可能。  
ヒュンケルとクロコダインは別行動を取る事になった。  
魔王軍を離れる事になったとはいえ、ヒュンケル自身、部下のことが気になるようだ。

一度、地底魔城の様子を見ておきたいとの事。

クロコダインもそれに付き合う様だ。  
ダイ達に乗せた気球は真っ直ぐバルジの塔へと進む。

「はなせ！この野郎！」

「うるさいっ！」

バルジの塔から怒鳴り声が響く。

そこではパプニカの兵士たちが掴み合いの喧嘩をしていた。

「何事だ！」

騒ぎを聞きつけた三賢者のアポロとマリンが仲裁に入った。

「ああ、こいつら食料の事で喧嘩を！」

バルジの大渦に囲まれたこの島は唯でさえ食料の入手が困難だ。

しかも現在は魔王軍から身を隠している。

食料は既に以って後数日分も無いだろう。

警戒に当たっている兵士たちの気が立っていても可笑しくはない。

「さあ、その手をどける！」

「お前こそ！」

アポロとマリンが懸命に止めようとするが、空腹で気が立っている兵士たちは聞き分けない。それどころかますますヒートアップする。その時だった。

割り込んできた白い手が食料を叩き落とした。  
食料は地面に落ちてしまう。

「な、何しやがる!」

「あ、ああ…ひ、姫さまっ!」

食料をたたき落としたのはレオナ姫だった。

「何をなさるのですか! 貴重な食料を!」

兵士の一人がレオナ姫を非難する。

だがレオナは態度を崩さずに毅然と言い放った。

「いくら大事なもので争いの種になるならいらないわ」

兵士たちに衝撃が走る。

まさしくその通りだった。

現在、我等がこうしているのは魔王軍を退けるためだ。

それなのに自分たちが欲望のままに他者を傷つけていては魔王軍と変わらないのだ。

「魔物と同じ道を歩むくらいなら…」

人間として、飢えて死にましよう…っ!」

レオナの一括によって兵士たちは冷静さを取り戻した。

皆が落ち着いたところでレオナ姫は希望であるダイの事を話して聞かせた。

「背が低いのが難点だけど、それなりに勇者してるはずよ

「けっこう頼りになるんだから…」

「希望の救世主にしては酷い言われようだな」

「ははは！」

「それに彼から買った武器も…」

「あの時の少年…」

「確か巷では『幻の商人』と呼ばれているとか…」

「その筋では有名人の様ですね」

「ええ、後で知ったことだけだね…」

「知っていれば是が非でもパプニカに引き止めていたわ」

「私も幻の商人の武器を使ってみたいものです…」

「そうね、この難局を乗り切ったら…」

「探しだして扱き使ってやりましょうか？」

「ははは！」

「暗い雰囲気から一転、兵士たちに明るさが戻った。」

「悪いな、その期待は空振りだ！」

「そこに水を刺すように低い声が割り込んできた。」

「視線を移すとそこには炎と氷の怪人が立っていた。」



氷炎將軍フレイザードである。

「残念だったな勇者じゃなくてよ！」

ククク…クカカカカカ…

クカカカカカー…ッ！！！！」

フレイザードの左右の手から炎と吹雪が放たれた。

炎と吹雪、ベギラマとヒヤダルコの呪文だ。

近くにいた兵士たちは攻撃呪文に飲み込まれ息絶える。

「さあ死んでもらうぜ！」

今日でパプニカ王国はお家断絶だあつ！！！！」

「おおおお~~~~~っ！！！」

一方その頃の幻の商人は…。

「す、すげえ…」

はぐれメタル  
経験値が一杯だ〜っ！！」

目の前で蠢いているはぐれメタルの大群に目を輝かせていた。はぐリンに案内されて来たのは植物の無い砂地だった。

周囲は岩に囲まれており、身を隠すにはうつつつけの場所だ。そこははぐれメタルの群れの隠れ家だった。

「ひいふうみい…」

すごい、ざっと見て20匹はいる…

あれだけ全部倒せばあっという間に…」

いや、流石にそれは無理だな。

いくら何でも都合よく全部倒せる筈がない…。

「はぐりん、コイツを…」

オレは毒針をもう一つ取り出すとはぐりに手渡した。  
オレの意図を組んではぐりんが毒針を装備する。  
狙うは一番手前の獲物だ。

「行くぞ はぐりん…」

はぐりんが頷いたのを確認してオレは駆け出した。

「死ねえっ!!」

「ピッ!？」

オレの毒針がはぐれメタルの身体を捉えた。  
よし、続けてはぐりんの番だ。さあ突き立てろ!

「…………あれ?はぐりん?」

何故か攻撃しないはぐりん…。  
後ろを見ると…。

ダダダダダ~~~~ツ!!  
はぐりんは逃げ出した!

「っておい!逃げるのかよ!

あ、あわわ、こいつらも、ちょ、ちょっと待て！」

ゲームと現実が違う。

仲間になったはぐりんも矢張りはぐれメタル。

オレの命令を無視して一目散に逃げ出してしまった。

しかも折角のはぐれメタルの群れも全て逃げ出してしまふ始末。

「はぐりん……」

逃げ出したものの、岩陰からこっそりとコチラを伺っているはぐりん。

オレは嘸かし恨めしそうにはぐりんを見ていたことだろう。

だが逃げたまま行方を眩ませなかった事にも、また安堵したのだ。

オレは笑顔を作るとはぐりんを呼んだ。

「もう怒ってないよ、おいで はぐりん」

はぐりんがやって来たのでオレは骨付き肉を差し出した。

嬉しそうに肉に食らいつくはぐりん。

「なあ はぐりん……」

頼むから一緒に戦ってくれよ

お前と一緒に毒針で攻撃してくれるだけで随分違うんだ」

はぐりんは無い首を傾げる仕草をする。

「よし、はぐりん君、

はぐれメタル、一匹倒す事に霜降り肉追加でどうかね？」

ブンブンブン！

物凄い勢いで頷くはぐりん…。

こいつ、どんだけ肉が好きなんだよ。

さっきのはぐれメタルの群れ全てに逃げられたのは痛かったが、はぐれメタル狩りには良くある事なのだ。

一度や二度の失敗は想定済みだ。

オレは気を取り直してはぐりに次なる狩場を案内させる事にした。

「…その前に火竜<sup>ドラゴラム</sup>変化呪文の呪文書を探すか？

カール王国なら有るかもしれないし…。」

より確実にはぐれメタルを倒して経験値を稼ぐなら手札は多いほうが良い。

オレは一旦、はぐれメタル狩りを止めてカールに向かう事にした。

続く？

本日のタケルのステータス

レベル23

さいだいHP：143

さいだいMP：585

ちから：60

すばやさ：150

たいりよく：72

かしこさ：290

うんのよさ：256

攻撃力：61

防御力：133

どうぐ

E：どくばり

E：ビロードマント

E：力の盾・改

E：幸せの帽子

E：スーパリング

E：星降る腕輪

呪文・特技

錬金釜 採取 大声 口笛  
寝る 忍び足 穴掘り 大防御  
連続魔法

ホイミ ベホイミ

キアリー キアリク シャナク

メラ メラミ メラゾーマ

ギラ ベギラマ

イオ イオラ

ヒヤド ヒヤダルコ ヒヤダイン

バギ バギマ

ニフラム

フバーハ

ラナリオソ

トラマナ レミートラ

インパス

本日の目玉商品『どくばり』（後書き）

ドラゴラムはDQ3仕様になります。

ドラゴラムの激しい炎ははぐれメタル攻略に最適。

タケルが習得できるかどうかは別として…。

そう簡単に習得できるなら世話無いですからね〜

本日の目玉商品『竜のつるこ』（前書き）

更新が遅れて申し訳ないです。

今回は久しぶりにロンさんが出てきます。



本日の目玉商品『竜のつるし』

はぐりん

職業：はぐれメタル  
2：ひとりぼっち

LV1

さいだいHP：8  
さいだいMP：30

ちから：60  
すばやさ：1001  
たいりよく：5  
かしこさ：15  
うんのよさ：82

どうぐ

E：どくばり

攻撃力：61  
防御力：500

特技

ギラ

アストロン

「うーむ…」

オレは はぐりん のステータスを見ながら一人唸っていた。

微妙だ…。

強くないが弱くもない。

はぐれメタルらしく防御特化型だ。

しかし体力が余りにも残念すぎる…。

ついさつき気がついたがオレはどうやら はぐりん の強さが分かるらしい。どの程度のステータスか気になって はぐりん を眺めていたらこうなった。

頭にステータスが浮かんだのだ。

しかし素早さ1001って…。

カンストどころじゃないだろ？

オレ、良く倒せたよな…。

仲間になって間違いなく素早さをステ修正されたな…。

現在オレは旅のお供に はぐりん を引き連れてカール王国を目指していた。はぐれメタル狩りは取り敢えず後回しだ。

確実に はぐれメタルを短時間で狩るには今の戦力だと無理だ。急がば回れだ。

初めの はぐれメタルは運良く倒せたが、次も首尾よく事が運ぶ保証はない。

実際、10回戦って10回逃げられても珍しくないのだ。

このまま狩りも続けても時間の無駄に終わる可能性が高い。

ならば、より確実に はぐれメタルを仕留める方法を得る方が良いと思ったのだ。

どっちにしてもオレはカール王国に行く予定だったのだ。  
あの国には有名な図書館がある。

古今東西、様々な呪文書も集まっている筈だ。

あの有名な『アバンの書』もあるという…。

そう簡単に閲覧できるとは思えないが、善は急げだ。

「いくぞ、はぐりん！」

はぐりん は勢い良く頷くとオレの肩に飛び乗った。

こいつ、体力ないからな…。

オレはカールを指指して全力で走りだした。

一方その頃、ダイ達は遂にレオナ姫の待つバルジ塔に到着した。

塔の屋上からは黒い煙が上がっており、不吉を感じる。

到着してみるとフレイザードはレオナ姫と戦っていた。

先ずはアポロがフバー八の呪文で耐え凌いでいたのだが、フレイザ

ードの禁術である『五指爆炎弾』を撃ち放った。

一度に五発ものメラゾーマを放つ絶技だ。

フバー八の結界も易々と破られようとしたその時。

「大賢者の杖よ！光壁を！」

フレイザードの攻撃をレオナ姫は大賢者の杖の力で防ぐ。

杖からフバー八と同様に光の防御膜が展開、五指爆炎弾を防ぎきる。

「す、すごい…私のフバー八以上だ…っ！」

賢者アポロは賢者の杖の力を目の当たりにして驚愕する。

「アポロ、火炎系呪文と氷系呪文を使つてはダメよ！  
真空系か爆裂系の呪文に切り替えて！

弱点をつくんじゃないやなくて確実にダメージを与えるの！」

「わ、分かりました！」

「皆はアポロの援護を！」

「はっ！」

兵士たちは盾を構えて防御姿勢を取る。

レオナ姫とアポロを守るようにフレイザードに立ちふさがる。

「皆、まずは生き残ることを考えて！」

エイミが必ず助けを連れてきてくれるわ！

それまで頑張つて！」

「…ちっ！厄介な姫さんだぜ…」

フレイザードは忌々しそうに呟く。

そして希望は到着した。

「レオナーツ！！！」

ダイは気球から塔に飛び降りた。

それと同時にパプニカのナイフをフレイザードに投げつける。

「う、うぐっ！」

ナイフはフレイザードの肩に突き刺さり、後退させる。

「ダイ君!？」

「良かった!間に合った!」

「て、てめえ…生きてやがったのかっ!？」

ダイの登場にフレイザードは目を向いて驚いた。

どうやってマグマの海から生還したのか…。

しかし現にこうして目の前にいる。

敵である勇者が。

「レオナから離れる!」

「小賢しいわ!」

目の前の小僧がどうやって生き残ったのか疑問だ。

だが今は戦闘に集中するべきだ。

フレイザードは氷の腕から刃を生み出してダイに投げつけた。

対してダイは掌に火炎呪文を生み出してそれを相殺する。

そしてフレイザードに睨みつけて言い放った。

「レオナに手を出せば、唯じゃ済ませないからな…!」

「このガキが…!」

フレイザードは肩に刺さったナイフを引き抜きながらダイを睨みつけた。

「タダじゃ済まさないだろ…っ!?」

舐めやがって…

このオレに手を出せるものならやってみろ!」

フレイザードの炎の腕がダイを襲う。

ダイは最小限、紙一重で躲すと隙かさず剣を振り下ろす。

破邪の剣の刀身がフレイザードの半身に食い込む。

「ぐうっ…、おのれ…

…シャアアア…っ!!」

フレイザードはダイを逃すまいと剣を掴み、凍える吹雪を吐き出した。

ダイは刺さった剣を支点に身体を後ろに反転させる。

フレイザードの頭部を蹴りながら剣を引きぬいて後ろに飛んだ。

その一連の行動は約2〜3秒程度。

凄まじい早技だった。

フレイザードもダイのスピードに驚愕の顔を浮かべた。

「フレイザード、覚悟しろ!!」

「な、生意気抜かしてんじゃねえ!!」

フレイザードはマヒヤドの呪文を唱えた。

氷の手から凄まじい猛吹雪が放たれた。

「ギャハハハ…ッ!!!!」

凍れ、凍れえっ!!!!」

「ダイ君…っ!!」

為す術もなく凍り付いていくダイをフレイザードは愉快気に笑う。  
だが…。

「…っ!？」

だがその笑いも続かなかった。

ダイの剣から炎が燃え盛ったのだ。

メラメラと燃え盛る炎はダイを覆っていた氷を溶かしていく。

「ゲエツ!？な、なんだその剣は？」

アツという間に氷の束縛から解放されたダイは高らかに叫んだ。

「魔法剣っ!!」

「何だとっ!」

「くらえっ!!」

ダイは高く跳躍すると勢い良く剣を振り下ろした。

アバン流刀殺法『大地斬』と火炎呪文メラの複合技。

「火炎大地斬!!」

「うおっ!」

とっさに腕を犠牲にすることで直撃を避けるフレイザード。

だが切られた氷の腕は更に燃え盛り、その身体を溶かしていく。このままでは半身を失ってしまう。

「ち、ちくしょうめ!!」

フレイザードは燃え盛る自分の腕を叩き落とした。

レオナ姫はダイの登場と、その逞しく成長した姿に感動を覚えていた。

思わず涙ぐんでしまうほどに。

しかし感涙してる場合じゃない。

今の自分なら充分にダイの援護が出来るはずだ。

レオナ姫は大賢者の杖を握り締めるとダイへと駆け寄った。

「ダイ君!」

「レオナ!大丈夫!?ひどい事されてない!?!」

「私は大丈夫よ…皆が守ってくれたから」

レオナは倒れた兵士たちを見る。

既に事切れた者、重症を負って動けない者…。

アポロはまだ生きている者に付いている。

レオナは悔しそうに歯噛みした。

「ダイーッ!」

気球を屋上に取り付けたメンバーがぞろぞろと降りてくる。



「マアム、エイミさん！怪我してる人たちを！」

皆はダイの声に従って倒れている者たちに駆け寄った。

「この野郎だったのか…」

フレイザードの姿を見たポップはたじろいた。

しかし腕を失って膝を付いている様に顔を綻ばせた。

「でもちよつと優勢って感じだよな」

「まだ油断しちゃ駄目だ！」

ダイはチラリと後ろのレオナを見た。

ヒュンケルを殺しに来た時のコイツの残忍な顔が浮かぶ。

コイツは危険だ。ここで止めを刺す。

「フレイザード、これ以上レオナに手は出させない！」

ダイは破邪の剣を構えてフレイザードににじり寄る。

「くっ…ククク…」

グワ…ハッハッハッハッ！！」

「何が可笑しい！？」

「いいとも！」

今更こんな小娘に興味はねえよ！」

フレイザードは狂喜の表情で振り返った。

「テメエの方が遙かに大きな獲物って事が分かったからな！」

「えっ！？」

「むうんっ！！」

フレイザードは腕に力を込めた。

すると失った氷の腕がメキメキと音を立てて再生する。

「その首、俺がもらっぜ！」

クオオオオオ！！！！

フレイザードは体全体を震わせて腰を落とした。

ダイは確かに見た。

フレイザードの身体を覆うように構成されている岩石が動くのを。危険を感じて叫ぶ。

「みんな伏せろ！」

「氷炎爆花散！！」

フレイザードの身体が弾けた。

氷の弾丸と溶岩が四方八方に飛び散り辺りの者を襲う。

ダイはレオナを庇うように魔法の盾を全面に出し防御姿勢を取る。ポップとマームはみかわしの服の力で難を逃れている。

しかし全ては無理のようで躲しきれない物は魔法の盾で防ぐ。頭部を守り膝を付いて足を踏ん張る。

その時、塔の頂上が輝いた。まるで灯台のように。

アバンの使徒、レオナ姫は殆どダメージが見られず立ち上がる。だが他の者達は激しいダメージを受けて直ぐには起き上がれない。

「くそっ！」

ポップは直ぐにタケルから貰った回復道具を取り出した。月のめぐみとアモールの水だ。

「マアム、手伝ってくれ！」

「ええ！」

ポップから道具を受け取ったマアムは怪我人に駆け寄った。

「く、まだまだ！」

ダイは皆を守るためにフレイザードに立ち塞がる。何時の間にか元の体に戻ったフレイザードは指を左右に振って言った。

「チツチツチツ…」

「お前はもう負けたよ…！」

「なに!?!」

「今の技はな攻撃と同時に俺の部下達への合図でもあったのさ。地獄のバトルを始めるためのな…っ！」

フレイザードは得意げに勝利宣言。

そして…。

ゴゴゴゴゴ…ッ

地響きがバジル島全体を揺るがした。

そして塔を挟むように二つに柱が地面から生えてくる。

炎の柱と氷の柱。

「さあ楽しいショーの始まりだ…」

炎と氷の柱の先が光を放つ。

光は塔を囲むように円を展開する。

そしてバルジ島は光りに包まれた。

「もうすぐギルドメインか…」

その頃タケルはラインリバー大陸の最北端の岬にいた。

海に向こう、水平線をじつと見る。

微かに大陸が見える。

肉眼で確認できる程に離れていないのだ。

これなら充分に渡ることができらるだろう。

足下にはイカダが置かれている。

即席で作ったにしては良い出来だ。

「いくぞ はぐりん」

はぐりんは静かに頷くとオレはイカダを海に浮かべて乗り込んだ。  
はぐりんも続く。

オレは空かさず聖水を振りかけた。

こんな不安定なイカダの上で海の魔物に襲われたくはないからだ。

「いくぞギルドメイン！」

オレはギルドメインに向かって船を漕ぎ始めた。

ギルドメイン大陸西方。

リングアアの南方に位置するギルドメイン山脈では地響きが絶え間なく続いていた。

「グオオオオオツ！！」

大地を揺るがす咆哮と地響き。

何頭もの巨大な竜ドラゴンの断末魔が響く。

凄まじい速さで動く影は次々とドラゴンの首を叩き落としていく。

ここは超竜軍団のテリトリーだ。

リングアア攻略の際、拠点としていた場所である。

国を滅ぼした後もそれは続いていた。

そして今日、超竜軍団は何者かの襲撃を受けていた。

ドラゴンも最強の魔物だ。

黙ってやられる訳ではない。

尾を振り回し、炎の息吹を吐いて対抗するが襲撃者を捉える事は叶わなかった。それどころか手痛い反撃を受ける始末。

攻撃した竜は襲撃者の反撃によって為す術もなく絶命する。

もしも軍団長がいれば結果は違っただろう。

だがバランは魔軍司令ハドラーの招集を受けて現在は鬼岩城だ。頭の居ない竜の群れは次々と狩られていった。それはまさに一方的な虐殺だった。戦いが始まって約10分程、百頭近くいた竜の群れは全て地に伏していた。

「…ふう」

襲撃者は動きを止めて溜息を付いた。

二振りの双剣を腰の鞘に収めて空を仰いだ。

陽光によって素顔が晒される。

魔剣鍛冶師ロン・ベルク。

究極の剣完成の折、ランカークスの森を旅立った男は自慢の剣の力を試す為の旅を続けていたのだ。

鉄以上の強度を誇る鱗を持つドラゴンはまさにうつつつけの相手。あわよくば超竜軍団の団長である竜の騎士に会えるかもしれない。

ロン・ベルクの行動は早かった。

ベンガーナの地を侵略している超竜軍団に文字通り喧嘩を売ったのだ。

「…ちっ！この程度か…」

やはり竜の騎士が居なければ話しにならんか…

こいつらを狩っていれば現れると思っただがな…

ここは下手に動くよりもこの国で待っていた方が良いか…」

ロン・ベルクは物足りなさそうに竜の死骸を見た。

「いや、コイツらの鱗は使えそうだ。

タケルのやつは土産にもなるだろう…」

ロン・ベルクは地図を取り出して見る。

「南はテランか…」

あの湖の水は質が良い…

鍛冶場に見える場所もあるだろう…

真・星皇剣の手入れもやっておきたいしな」

目的地は決まった。

ロン・ベルクは手馴れた手付きで鱗を剥がす。

ある程度の量、回収したところで立ち上がった。

「待っているよ竜の騎士…」

ロン・ベルクはテランを目指して歩き出した。

続く？

ロン・ベルク

職業：魔剣鍛冶師

LV67

さいだいHP：501

さいだいMP：0

ちから：220

すばやさ：232

たいりょく：252

かしこさ：100

うんのよさ：99

攻撃力：380

防御力：203

道具

E：真・星皇剣

E：闇の衣

特技

気合ため 疾風突き はやぶさ斬り

みなごろし 魔神斬り



足払い 回し蹴り かまいたち

みかわしきやく

真空斬り 受け流し さみだれ斬り

ドラゴン斬り メタル斬り 真・星皇十字剣

めいそう 大防御

本日の目玉商品『竜のつるこ』（後書き）

ロンさん無双の巻でした。

ロンさんのステを想像して見ました。

実際の強さとはあんまり関係ないです。

ダイ大世界は数値は飾りですから…。

闘気で軽く限界突破する世界ですしね…。

はぐりんの身の守り500にしたかったので素早さカンスト突破させました。

後悔はしてません。

いくら早くても立ち向かう勇気が無いですから…。

**本日の目玉商品『最後の鍵』(前書き)**

遂にタケルが立ち上がります？

## 本日の目玉商品『最後の鍵』

イカダに揺られて約1時間。

ラインリバー大陸から出たオレは漸くギルドメインに到着した。砂浜に降り立つ。

目の前には森が広がっている。

地図によればカールとテランのちょうど真ん中辺りだ。

ここはもうミストバーンの勢力下だ。

だが現在、六団長は魔軍司令ハドラーの招集を受けていた筈だ。

しかも現在は勇者ダイを始めとするアバンの使徒に注目していて、オレの様なモブキャラは間違いないくノーマーク。

勇者討伐に躍起になっている今、世界征服は停滞中といっても良い。事を済ませるなら今しかないのだ。

オレは迷わずカール王国への道を進む。

現在ダイ達はフレイザードと交戦中の筈だ。

レオナ姫が凍りづけにされるかはまだ分からない。

だがダイ達もレオナ姫のかんりの武器を装備している筈。

しかも回復アイテムも多く持たせている。

死ぬ事は無いだろう。

どうにも心に凝りを感じる。

『このままで良いのかと…』

オレはラインリバー大陸を見た。

「気張れよ、ダイ達…」

海の方こうで戦っているであろう勇者達。

オレは彼らに心からのエールを送った。

バルジ塔を挟むように現れた炎と氷の柱。

『氷炎結界呪法』

フレイザードが此度の戦いに用いた最悪の禁呪法。

敵の技能を封じ込め、尚且つ力を激減させる卑劣な術だ。

ダイ達はこの禁呪法の前に苦戦を強いられていた。

ポップの魔法、マアムの魔弾銃は封じられパーティーとしての強さは機能しなくなってしまった。

ダイの攻撃力も大幅に下がり、フレイザードには通用しなくなってしまった。

攻撃を仕掛けたダイの剣はフレイザードに受け止められ反撃を受けてしまう。

「どうしたんだ!？」

フレイザードのやつ、急に強くなったぞ!」

「ククク…違うなあ

オレが強くなったわけじゃない…

お前等が弱くなったんだよっ!」

「なにっ!?!」

フレイザードは外に見える柱を指さしていった。

「あの『炎魔塔』と『氷魔塔』が!

オレの体内の核に作用してこの島に強力な結界を張ってるのさ!

この結界陣の中においては！  
オレ以外のやつは力も呪文も全て封じられてしまっただ」

絶望的な死の宣告。

これまで培ってきた力が使えない。

このままでは戦いの先に待っている結果は敗北しか無い。

「汚いぞフレイザード…」

正々堂々と戦えないのか…」

「うるせえな…」

オレは戦うのが好きなんじゃねえ…

勝つのが好きなんだよ！」

フレイザードはダイ達に襲いかかった。

ダイ達は防御の体制でフレイザードを迎え撃つ。

ダイは魔法の盾でフレイザードの猛攻を受け止める。

ポップとマームはフレイザードの攻撃を掻い潜る。

「くっそ！」

「どうすんだよ！このままだと殺られちまっぜ！」

ポップはフレイザードの攻撃をどうにか躲しながら叫ぶ。

「どうにかして活路を見つけないと！」

「そんなもん、有るわけねえだろ！」

フレイザードはポップに襲いかかる。

「あわわ、ら、『雷光』!!!」

「な、なにに!?」

咄嗟のことだった。

ポップはいかづちの杖の力を解放するキーワードを叫んでいた。むしろこれ以外、ポップの攻撃手段は残されていなかった。

ママムの魔弾銃の様に発動しないかもしれない。

しかし、そこまで考えている余裕もないのだ。

だがポップの行動は大当たりだった。

いかつちの杖から金色の光が放たれた。

それは蛇行しながらバチバチと音を立ててフレイザードを襲う。

「うぎゃあああつ!!!」

ライティン  
電撃呪文と同等の威力の雷撃の直撃。

フレイザードは堪らず膝をついた。

「や、やった…」

「そうか！タケルから貰った装備…」

「これならまだ…」

「よし、『閃光』！」

ダイは破邪の剣の鋒をフレイザードに向けて叫ぶ。  
狙うは当然、氷の半身。

膝を付いて体制を崩しているフレイザードは躲しきれない。

「ぐうぐうっ…くそったれっ！」

光線に腕を焼かれながらフレイザードは忌々しそうにダイを睨みつける。

「ダイ君、ここは一度退きましよう…」

「レオナ!？」

戦いを冷静に見守っていたレオナが静かに言った。

「いくら武具が強力でも

それだけで勝てるほど軍団長は甘く無いわ…

それに見て…」

レオナは塔の外を指さした。

「あれは…」

外を見るとフレイザードの配下の怪物達がワラワラと周囲に集まってきた。

「この結界の中じゃ私達に勝ち目はないわ

それに傷ついた者たちを守りながらじゃ…」

「そうね…悔しいけど姫さまの言う通りだわ」

ママムのレオナ姫の意見に賛成する。



ダイは周りの傷ついた者達を見た。  
エイミはマリんにホイミを掛けているがまるで効果は見られない。  
アポロも重症の兵士を治療しているが同じく効果が見られない。  
このままでは皆死んでしまう。  
ダイは悔しそうにフレイザードを睨みつける。

「さあ急いで怪我人を気球へ！」

「わ、わかった！」

ポップとマアムは怪我人に駆け寄って肩を貸す。

「ちっ！逃すかよ！」

フレイザードは再び腕を再生すると立ち上がった。  
逃がさないようにするにはと当たりを見る。  
そして必死で姉に三賢者の姉妹に目を付けた。  
エイミはマリンの治療で直ぐに動けそうにない。  
それにフレイザードの目の前に居るのだ。  
利用しない手はない。  
フレイザードは素早く姉妹の前に駆け寄った。

「あ、ああ……」

「エイミ、マリン！」

アポロが走るが間に合わない。

「ね、姉さん！」

咄嗟にエイミはマリンを庇うように前に立った。

「エ、エイミ…っ！」

焼け爛れた顔を押しさえながらマリンは悲痛な声を上げた。

エイミはフレイザードに捉えられてしまったのだ。

「あ、あああ…」

そして凍り付いていく。

意識のある状態で身体が凍り付いていく恐怖。

エイミは顔を歪ませながら、ただ身体を震わせていた。同時にアポロがマリンを助けだす。

「ちっ！出来れば姫さんのほうが良かったんだがな…

どうだい？それでも逃げられるのか？

ええ！？お姫様よ！

大事な部下が凍り漬けたぜ！」

「くっ」

「いけません、姫様！」

「わかってるわ…」

ダバツク、アポロとマリンを回収後、気球を発進させて」

「わ、わかりました」

「させるか！」

「くっ！」

気球の縄梯子に掴まっている状態のマリン達の背中にフレイザードが襲いかかる。

フレイザードの指から閃熱呪文の炎が生み出される。

マームは咄嗟に魔弾銃の弾筒を、フレイザードの指目掛けて投げつけた。

「な、なにいつ!?!」

フレイザードの指が弾筒を突き破った瞬間、大爆発が起こった。

「うぎゃあああああっ!!!!」

フレイザードは大爆発に飲み込まれて悲鳴を上げた。

「今よ！」

アポロとマリンは爆風に煽られながらも必死で縄梯子にしがみつく。そして幸か不幸か気球は爆風の衝撃波によって空高く舞い上がった。

「ぐぐぐぐぐ」

フレイザードは失った半身を押さえながらも散らばった魔弾の破片に目を向けた。

「そうか…」

あの中には閃熱呪文が…

それがオレの呪文に誘爆して…」

忌々しそつに離れていく気球を見上げた。

「あの女、可愛い顔してやりやがる……」

気球はどンドンバルジの塔から離れていく。

このままだと程なくして逃げられてしまうだろう。

しかしそつは問屋が卸さない。

フレイザードは炎魔塔のフレイム達に向かって叫んだ。

「フレイム軍団っ！そいつらを逃がすなっ！！」

「くっ！エイミ……」

気球の上でアポロは悔しそつに塔を見下ろす。

ダイ、マアム、ポップも同様に歯噛みしている。

マアムは申し訳なさそつに呟いた。

「ごめんなさい……わたしが……」

「いいえ、あなたの機転がなければ私達は殺られていたわ」

「そうだぜ、マアム」

レオナとポップがマアムのフォローを入れる。

「それにエイミは死んだわけではないわ」

次に奪い返せばいいのよ」

「そつですね…」

「うづう…エ、エイミ…」

「あ、あああ、あれはっ!?!」

パプニカの兵士が下を指差して叫んだ。

視線を移すと、炎の怪物フレイムの群れが気球に向かって飛んでき  
ていた。

感情の感じさせない表情と共に身体を揺らめかせながら襲いかかっ  
てくる。

「じいさん、飛ばせ！全速力だ！」

「ヒヤダイン!!」

アポロが氷系呪文でフレイムを攻撃する。

どうやら既に結界の外、呪文は使えるようだ。

レオナ、アポロ、ポップはそれぞれ氷系呪文でフレイム達に応戦す  
る。

しかし数が多すぎた。

フレイム達は直に気球を攻撃して落とそうとする。

攻撃を受けて気球は次第に高度を下げていく。

真下はバルジの大渦。

このままだと大渦に飲み込まれて全滅してしまうだろう。

「っ、このままだと…っ!?!」

「っ、墜落…」

その時だった。  
気球を一筋の閃光が飲み込んだ。

「グワアアアアアアツ!!!」

フレイム達は閃光によって消滅していく。

凄まじい魔法力の奔流。

それはダイ達を傷つけること無く敵だけを消滅させた。

閃光の出元は気球の上からハッキリと見えた。

海岸に見える洞窟、そこから光が放たれていたのだ。

フレイム達の攻撃から逃れた気球は、徐々に高度を落としながらバルジの大渦を超えて陸地の近くの浅瀬へと落ちた。

「ぶはっ！」

「あそこだ！」

あそこから閃光が出てオレたちを助けてくれたんだ！」

「行ってみましょう！」

一行は傷ついた者たちを連れて洞窟の入口までやって来た。

中に橋を踏み入れようとした時、奥の方から低い男の声が響いた。

「なんだ、先刻の連中か…」

無事助かったならさっさと帰れ…

オレは誰とも関わりたくないんでね…」

明らかな拒絶の声。

マアムはその声に憶えがあるのか、はっとする。

「あなたは…」

「んん…っ!？」

男の方もマアムの声に反応して振り返った。

宝玉の付いた縦長い帽子をかぶった老人。

魚を啜えた表情は、何とというか間が抜けていた。

マアムは顔を綻ばせて叫んだ。

「…マトリフおじさん！」

大魔道士マトリフ。

かつて勇者アバンと共に世界を救った英雄がそこにいた。

「漸く着いた…」

オレは目的地であるカール王国に到着した。

美しかった街並みは見ると影もなく。

人の気配も感じられない。

魔王軍の進行による爪痕。

建物は破壊され、鎧を着たガイコツが散らばっている。

おそらくこの国の兵士だろう。

オレは心を込めて胸の前で十字を切って祈った。

「…アーメン」

酷いことをする…。

オレは辺りを警戒しながら忍び足で街を歩く。  
目指すはカールの図書館。

しかし期待はずれだった。

カールの図書館は怪物の攻撃によって半壊していた。  
この様子だと貴重な本は奪われるか燃やされているか…。  
オレは図書館の内部に侵入した。

扉を開くだけで建物全体が揺れた気がした。

気をつけて進まない図書館が崩れて生き埋めになりかねない。  
オレはまだ無事な本棚を一つ一つ調べていく。

「…あつた！魔導書だ！」

図書館の最奥、貸出禁止の禁書を保管している部屋だ。

鍵が壊れていて中に入る事が出来た。

更に奥の方に宝箱が置いてある。

持ち出し厳禁の札が掛けられている。

「…これはもしかして『アバンの書』か…？」

宝箱には鍵が掛かっており開けることが出来ない。

盗賊の鍵を試してみたが無理だった。

「アバカムが使えたらな…」

「…いや待てよ もしかしたらイケるかも…」

オレは昔手に入れた物を取り出した。

鍊金釜を取り出す。



先ずは盗賊の鍵を入れる。  
次に『魔力の土』を入れる。  
そして最後に先ほど取り出した『マネマネ銀』を入れる。

「巧く行けば…出来た！」

出てきたのは金色の鍵。

オレは早速、宝箱の鍵穴に鍵を近づけてみた。  
すると鍵の先がウネウネと動き、鍵穴にピッタリとハマる。

「おお！巧く言っただけだ！」

まさかこうも上手くいくとは思わなかった。

『最後の鍵』によつてオレは宝箱を開けた。  
中を覗いてみると古ぼけた一冊の本が入っていた。  
どうやらビンゴだったみたいだ。  
表紙の紋章に見覚えがある。

「アバンの書だ…」

オレはアバンの書の頁を捲ってみた。  
まずは武術の『地の章』、次に呪文の『海の章』最後に心の『空の章』。

様々な事が詳細に書かれていた。

オレは逸る気持ちを押さえながらアバンの書を読む。  
武術の『地の章』はオレには不要。

今のオレに必要なのは呪文の『海の章』だ。

「オレの知らない呪文…」

これはダイ大の特有の魔法だ…

契約の魔方陣も載ってる……」

オレは自分の手帳に一つ一つ、魔方陣を書き写していった。

「……こ、これは!？」

海の章の最後を見てオレは驚いた。

描かれていたのは、あの有名な『旅の扉』だった。

空間を歪め一定の場所に繋げる旅の扉。

流星に作り方は載っていなかったが、旅の扉が封印されている場所が載っていた。

その場所は『死の大地』。

どこに通じているかは不明だが、アバンによれば魔界に通じているかもしれない。

そも旅の扉を封じたのはアバンの家系らしい。

閑話休題

「ま、オレには関係ないか……」

オレはアバンの書を閉じた。

「……」

オレはもう一度アバンの書を開く。

どうにも気になるのだ。

オレはペラペラと頁をめくり最後の空の章を開いた。

目を通す。

オレは気づかない内に次第にその内容に引きこまれていった。

指でなぞりながら一文字、一文字を余すことなく読む。

ポタリ

「……あ」

気づかない内にオレは涙を流していた。  
不意にオレの心に過る自分の声。

『このままで良いのか…』

雫が頁を濡らしてしまい、オレは慌てて本を閉じた。  
オレはアバンの書を宝箱に戻して鍵を掛けた。

「戻ろう…ホルキア大陸に…！」

ダイ達を助ける。

オレにしか分からない事、オレにしか出来ない事。  
それがある。

先ずは新しい魔法を覚えよう。  
取り敢えずダイ達の側で色々と手助けしよう。  
幸いアバンの書にはルーラも載っている。  
巧く習得できれば一瞬でパプニカの町まで戻れる筈だ。  
それに明確な目的も出来た。

「キルバーン人形を手に入れる！」

黒の核が埋め込まれたアレを手に入れて道具袋に保管してしまおう！  
あの小悪魔キルバーンさえ殺つてしまえば楽にいくはず。  
黒の核が有れば大魔王を倒せるかもしれない。  
それに黒の核が人形に埋め込まれているのを知ってるのはキルバーン  
本人と冥竜王だけの筈だ。

手に入れてしまえばコッチのもの。  
決行は百貨店での邂逅の時。  
出てきた瞬間、ぶっ殺す…っ！

「…うまくいくはずだ」

オレは急いで図書館から出た。  
目指すのはちよっとだけ良い未来。エンディング

続く

本日のタケルのステータス

レベル23

さいだいHP：143

さいだいMP：585

ちから：60

すばやさ：150

たいりよく：72

かしこさ：290

うんのよさ：256

攻撃力：61

防御力：133

どうぐ

E：どくばり

E：ビロートマント

E：力の盾・改

E：幸せの帽子

E：スーパーリング

E：星降る腕輪

呪文・特技

錬金釜 採取 大声 口笛

寝る 忍び足 穴掘り 大防御

連続魔法 思い出す もっと思い出す

ホイミ ベホイミ

キアリー キアリク シャナク

メラ メラミ メラゾーマ

ギラ ベギラマ

イオ イオラ  
ヒヤド ヒヤダルコ ヒヤダイ  
バギ バギマ  
ドラゴラム  
ニフラム マホカトール  
フバーハ  
ラナリオン  
トラマナ レミール  
インパス アバカム  
ルールラ トベルール

本日の目玉商品『最後の鍵』（後書き）

色々と原作から離れていく内容を考え中です。

## 番外編 1 (前書き)

本日の目玉商品『最後の鍵』を呼んだ後にどうぞ。

本編とは一切関係ないです。

ポチポチとやっていきます。



## 番外編 1

「ここは、どこだ…?」

現在オレは訳の解らん場所にいる。

見る限りかなり怪しい場所だ。

空は紅いし薄暗い。

地面はドロドロとした沼地が続いている。

しかも温泉まである。

「どうしてこうなったんだっけ？」

思い出すのは興味本位で立ち入った死の大地。

アバンの書に記されていた『旅の扉』。

オレは好奇心に負けた。

首尾よく死の大地に足を踏み入れたオレは、真っ直ぐ旅の扉に向かった。

封印の扉を『アバカム』の呪文で開き中に入る。

四角い台座の中に青い渦の様な光が見えた。

オレは旅の扉に足を踏み入れて…。

「こうなった」

しかも…。

振り返ってみても旅の扉は見当たらない。

帰り道がないのだ。

「一方通行かよ」

それにしても本当にここはどこだ。  
もしかして本当に魔界か。  
たしか魔界って言うとな陽の光が届かない力が支配する世界。  
作物が育たないマグマと荒野が広がる魔物の世界…。

「まんまじゃん」

オレは顔から血の気が引くのを感じていた。  
マジでサーッと血の気が引いてくよ。  
もしも魔界の魔物に遭遇したら…。  
オレ、死ぬじゃん…。

「とにかく逃げよう…ルーラ！」

シーン…。

しかし何も起きなかった。  
オレは背中に嫌な汗が流れるのを感じた。  
もしかしてルーラが使えない。  
確かに習得したはずなのに…。

「……やばい、オレ死ぬかも」

オレはルーラでの脱出は諦めて歩くことにした。  
聖水を掛けて『忍び足』で移動する。

歩いても歩いても景色は相変わらず気味の悪い沼地と紅い空。

「ホントにどこだよ」

その時だった。

キーン、ギイーン！ギンギンッ！キンッ！

「刃物をぶつけ合う音…?」

誰かが戦っているのか?

危ない感じがする。

しかしこの場所の情報は欲しい。

手掛かりがない以上、ここは勇気を出して行動するしか無い。

「虎穴に入らずんば虎子を得ず…か」

オレは剣戟の音に近づいていった。

岩陰からそっと向を見る。

繰り広げられている戦いを見てオレは思わず息を飲んだ。

「オツパイだ…」

オレはプルンプルンと揺れている双丘に釘付けになる。

視線の先では二人の女戦士が激しい戦いを繰り広げていた。

金髪の女性と全身がピンク色の怪しい女性。

ピンク色の方はどう見ても…。

「ありや人間じゃないな…」

ドロドロとした身体を変化させながら戦うピンク色の女性。

間違いなく魔物の類だ。

「あ、おっばいミサイル」

ピンクの女性は乳首から液体を放出。

金髪の女性は躲しきれずにそれを受けてしまう。

飛沫が鎧に掛かる。

「お、おお！」

なんと鎧が溶けていくではないか！

あれは強力な溶解液のようだ。

金髪の女性の乳房が顕になる。

オレは思わず身を乗り出してしまった。

本気で眼福なんですが…。

ここは魔界じゃない、天国か！？

「ここまでのようね、レイナ…」

「くっ、まだまだ！」

レイナと呼ばれた女性は胸を隠そうともせず、剣を構えなおした。

ん、レイナ？

どこかで聞いたような…。

金髪、女戦士、オツパイとくれば…。

「あ、ここダイの大冒険じゃないや…」

ク、クイーンズブレイド、キタ（。）。（）！

オレはレイナのオツパイに釘付けになりながら立ち上がった。

や  
っ  
ち  
や  
っ  
た  
…

番外編 1 (後書き)

クイーンズブレイドです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2165z/>

---

ダイの大冒険でよろず屋を営んでいます

2012年1月13日00時57分発行